

第二〇〇号

明治四十年五月印刷

秋山海軍中佐講述

海軍基本戰術 第一篇

部外秘密

海軍大學校

海軍大學校長 坂本俊篤

命令

本書ニ依リ海軍戰術ヲ修得スヘシ

發行年月日

明治四十年四月三十日

學科卷數

記事

沿革

基本戰術

貳冊

本書ハ明治三十六年ヨリ全三十九年ニ
巨リ(其間日露戰役ヲ除ク)秋山教官カ第四期及第五
期將校科甲種學生ニ對シ兩回講述シタル
處ナリ

○ 正 誤

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
一九	四	アス	アラス	八三	五	遺法	遺法
二〇	二	〔暴露シ〕ノ下ニ	攻撃力及ヲ加フ	九四	四	括註〔第一ト第二〕 〔戦闘速力〕	〔第一ト第三〕 〔戦闘速力〕
二三	一三	信通機	通信機	九五	第十三圖	〔正面變換ヲ行フタルトキ〕ノ圖	甲隊ノ先頭(B)點ニ↑ヲ加フ
二四	九	疎通	疏通	九七	一五	〔次ニ〕ヲ削ル	
三六	九	商艦	商船				
三九	一二	二等巡艦	二等巡洋艦				
五八	七	流義ヲリ	流義ヲ執リ				
七三	第六圖	隊列	陣形				
七三	第六圖	備考〔二百米突〕ノ下ニ	ニヲ加フ				
七七	第八圖	第一陣列〔縦列〕ノ	〔800〕ハ戦隊ノ間				
八〇	第九圖	水雷戦隊	水雷聯隊				

海軍基本戰術

○緒言

茲ニ戰術ノ講究ヲ開始スルニ先チ、抑々戰術トハ如何ナルモノデ、又如何ニシテ之ヲ講習スルヤヲ明カニナシ置ク必要ガアルト認メマス。讀ンデ字ノ如クナレハ戰術ハ戰フノ術ナレトモ、我海陸軍ニテ慣用セル戰術ナル兵語ハ歐語ノ Tactics ヨリ來リ、其根源ハ Tact 即チ術數ナル語ニ發セルモノデアリマス。然シナガラ現時ノ「タクチックス」即チ戰術ノ定義ハ本校ノ兵語界說ニ記載シアルカ如ク、兵術 [Art of War] ノ一科デアリマシテ、主トシテ戰闘ニ於テ軍隊ヲ指揮運用シテ敵ト戰フノ技術、即チ簡單ニ言ヘバ戰闘術ヲ意味スルノデアリマス。然ルニ此ノ戰闘ナルモノ、範圍ニ限界ノアラサルモノデ、數隻ノ軍艦カ一小地域ニ於テ小時間戰フノモ戰闘ニシテ、又數千ノ大艦速艇カ數百方浬ノ大海面ニ於テ數日ニ亘リテ戰フノモ全シク戰闘デアリマシテ、從テ之ヲ行フ技術即チ戰術ニモ大小範圍ノ差異アルハ當然デアリマスカラ、單ニ戰術ト謂フモ兵力ノ多寡、戰地ノ廣狹、戰時ノ長短ニ準シテ種々ノ種別アルヘキ次第デアリマス。加之又戰闘ニ用ユル兵器ニ依リ種別スレハ或ハ砲戰術トナリ或ハ水雷戰術又ハ衝角戰術トナルヘク、將又艦種ヨリ種別スレハ艦隊對艦隊戰術、艦隊對驅逐隊戰術等トナリ、或ハ戰地ニテ種別スレハ海洋戰々術、海岸戰々術若クハ對要塞戰術モアルヘキモノニテ、斯ク種

別シ來レハ戰術ノ種別ト範圍ハ千種万態ニ分類セテバナラヌ事トナリマス。實ニ此戰術ハ人間ノ技術中最モ大ナルモノテアリマシテ殆ント萬有ノ元素ヲ此裡ニ包含セリト謂フヘキモノデ、人智ノ進歩スルニ伴ヒ幾何ノ種類ニナルカ、又何處迄大クナルカ殆ント見定メノ附カナイモノデアリマス。然レドモ方今世界ノ諸軍國ノ有スル海軍兵力ニハ年々歳々増大スルノ趨勢ヲ有スル内ニモ、自ラ或ル數量ノ限度カアリマシテ、二百隻以上ノ軍艦カ一戰場ニ戰フコトハ將來ハ知ラス、先ツ今日ハ皆無ト認ムルコトカ出來マス。又兵器進歩ノ程度モ大体ニ於テ我々カ今日知ルカ如キモノデ、近キ將來ニ於テ急ニ三十節ノ戰鬪艦カ現出スルトカ、有効距離八千米突ノ魚形水雷カ實用セラル、カ如キコトハアリマセン。尙ホ又戰場モ地球ノ表面中ノ一部分デ左程廣大ナラサルノミナラス、未ダ平面上ニテ戰フモノナレハ、吾人カ現在及近キ將來ノ海戰ニ對スル準備トシテ茲ニ講究セントスル戰術モ矢張り前述シタル或ル定限ノ兵力ヲ以テ平面ノ戰場ニ於テスル戰術ニテ事足リル次第デ、徒ラニ理想ニ馳セテ我々ノ一生ニ用ヒル可ラサルカ如キ突飛ノ大戰術ヲ研究スル必要モアリマセン。左ハアレ事物ノ發達ニ伴ヒテ戰術モ亦進歩シツ、アルコトハ吾人ノ銘記セテバナラヌ處デ、兵力兵器ノ増大進歩ト共ニ之ヲ活用シテ戰鬪スル方法即チ戰術ノ改良ハ一日モ忽ニスルコトハ出來マセン。殊ニ海軍兵器ノ進歩ハ陸軍ニ比スレハ非常ノ速度ヲ以テ年ヲ逐フテ進歩シマスカラ、決シテ今日研究シ置キタル戰術カ何時迄モ其用ヲナスモノト安心シテ居ルコトハナリマセン。今一例ヲ引カンニ吾人カ茲ニ海上ノ平面ニ於ケル戰術

ヲ研究シツ、アル間ニ、現時己ニ頭角ヲ現ハシ來リタル軍用輕氣球又ハ潜水艇等カ尙ホ益々發達シテ
巡洋艦カ空中ヲ飛行シ戰鬪艦カ水中ヲ潛航スルニ至ツタト想定シテ見マスレハ、最早此時ノ戰場ハ平
面的ニアラズシテ立体的デアリマス、今日ハ前後左右ヲ警戒スレハ事足レトモ其時節ニハ更ニ上下ヲ
モ警戒セサル可ラサル事トナリマシテ、大砲ハ九十度ノ仰角ト九十度ノ俯角ヲ附ケテ上若クハ下ヨリ
來ル敵艦ヲ射撃セテバナラヌコトモアリマシヨウ。其時ニ當リ吾人カ今研究セル所謂平面戰術ガ何
ノ用ヲナシマシヨウカ、獨リ戰術ノミナラス現時全盛ノ海軍ハ無用ノ古物トナツテ空軍萬能ノ時節ト
モナリマシヨウ、之レ實ニ極端ナル例證デアリマスガ事物ノ進歩ハ凡テ此ニ至ラントスルノ趨勢ヲ
有シテ居リマシテ、年月ト共ニ此方向ニ進ミツ、アルノデアリマス、去レハ我々ハ理想ニ馳セテ一生
ノ役ニモ立タヌ戰術ヲ講究スルノ必要ナキヲ知ルト全時ニ世運ノ進歩ニ伴ヒ間斷ナク戰術ノ改良研究
ニ努メサル可ラサルコトヲ銘心セテバナリマセン。然ラバ如何ニシテ此戰術ヲ講究スルカト言ヘバ即
チ本校ノ教則ニ掲ケアルカ如キ溫古知新ノ教法ニ依ルノ外他ニ講究ノ方法ハ無イノデアリマス、左ニ
之ヲ列記スレバ

一、古今ノ名將兵家ノ著書言行等ヲ資トシテ兵術ノ原則ヲ討究シ、之ヲ近時ノ海戰ニ應用スル方法ヲ
説明シ、以テ兵術ニ關スル智識ヲ啓發シ思想ヲ練磨ス

二、古今ノ戰史ヲ研究シ、主トシテ各種戰例ニ於ケル成敗利鈍ノ分ル、原因ト結果并ニ此因果ノ關係

經路等ヲ討査シ、以テ兵理ノ存スル處ヲ明カニスルト全時ニ將來ノ實戰ニ於テ則ルヘキ要點ヲ摘示ス

三、兵棋及圖上演習并ニ對策作業等ニ依リ近世兵術ノ計畫實施ニ關スル利害得失ヲ研究シ、且ツ之レニ據リ戰陣ニ處スル觀察力、判斷力、機智、決斷等ヲ陶冶ス

四、兵術ノ計畫實施ニ欠ク可ラサル戰務ヲ講究シ、執務上ノ技能素識ヲ得セシム

五、實地演習ヲ見學シ并ニ各戰略地點軍港要塞等ヲ視察シ、以テ坐上講究ノ足ラサル處ヲ補ヒ且ツ用兵作戰ニ關スル一般ノ見識ヲ増進セシム

然レトモ如上ノ諸法ハ唯是レ坐上ノ講習ニ過ギサルモノデ、此講習ヲ了リタリトテ直ニ戰場ニ於ケル實地ノ達人トナレル次第デアリマセン。戰術ハ諸他ノ技術ト等シク實地ノ活術ニシテ紙上ノ死學デアリマセンカラ、如何程學理ニ長シタリトテ技術ノ妙用ハ出來得ルモノデハ無ク、例ハ繪畫術ニ於ケルカ如ク眞ニ迫レル名畫ヲ畫キ出スコトハ筆ノ使ヒ方ノ調子デロヤ筆ニテ教ヘラレルモノデナイノト同様デアリマス。其調子ハ數掛ケテ數多ノ寫生ヲスルトカ又ハ古畫ニ手本ヲ取テ習フトカセテバ上達スルモノテハアリマセン。夫故ニ戰術ノ研究モ矢張戰場ノ場數ヲ蹈テ實地ニ講習スル必要カアリマスケレトモ、實戰ハ己ニ國家ノ存亡ヲ賭セル一大事ナレバ講習トシテ濫ニ屢々スヘキモノテハアリマセンカラ、不充分ナガラ可成的實戰ニ近邇セル實地演習若クハ兵棋演習ニテ之ヲ補ヒ、尙ホ又古今ノ

戰例ヲ研究シテ手本ヲ古書ニ取ル方法ニ依ル次第デアリマス。又本日ヨリ開始スル講義ノ如キハ恰モ繪畫ニ於テ繪具ノ配合法トカ、筆ノ持方トカヲ教ユル位ノ程度ノモノデ、固ヨリ之ヲ以テ戰術ノ眞髓ヲ得タルモノテハアリマセン。殊ニ基本戰術ハ所謂基本的ノ講究ニシテ單ニ有形的要素ニ基キテ有形的方術ヲ研究スルニ止リ、無形の心術ノ範圍ニハ入りマセン。此心術ニ關スルコトハ又應用アップライド戰術タクチックスノ科ニテ講究致シマス。然シナカラ基本ノ素識ヲ固メル事ハ凡百ノ學術ニ於テ最モ必要デアリスカラ、此基礎ヲ固クスルコトニハ充分ニ注意アランコトヲ望ミマス

終ニ臨ミ古今ノ名將達士カ兵術ノ講究ニ關シ後學ニ教訓シタル處ヲ列記シマシテ本職ノ足ラサル處ヲ補フテ置キマス

○奈破翁曰ク兵術ハ決シテ戻背ス可ラサル原理ニ基ケルモノナリ、而シテ凡百ノ兵戰ハ兵術ニ據リテ實施シ得ルモノナルカ故ニ能ク其理ヲ精思熟慮スルニアラサレハ絶テ成效スルコト無シ、古來名將ノ偉功ヲ立テタル所以ヲ觀察スルニ唯タ兵術ニ於ケル自然ノ兵理ヲ遵守スルニ過キス、假令非常ノ膽略ヲ用ヒテ功ヲ奏スル者アリト雖モ皆茲ニ基カサルハナシ、故ニ兵術ノ要ヲ得ント欲セハ須ク古今ノ戰史ニ於ケル名將ノ爲シタル處ヲ精密ニ研究シテ之レニ模倣スルヲ力ムベシ、是レ兵術ノ奧義ヲ究ムル無二ノ良法ナリ

○「マルモン」曰ク用兵ノ大理ハ冗多ナルモノニアラスト雖モ、其實施ニ當リテハ之ヲ變化スヘキ百事輻輳シ、悉ク之ヲ先見シテ豫メ其處分ヲ立ツルコト頗ル難シ

又曰ク能ク其目的トスル所ヲ考ヘ而シテ之ヲ達セントスル手段ヲ求ムルトキハ遂ニ兵理ノ存スル所ヲ發見スヘシ、兵術ナルモノハ一ツニ其兵理ノ利用ニ過キササルナリ

○「ルヴァール」曰ク兵學ハ丈夫ノ心膽ヲ練磨スル格物致知ノ學ナリ、而シテ其効ヲ得ルハ投機ト神速トニアリ、戰場多端ノ難事ヲ立トコロニ決センニハ其當ニ爲スヘキモノト爲ス可ラサルモノトヲ判別シテ理非ニ惑ハサルニ在リ、若シ躊躇スルトキハ機ハ忽チ去ラン、故ニ豫メ之ヲ審ニシ自信ノ識見ヲ具有シテ戰場ニ臨マサルヘカラス、此ノ如キ識見ヲ具有スルノ士ハ眞ニ國家ノ至寶ニシテ、恰モ完全ナル武庫ト謂フ可ク、能ク機ニ應シテ無限ノ甲兵ヲ製出ス、夫ノ學識ヲ備ヘサル將校ハ事ニ當リテ徒ラニ他ノ指導ヲ待タン、而シテ指示果シテ至ルヤ否ヤ是レ期ス可ラサルナリ

○「ビュジョウ」曰ク豫メ兵理ヲ講究セスシテ危急ノ際之レヲ應用スルコトヲ得ヘキヤ、事々物々必ス其據ルヘキ所有リテ其爲スヘキ決斷ヲ要ス、豈ニ之ヲ妄斷ニ附スヘケンヤ

夫レ兵戰ノ事タルヤ豫メ察知スヘカラルサルモノ固ヨリ已ニ多シ、況ンヤ推考シテ知り得ヘキモノ焉ン之ヲ等閑ニ附スヘケンヤ

又曰ク講習實驗偏廢ス可カラズ眞ニ卓越ノ將校ト言フヘキモノハ必ス此二者ヲ兼備ス、凡テ兵戰ハ

機變ニ應スヘキモノナレバ兵術ニ於テ確乎タル原則ヲ定メ難シ、故ニ苟モ指揮官タルモノハ能ク兵戰ノ原理ヲ服膺シ。事ノ不意ニ出ルニ應シ之ヲ轉シテ我利ト爲スコトニ着眼スヘシ

○「ブルーメ」曰ク予ハ諸子ニ勸告ス、能ク多端複雑ナル兵戰ノ諸現象ヲ判別シ此等ノ現象ノ各個ニ就キテ單純自然ノ原理ヲ探求シ、苟モ形式ニ拘泥セス博識ヲ假裝セス、以テ其原由ニ對スル結果如何就中此兩者ノ關係ヲ討究サレンコトヲ、此趣旨ヲ以テ兵戰ヲ講習スル者獨リ能ク理會明晰、判斷確實ニシテ其自信ヲ堅固ナラシメ、有事ニ當リ敵前ニ其部下ヲ統率シ身邊ヲ圍繞スル外部ノ衝力ト内部ノ繁劇トニ畏縮セス、單一ニシテ理勢ニ合シ且ツ秩序整然トシテ兵戰ヲ主宰スルヲ得ヘシ、蓋シ軍神ハ唯タ深慮卓見ニシテ氣力ヲ具ヘ且ツ好ンテ事ニ從フ者ニ勝利ノ榮冠ヲ授クヘシ

○吳子曰ク凡ソ人ノ將ヲ論スル常ニ其勇ヲ觀ル、勇ノ將ニ於ケル數分ノミ、夫レ勇ハ必ス輕ク合ス、輕ク合シテ利ヲ知ラサレバ未タ可ナラサルナリ、故ニ將ノ慎ムベキ所五アリ、一ニ曰ク理、二ニ曰ク備、三ニ曰ク果、四ニ曰ク戒、五ニ曰ク約

○「ハムレー」曰ク兵術ヲ講究セントスル者ハ須ク事實ヲ理會スル爲メニ原理ノ識見ヲ要シ、又原理ヲ探明センカ爲メニ事實ノ識見ヲ要ス、而シテ此等ノ識見ヲ得ルノ方法ハ唯タ深ク戰史ヲ攻究シテ自ラ兵理ヲ構成シ得ル迄熱心ニ之ヲ繼續スルニアリ

○「マハン」曰ク戰史ヲ講究セル將校ハ戰術ノ變更ハ兵器變更ノ後ニ起リシノミナラス、其間（戰術ノ變

更ト兵器變更トノ間、過當ニ長カリシコトヲ觀察シ得ヘシ、蓋シ此ノ原因兵器ノ改良ハ一二個人ノ力ニ依リ之ヲ遂クルヲ得ルモ、戰術ノ變更ニ至リテハ守舊的多數將校ノ慣性ヲ打破スルヲ要スルヲ以テ一朝一夕ニ成就スル能ハサルニアリ、是レ實ニ痛嘆スヘキ大弊害ナリ、此ノ弊ヲ除カンニハ唯々公明ノ心事ヲ以テ古來戰術ノ各變史ヲ觀察シ、現時ノ新艦船及新武器ノ勢力ノ極度如何ヲ考察シ各其素質ニ準シテ之ヲ利用スルノ方法ヲ講究スルニ在リ、乃チ以テ能ク新戰術ヲ構成シ得ヘキナリ、軍人カ此方法ヲ講究スルハ決シテ徒勞ニアラサルノミナラス、常ニ此方法ヲ講究シタルモノハ必ズ戰場ニ臨ンテ勝利ヲ博スルコト古來歴史ノ明示スル所ナリ

○奈破翁曰ク、若シ無識ニ依リ二人ヲ死セシメテ足ルベキコト二十人ヲ失ヒタランニハ其八人ノ生命ニ對シテハ無識ノ責任免ル可ラズ

「子ビーヤ」將軍モ曰ク、無識ナル將校ハ殺人犯ナリ、幾多ノ勇士ハ無識將校カ知リタル風ヲ裝フニ欺カレ之ニ信賴シテ死ヲ願ミス忠勇ナル鮮血ハ無益ニ流サル、噫無識將校ハ何ヲ以テ此ノ無用ノ流血ニ應ヘントスルカ、余ハ多年專心兵事ノ研究ニ熱中ス、然レドモ尙ホ己ノ足ラサルニ戰慄スルナリ

「ハルト」將軍モ亦曰ク、凡ソ軍人タル者ハ間斷ナク切磋琢磨シ以テ智識ヲ得ルコトニ勉メサルヘカラス、然ラザレバ其無識ハ勇俠ナル部下ヲ犬死セシムルコトアルベシ。古來幾多ノ戰鬥カ單ニ將帥

ノ無識ノ故ヲ以テ敗衄ニ歸シタルコト枚擧スヘカラズ、而テ其智識ハ既往ノ實驗ニ依リテ得ヘカリシモノナリキ、彼ノナイルノ戰ニ於テネルソントブルーエーハ共ニセントキツツニ於ケルフールド將軍ノ二戰鬪ノ研究ニ依リ利益ヲ得ヘカリシニ、獨リネルソンハ之ニ鑑ミブルーエーハ之ヲ學ハス、之レカ爲ニ後者ハフールドト同一ノ境遇ノ下ニ在テ大敗シタリ

明治三十六年四月

秋山海軍少佐述

○海軍基本戰術目次

第一篇 戰術ノ要素

第一章 戰鬪力ノ要素

第一節 總說

第二節 攻擊力

第三節 防禦力

第四節 運動力

第五節 通信力

第六節 結論

第二章 戰鬪單位ノ本能

第一節 總說

第二節 戰艦ノ本能

第三節 巡洋艦ノ本能

第四節 通報艦、海防艦及砲艦ノ本能

第五節 驅逐艦、水雷艇及潛水艇ノ本能

頁
一 一
二 二
一一 一六
一二 二二
一四 二四
二七 二七
二七 二七
三〇 三〇
三六 三六
三九 三九
四一 四一

目次

第三章 艦隊ノ編制

第一節 總說

四五

第二節 戰隊ノ編制

四九

第三節 水雷戰隊ノ編制

五一

第四節 大艦隊ノ編制

五三

第四章 艦隊ノ隊形

第一節 總說

六〇

第二節 戰隊ノ隊形

六二

第三節 水雷戰隊ノ隊形

七〇

第四節 大艦隊ノ隊形

七五

第五章 艦隊ノ運動法

第一節 總說

八二

第二節 戰隊及水雷聯隊ノ運動法

八七

第三節 大艦隊運動法

一〇四

第四節 結論

一〇九

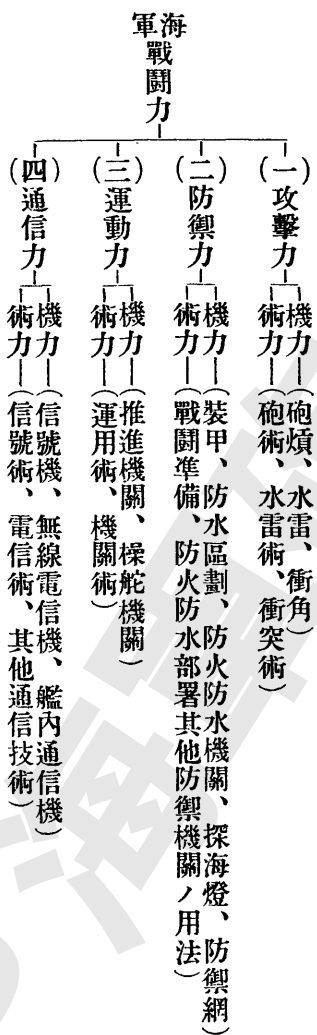
海軍基本戰術

第一篇 戰術ノ要素

第一章 戰闘力ノ要素

第一節 總說

○凡ソ戰闘ニ於テ兵軍カ其敵ト交戦シ得ルモノハ戰闘力ヲ保有スルヲ以テナリ、戰術ハ即チ此力ヲ適當ニ運用シテ敵ト戰フノ技術ナルカ故ニ戰闘力ハ戰術ノ因ツテ成立スル力素タルモノナリ。而テ戰闘力ハ又諸種ノ要素ヨリ組成サル、モノニシテ、今海軍ノ戰闘力ヲ其要素ニ分拆スレハ大要左表ノ如シ



戰闘力ハ實ニ前表ノ如キ雜多ナル要素ヨリ成レリ、尙其各個ニ就キ精細ニ分拆スレハ更ニ複雑トナルベシ。此等要素ノ優劣強弱ヲ精密ニ比較判別スルハ蓋シ至難ノ事ニシテ、機力要素ハ略ホ其力量ヲ測度

スルヲ得ヘシト雖モ術力要素ニ至リテハ元ト是レ無形ノ人能ニシテ自軍ノモノト雖モ容易ニ判定スルコト難シ、況ンヤ敵軍ノモノニ於テヲヤ。然リト雖モ此等戦闘力ノ優劣カ戰術ノ力量ヲ成シテ戰鬥ノ勝敗ヲ支配スルモノナレバ若シ此要素劣弱ナルトキハ如何ナル巧妙ノ戰術モ施スニ途無シ、故ニ各軍國ニ於ケル平時大小ノ軍事經營及軍事教育ハ主トシテ此要素ヲ優大ナラシムルヲ目的ト爲セリ。而テ吾等兵術ヲ研究スル者ハ此戰鬥力ヲ増大スルト同時ニ其各要素ノ力量ヲ精密ニ測定スルニ勉メサル可ラス、何トナレバ此ノ力量ヲ知ラスシテ戰術計畫ヲ策定スルコト能ハザレバナリ

此等各要素ノ力量ヲ比較スルニハ先ツ攻撃力ヲ第一位ニ置キ以下防禦力、運動力、通信力ノ順序ニ從フヲ正當トス。今單ニ戰術上ヨリ其重要ノ程度ヲ比較スレハ攻撃力五、防禦力二、運動力二、通信力一ノ比例ニ準スルモノト見テ可ナリ。又各要素ニ就キテ其力量ヲ算定センニハ機力ノ比例ニ術力ノ比例ヲ相乘セサル可ラス、例ハ砲十二門ヲ有シ其砲術百發四中ノ練度ヲ有スル艦ハ $12 \times 40 = 480$ ヲ以テ砲ノ攻撃力量トスルカ如シ。而テ若シ對抗艦艇ノ戰鬥力ヲ比較算定セントセバ各種機關及其技術ノ力量ニ就キテ一定ノ係數ト單位ヲ設ケ綿密ナル計算ヲ重テサル可ラス

以下更ニ各要素ニ就キ節ヲ分チテ之ヲ詳説シ、且ツ現時ニ於ケル其發達程度如何ヲ討究セントス

第一節 攻撃力

○夫レ戰鬥ノ本旨ハ攻撃ニアリ、攻撃無クシテ戰鬥ノ成立スル能ハサルヲ知レハ戰鬥力素トシテ攻撃

力ノ主要タルコト言フヲ俟タサルナリ。若シ茲ニ攻撃力絶大ナル一艦アリトセンカ、其艦ハ防禦力、運動力、通信力ヲ保有セスシテ單獨洋中ニ孤立静止スルモ之レニ對シ其戰鬪距離以內ニ近接スル敵ハ悉ク擊滅サルヘシ。是レ極端ノ引例ニ過キサレトモ又以テ攻撃力カ戰鬪力ノ主力タルヲ證明スルニ足ルナリ、故ニ各軍國ノ造艦一ツトシテ之レニ重キヲ措カサルハ無シ

○現時ノ海軍ニ於テ攻撃力ノ有形的機力ハ砲煩、水雷及衝角ノ三武器ニシテ其力量強弱ノ比較ハ今日モ尙ホ前記ノ順序ヲ保チ、依然砲煩ハ有形的攻撃力ノ首位タルヲ失ハス。其理由ハ蓋シ左ニ列記スル長所アルヲ以テナリ

- 一、其裝備比較的容易ニシテ最多數ヲ裝載シ得ルコト
 - 二、其加害距離比較的的最大ナルコト
 - 三、其抵抗物ニ對スル穿入力比較的的最大ナルコト
 - 四、其照準發射比較的確實迅速ニシテ加害力ノ公算最大ナルコト
 - 五、其構造比較的簡單ニシテ損傷最少ナルコト
- 魚形水雷ハ唯タ其破壞力比較的的最大ナルト其飛行線ノ較ヤ平低ナルトノ利點ヲ有スルノ外前記砲煩ノ長所ニ及ハス、故ニ今尙ホ第二位ニ立タサルヲ得サルナリ。然レトモ近時直進器ノ創造ニ依リ較ヤ其照準發射ノ困難ヲ輕減シ、且ツ氣壓ノ増加ニ依リ其加害距離ヲ伸長シツ、アルカ故ニ漸次ニ其効力ヲ

増進セントスルノ傾向アリ。加之多數ノ輕艇ニ之ヲ裝備シ一團ヲ成シテ迅速ニ敵ニ近ツキ接戦スルトキハ其加害公算ヲ大ニシ、特ニ夜戦ニ於テハ砲煩ニ代リテ其威力ヲ逞フス、又白晝ト雖モ其數多キトキハ之ヲ利用スルノ機會少ナカラサルナリ

衝角ニ至リテハ元ト是レ艦体ニ附着セル副裝武器ニシテ、其加害距離皆無ナルカ故ニ砲煩水雷ノ威力益々増進セル今日ニ於テ、其加害半徑ヲ通過シテ衝角ノ効用ヲ現ハシ得ルハ殆ント不可能ニ屬ス、而カモ一タヒ方向ヲ過ツトキハ却テ敵ニ衝突セラル、ノ虞アリ。故ニ衝角ハ己ニ無用ノ長物ト化シ去リ唯タ無キニ優ルト、浮泛力保持ノ關係ヨリ尙之ヲ艦首ニ附着セルモノアルニ過キス

前記有形的攻撃力ノ力量ヲ増進セシムルハ主トシテ造兵家ノ責任ニ屬スト雖モ、用兵ノ任務ヲ有スル將校モ亦之ヲ要求督促スルノ義務アルモノトス、而テ砲煩及魚雷ニ期望スヘキ刻下ノ要件左ノ如シ

(砲煩)

一、砲身及裝藥ノ改良ニ依リ尙ホ彈道ヲ平低ニシ、加害距離ヲ増大スルト共ニ均一初速ヲ得セシムルコト

一、彈丸及信管ヲ改良シ早發ノ虞無カラシメ、且ツ穿入力ヲ高ムルコト

(魚雷)

一、加熱裝置ヲ氣室ニ附着シテ氣壓ヲ高カメ、加害距離及飛行速度ヲ増加スルコト

一、直進機ヲ簡單強固ニシテ戰用ニ適セシムルコト

一、照準機ヲ改良シテ照準發射ヲ確實迅速ニシ且ツ長距離發射ニ適セシムルコト

之ヲ要スルニ砲煩及水雷ハ尙ホ其機能ヲ増大スルノ餘地少カラサルカ故ニ益々之レカ改善ヲ企圖シ、以テ戰鬪力要素ノ首要部ヲ占有セル攻撃力量ヲ増加セサル可ラサルナリ

○攻撃力ノ無形的術力ハ有形的機力ヲ活用シテ其潛力ヲ現力ニ變化シ或ル成功 (Work done) ヲ爲サシムルモノニシテ (機力) × (術力) = (攻撃力) タルコトハ已ニ前記セルカ如シ。故ニ若シ術力ヲ零トスレハ幾何ノ機力ヲ之ニ乗スルモ攻撃力ハ依然零ナリ、之ニ反シ機力少キモ術力大ナルトキハ其攻撃力量ノ大ナルコト $10(\text{機力}) \times 3(\text{術力}) = 30(\text{攻撃力})$ 、 $5(\text{機力}) \times 8(\text{術力}) = 40(\text{攻撃力})$ ヲリ小ナルヲ見テ知ルニ足ルナリ。實ニ砲ト云ヒ水雷ト云ヒ皆死物ニシテ之ヲ活用スル術力アリテ其功力ヲ發揮スルモノナルモ、有形ハ人目ニ感シ易ク無形ハ視テ見ヘサルカ故ニ、此理ヲ知リツ、尙ホ有形的機力ノミニ眩惑シ、無形的術力ノ練磨ヲ忽ニスルノ傾向アルハ古今ノ通弊ニシテ實戰ニ臨ミ一敗地ニ塗レタル後初メテ之ヲ悔悟スルモノ多シ

之レト同時ニ尙ホ一言スヘキコトアリ、他無シ、人ノ術力ヲ論スルモノ罪ヲ機力ノ欠點ノミニ歸セントスルコト是レナリ。夫レ吾人ノ業務ニハ造兵ト用兵ノ分業アリテ前者ハ機力ヲ掌理シ後者ハ術力ヲ担任スト雖モ、造兵家ノ供給セル兵器ハ本來決シテ完善無欠ノモノニアラスシテ造兵術上免ル可ラサ

ル幾多ノ欠點ヲ有セリ。用兵家ハ此等欠點ノ改善ヲ要求スルノ義務アリト雖モ己ニ受領現有セル兵器ニ對シテハ其欠點アルヲ知リテ之ヲ最大有効ニ活用スルノ道ヲ講究セサル可ラス。本來術力ノ必要アルハ兵器カ完善ナラサルカ爲メナリ、若シ夫レ造兵家ノ丹精ニ依リ兵器ノ構造愈々精巧トナリ、例ハ單ニ一小電鑰ヲ壓下シテ全砲ヲ適當ニ照準發射シ得ルニ至リタリトスレハ用兵家ハ終ニ殆ント術力ヲ要セサルニ至ラン。現ニ今日ノ砲煩カ砲機ノ改良ニ依リ昔日ノ如ク照準索、側索、牽索等ヲ操ルノ術力ヲ要セサルニ至リタルヲ見テモ、造兵家ノ工夫意匠カ漸次ニ機力ノ欠點ヲ改良シテ用兵家ノ術力ヲ輕減シツ、アルヲ知ルニ足ルナリ。故ニ曰ク、術力ハ機力ノ欠點ニ伴フテ必要アルモノナリ、此必要ノ因テ來ル原由ヲ知ラスシテ漫ニ機力ノ欠點ヲ訴フルカ如キハ決シテ用兵家ノ本分ニアラサルナリ

現時ニ於ケル攻撃力ノ無形的術力ハ其有形的機力ニ基キ砲術、水雷術ヲ以テ最要トス、本篇戰術ヲ講究スルニ當リ此等專科技術ニ就キテ詳論スルノ要無シト雖モ聊カ左ニ其梗概ヲ說キ戰鬪力要素ノ増大ニ資セントス

(砲術)

戰術上ヨリ要求セル砲術ハ唯一ノ射擊ニシテ射擊ノ目的ハ可成の短時間ニ可成の多數ノ彈丸ヲ目標ニ命中セシムルニアリ、此目的ニ適應セシメンニハ砲術ヲ左ノ三分業ニ區別スルヲ可トス

- 一、砲機ノ整備
- 二、射擊ノ指揮
- 三、照準發射

第一、砲機ノ整備ハ砲本來ノ機能ニ缺損、誤差ナカラシムルニアリテ、特ニ照準機具ヲ正當ニ調整スルコト最モ必要ナリ。此根本ノ欠點ヲ矯正セスシテ射撃ヲ行フハ尙ホ矢ヲ曲テ的ヲ射ルカ如シ

第二、射撃ノ指揮ハ射撃目標ノ距離ヲ迅速確實ニ測定シ射撃諸元ノ修正ヲ加減シ正當ノ射距離及苗頭ヲ迅速確實ニ指示スルニアリ。此指揮宜シキヲ得スシテ發砲セシムルハ尙ホ眼ヲ閉テ矢ヲ放ツカ如シ

第三、照準發射ハ迅速ニ裝彈シタル後指示サレタル射距離及苗頭ヲ以テ迅速確實ニ照準發射ヲ行フニアリ、此分業ハ射撃術ト謂ハンヨリハ寧ロ操砲術ト謂フヲ適當トス。何トナレハ裝彈ヨリ發射ニ至ル迄單ニ指示サレタル射距離苗頭ニ基キ砲ヲ操リ照準線ト目標トヲ一致セシメ引金ヲ曳ク迄ノ機械的作業ナレバナリ

前記三分業ノ内第一、第二ハ將校ノ責務ニシテ第三ハ下士卒ノ担任ニ屬シ、此三分業並備シ始メテ射撃ノ成績ヲ擧クルコトヲ得。若シ之ヲ混同スルトキハ射撃ノ訓練ニ當リ命中成績不良ナルモ其責任ノ歸スル處無ク、又其原因ヲモ發見スル能ハス。從テ爾後發射ノ修正資料無ク、唯射手ノミヲ責メテ高價ノ彈丸ヲ無意味ニ海中ニ投棄シ、以テ射撃ノ能事了レリトナスニ至ラン。而テ此三分業中直接ニ最モ必要ニシテ最モ練磨ヲ要スルモノハ射撃ノ指揮ナリ、下士卒ノ担任セル照準發射ノ訓練ノ如キハ照準機具ノ精巧トナリタル今日比較的其多キヲ要セス

射撃指揮ノ難事タル所以ハ他無シ、射撃諸元ノ基礎眞ニ薄弱ニシテ終始動搖スレバナリ、試ニ射撃諸元ノ由テ來ル根源ヲ探究セハ思半ハニ過キルモノアラン。吾人ニ供給サレタル砲其物ニハ本來己ニ固有ノ偏癖アリ、次テ數回ノ射撃ヲ重ヌルトキハ其ノ發射度數ニ準シ初速ニ變差ヲ生スルノミナラス、一回ノ射撃中ニモ初彈ノ發射ト爾後數彈ノ發射トニハ砲膛熱度ノ高低ニ依リ更ニ初速ノ差アリ、又裝藥其物モ本來同質同密度ノモノナク受領後モ外氣ニ感シテ多少其壓力ヲ變シ從テ又初速ヲ變化ス、加之風力、氣壓ノ如キ外部ヨリ不定ノ力ヲ以テ彈道ニ影響スルモノアリ。此等諸因ヲ綜合スレハ吾人ハ未タ砲其物ニ信用ヲ置クコト難ク、彼ノ射表ノ如キ唯タ一砲數回ノ發射試驗ニ依リテ成レルモノ等ニ信賴スル能ハサルナリ。尙ホ此上ニ射撃ノ指揮ヲ困難ナラシムルモノハ目標タル敵艦ノ距離、速力、針路ノ測定是レナリ、砲煩ノ加害距離延長シテ戰鬥距離ノ益々増大スルニ從ヒ愈々此困難ヲ大ニス。現時ノ距離測定機ハ二千米突以上ニ及ヘハ己ニ漸加ノ誤差アルノミナラス視差又之レニ伴フ。吾人ノ現有セル八吋砲ヲ以テスルモ四千米突ノ射距離ニ於テ若シ前後百米突ノ誤測アルトキハ最早其彈丸ハ標高二十呎ノ目標ニモ命中セザルナリ。而カモ射距離ハ艦船速力ノ増進ニ伴ヒ轉瞬ノ間ニ數十米突ヲ伸縮ス、射距離ノ號令ハ果シテ發射ノ時機ニ適應スル如ク下シ得ヘキカ。吾人ハ到底此ノ如キ砲機ヲ以テ射彈ノ命中ヲ期スル能ハス、惑ハザラント欲スルモ得可カラサルナリ。是レ蓋シ信賴シ難キ基礎ニ信賴シテ強テ射法ヲ構成セントスルノ罪果ニシテ、之ヲ矯正センニ

ハ即チ砲其物ノ常ニ信用シ難キコト、及射距離苗頭ノ變化急劇ナルコトヲ基礎トシテ其射法ヲ研究
練磨スルヲ要ス、而テ其方法ハ先ツ砲機ヲ整備シ砲固有ノ誤差ヲ最小ニ減少シ、且ツ爲シ得ル限り
一指揮ノ下ニアル各砲ノ誤差ヲ均一ナラシメ、然ル後彈着觀測ニ依リ每發射距離苗頭ヲ修正シツ、
射擊ヲ續行スルノ外他ニ手段アラサルナリ。故ニ彈着觀測ハ射擊指揮ノ最要業務タルモノナリ

(水雷術)

水雷術ニ對スル戰術上ノ要求モ砲術ニ異ル處無シ、魚雷ハ水中ヲ飛行スル彈丸ニシテ發射管ハ之ヲ
發放スルノ砲煩ナリ、理ニ於テ己ニ全等ノ武器タルヲ失ハス。然ルニ魚雷ノ命中公算比較的ニ僅少
ナルモノハ蓋シ左ノ諸項ニ起因スルナラン

- 一、其構造薄弱ニシテ取扱上ノ不注意等ヨリ其機能ヲ失シ易ク未タ充分實用武器ニ適セサルコト
- 二、其飛行速力艦船ノ速力ト大差ナキヲ以テ發射後之レヲ避ケ得ルノ餘地アルコト
- 三、其加害距離比較的短少ナルヲ以テ發射位地ニ達スル前敵ノ防禦砲火ニ妨害サル、コト
- 四、其照準機ノ構造比較的粗簡ニシテ此精巧ナル武器ノ使用ニ適セサルコト
- 五、敵艦ノ距離針路及速力ノ測定困難ナルコト

六、敵艦ニ對シ發射位地ヲ占ムルニ時間ヲ要シ且ツ之レヲ占ムルモ敵ノ運動ニ依リ直ニ之ヲ失フ

コト

七、驅逐艦水雷艇ノ如キ動搖セル艦上ヨリ正當ニ照準發射スルノ困難ナルコト

前記諸因ノ中第四項以上ハ機力ノ缺點ニ屬シ、第五項以下ハ術力ノ困難ニ屬ス、特ニ敵艦速力及針路ノ測定ノ如キハ白晝ト雖モ尙ホ至難ナリ、況ンヤ暗夜ニ於テヲヤ。然レトモ此等ノ缺點困難アルヲ知リテ之レヲ最大有効ニ活用スルガ用兵ノ職ニアル者ノ本分ニシテ、己ニ其武器ヲ受領シタル後機力ノ缺點等ヲ恨ムハ愚痴ナリ。魚雷命中公算ノ少キ病源前記ノ如シトスレハ、之ヲ用フルニ當リ須ク此等病源ノ各箇ニ就キ治療ヲ施シツ、之ヲ使用スヘシ、西哲曰ク爾ノ刀短カケレハ一步進ンテ之ヲ長クスヘシト、魚雷ノ加害距離短少ニシテ飛行速力遲緩ナレバ艦艇其物ノ優大ナル速力ヲ利シテ敵ニ近接シ優速ナル乙種水雷ヲ發射スルヲ可トス。是レ最良最簡ノ治療法ニシテ、攻撃時間ヲ短縮シテ間接ニ敵ノ防禦砲火ヲ滅殺シ、且ツ敵ノ針路、速力等ノ誤測ヨリ生スル不命中ノ原因ヲ排除シ、我カ照準機ノ不具ヲモ補正シ得ルニアラスヤ。若シ夫レ甲種水雷ニ至リテハ到底夜戰ノ武器ニアラス、唯タ晝間ノ艦隊戰闘ニ於テ敵ノ隊列中ニ發射シ、其全長ノ約四分ノ一ヲ占メタル敵艦底ノ何レニカ命中スルノ公算ヲ僥倖シ得ルニ過キズ、單艦ニ對シ甲種水雷ヲ發射スルカ如キハ抑モ武器ノ性能ヲ知レル者ノ爲スヘキコトニアラス

斯カル間ニ魚雷ノ機能ハ漸次ニ發達シツ、アリテ、速力三十五節有効距離四千米突ノ魚雷ノ出現スヘキハ遠キ將來ニアラス、水雷ノ前途ハ頗ル多端多望ニシテ終ニ砲熾ト拮抗スルニ至ルハ近キニア

ラン、斯術ノ練磨決シテ忽ニス可ラサルナリ。而テ其練磨ハ單ニ水雷發射ヲ以テ足レリトセス、必ス各種ノ速力ヲ以テ種々ノ方向ニ運動スル動的ニ對シ(爲シ得レハ)先ツ發射位地ヲ占メ、次テ發射ヲ行フコトニ習熟セサル可ラス。今日ノ所謂水雷發射ノ如キハ水雷術ト稱スルヨリハ寧ロ水雷命中試驗ト謂フヲ適當ナリトス

以上砲術及水雷術ニ就キ聊カ所見ヲ述ヘタリ、其詳細ニ至リテハ之ヲ專科ノ講究ニ讓ラン。惟フニ機力ハ年々歳々進歩シテ底止スル處無キモ、術力ノ發達之レニ伴ハサルトキハ其効用ヲ全ク考ルコト難シ。技術ノ練磨ニ努メスシテ唯タ兵器ノ新奇ヲ望ムヲ戒ムルト全時ニ、己ニ新兵器ヲ採用シタルトキハ直ニ其用法ヲモ研究改良セサル可ラス。弓術ト銃術、銃術ト砲術ニハ其用法ニ大差アルカ如ク砲其物ノ内ニモ亦其新古ニ準ヒ用法ニ進化ナカラサル可ラス。然ルニ人類ノ慣性ハ容易ニ變移シ難キモノニテ、弓術ヲ以テ小銃ヲ操ラントスルカ如キ實例ハ今日モ尙ホ現存セサルニアラス、若シ之ヲ忽ニスルトキハ新武器ノ鈍用ハ却テ舊武器ノ銳用ニ如カサルノ奇觀ヲ呈スルコトアルヘシ

第三節 防禦力

○敵ノ攻撃力ニ抵抗シテ能ク我カ各他ノ戰鬥力ヲ防護シ其効用ヲ保續セシムルモノハ防禦力ナリ。攻撃ハ實擊點ト其時機トヲ撰定シテ自働シ得ルノ利ヲ有スレトモ防禦ハ常ニ他働ヲ待受ケサル可ラス。艦船ニ於ケル攻防二力ノ對抗モ亦此原理ニ洩ル、コトナク、敵ノ砲彈、魚雷等ハ任意ニ我各部面ヲ打

撃スルモ我ハ豫メ全面ヲ装甲スルニアラサレハ之レヲ防遏スルコト能ハス。然ルニ備ヘサル所無レハ寡カラサル所無キカ如ク、全面ヲ装甲セントセハ重量ノ増加ニ制限セラレ之ヲ薄弱ナラシメサル可カラサルハ數ノ免レサル處ナリ。故ニ砲ニ對シテハ水際若クハ重要部ノミニ装甲シ、水雷ニ對シテハ防水區劃及防禦網ヲ用フト雖モ、尙ホ艦体ノ防禦ハ不充分ニシテ、航行艦船ノ底部ノ如キハ殆ント全ク敵ノ水雷攻撃ニ暴露セリ。是ニ於テ此ノ如キ流用ス可ラサル固定防禦力ニ賴ランヨリハ寧ロ如何ナル場合ニモ應用シ得ル處ノ間接的防禦力即チ攻撃力ヲ増大スルニ傾キ、今日ノ艦船ハ水雷艇防禦用トシテ多數ノ小口徑砲ヲ裝載セリ。然リ積極ノ攻撃ハ最良ノ防禦ナリ、攻撃力モ之ヲ防禦ニ轉用スレハ取リモ直サス防禦力タルカ故ニ、寧ロ防禦力ヲ皆無ニシ極端迄攻撃力ヲ倍加シテ之ヲ攻防二様ニ應用スルノ優レルカ如シ。然レトモ敵ノ一彈ヲモ被ラサル間ニ此敵ヲ擊滅スルコトハ殆ント不可能ナルヲ以テ防禦力モ亦或ル程度迄其必要ナキニアラス、故ニ致命部主要部等ニ於ケル適度ナル防禦ヲ欠ク可ラサルハ勿論、攻撃力、運動力等ヲ減殺セサル限り之ヲ擴張スルヲ可トス。唯タ戒ムヘキハ防禦力ヲ増加スルタメ所定ノ攻撃力ヲ犠牲ニセサルコトニテ、是レ攻撃ハ戰鬪ノ本旨ニシテ防禦ノ爲ニ戰フニアラザルヲ以テナリ

○現時ノ海軍艦船ニ於ケル防禦力ノ有形的機力要素ハ 一、装甲 二、防水區劃 三、防禦網及探海燈 四、防火、防水機關等ナリ

(裝甲)

裝甲板ハ過去十年ノ間ニ著シク進歩シ、我カ富士、八島ノ海上ニ浮ヒタル頃初メテ世ニ現レタル「ハーバー」鋼ハ幾モナク「レフオージド、ハーバー」尋テ「ニッケル、ハーバー」等ニ變化シ、更ニ「クルップ」式製法ノ發明ト共ニ「クルップ、ハーバー」鋼トナリ格段ニ其硬度ヲ増セリ。爾後此法各國ニ普及セラレ製法ニ於テ多少ノ進化ヲ遂ケタルモ硬度ニハ著シキ増加ヲ見ス、最近又米國ニ於テ「デビス氏」エレクトリック、ハーバー」鋼ノ發明アリテ、其硬度ハ「クルップ、ハーバー」ニ對シ四ト三ノ比例ナリトノ報ハ一時鋼界ヲ驚カシタルモ、其工費ノ不廉ト實績ノ不良ノタメ未タ前者ヲ驅逐スル迄ニ至ラザルカ如シ。然レトモ防禦力ニ分配スル重量ヲ可成的節減シテ之ヲ攻撃力ニ増加スルハ戰術上ノ要求トシテ造兵造船家ノ終始企圖スル處ナレハ、早晚又新甲板ノ現出スルハ必然ノ理勢ナリトス、吾人ハ常ニ後世ノ恐ルベキヲ知テ事物ノ進歩ニ着眼セサル可ラス

(防水區劃)

造船術ノ發達ハ防水區劃ノ構造ヲ益々嚴密ナラシメ、近時ノ艦船ハ一部破孔ヨリノ浸水ニ對シ能ク其浮力ヲ維持スルヲ得ト雖モ、多大ノ破損ニ對シテハ全ク之ヲ亡失スルノミナラス假令浮泛スルモ戰闘力就中運動力ヲ保續スルコト頗ル難シ。故ニ水線ハ裝甲ニテ砲彈ノ穿入ヲ防キ防水區劃ト相須テ浸水ニ備フルモ、艦底ニ至リテハ半移動的ニシテ航行中使用シ難キ防禦網アルノ外殆ント全部

水雷ノ撞破ニ暴露シ、到底内部防水區劃ノミヲ以テ其浸水ヲ防遏スルコト能ハス、是レ現時ノ戰鬪機關ニ於ケル防禦力上ノ最大欠点ナリ。此ニ於テ近來艦底内部ノ構造ニ意匠ヲ用フルニ至リ、或ハ縱區劃ヲ減シテ橫區劃ヲ増シ、或ハ複底ヲ鞏固ニシテ其間隔ヲ遠サケ、或ハ内部若クハ底部ニ装甲ヲ施シ、或ハ彈藥庫ト底飯ノ距離ヲ大ニスル等、主トシテ艦底ノ固定防禦力ヲ増大スルニ傾キツ、アリ。而テ此傾向ハ水雷ノ攻撃力カ漸加スルニ從ヒ次第ニ其度ヲ高ムヘキコト必然ナリトス

(防禦網及探海燈)

此二者ハ主トシテ水雷防禦ノ機具ナリ。防禦網ハ漸次ニ其密度ヲ増シ斷網器チットカットターモ之ヲ破ルコト難シト雖モ、奈何セン其効用碇泊中ノミニ制限セラル、ヲ以テ之ヲ主用ノ防禦力ニ算スル能ハス、且ツ其密度及面積漸次ニ増大スルトキハ遂ニ使用ニ堪ヘスシテ之ヲ廢棄シ其重量ニ相當スヘキ他種ノ防禦機關若クハ攻撃具ヲ代用スルニ至ランカ、然レドモ其効用未ダ棄ツ可ラサルモノアルハ最近實戰ノ証明スル處ナリ。探海燈ニ至リテハ夜戰ノ攻撃力ヲ發揮セシムルノ要具ニシテ、其光力ノ増加スルニ從ヒ夜戰ヲシテ晝戰ニ近邇セシムルノミナラス、其照射ヲ以テ敵眼ヲ眩惑シ益々水雷艇ノ奇襲ヲ困難ナラシム。故ニ其光力ト燈數ヲ増加スヘキハ是亦水雷ノ發達ニ伴フ自然ノ必要ナリ

(防火防水機關)

敵ノ攻撃ヨリ生スル火災及浸水ニ對シ消火排水ノ効用ヲナスモノハ防火防水機關ニシテ、是亦有形

的防禦力ノ一部ナリ。故ニ艦積ノ許ス限リ其多數ヲ裝備セサル可ラス、而テ其ノ最有力ナルモノハ
筒唧及之レニ附隨セル パイプアレンジメント 裝 管 ナリ。唧筒ノ原動力ハ固ヨリ機力ニ須タサルヘカラス、比較的弱
少ナル人力ノ如キハ大災害ニ對シテ殆ント其効無シ、故ニ場合ニ依リ艦ノ推進原動力ノ大部ヲ此目
的ニ轉用シ得ルノ裝置アルヲ要ス。然レトモ吾人カ之ヨリ先キニ留意スヘキコトハ艦其物ノ構造ニ
於テ火災水厄等ノ原因ヲ消極ニ減少スルニアリ

○如上有形の防禦力ノ大部ハ固定不動ニシテ運用ノ妙ヲ要スルモノ少ク、從テ無形の防禦力即チ術力
ト認ムヘキモノナキカ如シ。然レトモ防禦機力ノ弱點ヲ補足若クハ削除スルヲ目的トセル臨戰準備及
合戰準備ノ如キ、或ハ浮泛力ノ維持ヲ目的トセル防水區劃ノ排水及平均滿水、(一部ノ浸水ニ對シ其反對部ニ
滿水シテ艦ノ均衡ヲ保タシムル) 防水扉蓋ノ開閉及防水蓆ノ用法ノ如キ、或ハ水雷攻撃ノ直接防禦ヲ目的トセル防禦網ノ展張及探
海燈ノ探射法ノ如キ、或ハ又消火排水ヲ目的トセル防火防水機關及其裝 管ノ複雜ナル應用法ノ如
キ、何レモ是レ防禦術力ニ屬スルモノニテ將校タルモノ、須臾モ忽諸ニ附ス可ラサルモノナリ。本來
攻撃力ト云ヒ又防禦力ト云ヒ全シク之レ戰鬪力ノ要素ナルモ、一般ノ嗜好ハ常ニ前者ニ傾キ易ク後者
ニ對スル信切ナル研究足ラサルカ故ニ、艦ノ罹厄ニ際シ往々防禦機關ノ全能ヲ發揮セシムルコト能ハ
ス、戰鬪力ノ全部ヲ擧テ堅艦ト共ニ空シク之ヲ海底ニ埋滅スルニ至ル。攻撃力運動力等ノ亡失ハ之ヲ
恢復シ得ルノ望ナキニアラサルモ、防禦力ノ亡失ヨリ生スル損失ハ此ノ如ク遂ニ恢復ス可ラサルコト

アリ、戒メサルヘケンヤ

茲ニ防水ニ關シ一言ノ附スヘキモノアリ、他無シ防水隔壁及扉蓋等ノ嚴密ナル水密検査是レナリ。此検査ハ艦船受領ノ時ヲ始メトシ四年毎ニ一回施行シ、又艦砲發射或ハ坐礁ノ激動、其他改造修理等アリタルトキハ水密ニ疑アル箇所ニ對シ臨時ニ之ヲ行フヲ要ス。若シ隔壁ニ五錢大ノ一罅孔アリトスルモ其區劃ハ已ニ防水ノ効ヲ失フ、錢大ノ罅孔ハ浸水ニ際シ容易ニ填塞シ得ルカ如クニシテ然ラス、其區劃内ニ物品格納シアルカ或ハ浸水面此孔ヲ超ユルトキハ其所在ヲ發見スルコト頗ル難ク、之レガ探索ニ努力スル間ニ浸水ハ漸々該區劃ニ充滿シ來リ、更ニ比隣ノ區劃ニ浸入スルニ至ルヘシ。又水密検査ト共ニ嚴重ニ禁制スヘキハ改造修理等ニ際シ一小孔タリトモ濫リニ隔壁ニ穿タシメサルコトナリ

第四節 運動力

○敵アリ、之レニ近接シテ攻撃ヲ實行シ又之レニ對シ有利ノ地位ヲ占メンニハ我カ運動力ニ依ラサル可ラス。運動力ハ即チ前進力、後退力及回轉力ニ外ナラス

戰術上ニ於ケル運動力ノ價值ハ攻撃力ノ如ク大ナラスト雖モ、此力素無クシテ戰術ハ實施シ得ラル、モノニアラス、巧妙ナル戰術ハ主トシテ巧妙ナル運動ニ依リ攻撃力ヲ適當ノ時機ニ適當ノ位地ニ在ラシムルニアリ。特ニ水雷戰及衝突戰ニ於テハ運動力ノ効用最モ大ナリトス、驅逐艦水雷艇等カ敵艦ニ近接シテ其魚雷ヲ發射スルノ位地ニ達スルハ即チ運動力ノ所爲ニシテ、是レ間接ニ攻撃力ノ一部ヲモ

成セルモノナリ、又其ノ敵艦ニ近接スル速力大ナルトキハ能ク敵砲火ノ効力ヲ減殺シ間接ニ防禦力ノ一部ヲモ成セリ。若シ夫レ衝角ニ至リテハ全然運動力ニ依リ其効ヲ奏スルモノナルカ故ニ、衝突戦ニ於ケル運動力ハ取リモ直サス攻撃力ト認メテ可ナリ

砲戦ニ於テハ運動力ノ効用水雷戦ニ於ケル如ク大ナラスト雖モ、尙ホ之レニ依リ適宜ニ砲戦距離ヲ伸

縮シ戦勢上ノ好位ヲ制スルノ與力少シトセ
ス。然リト雖モ速力ノ利益ハ常ニ之レアルモ

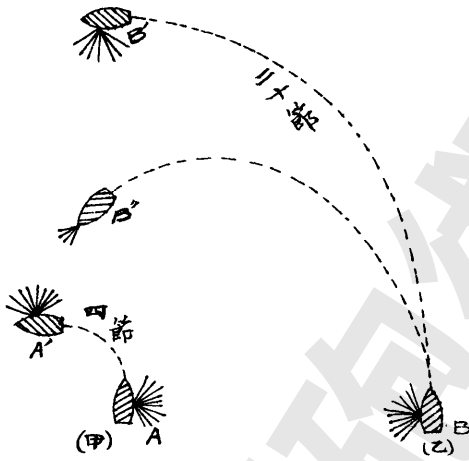
ノニアラス、唯タ迅速ニ運動スルヲ要スル場
合ニノミ、高速ノモノハ之ヲ爲シ得ルモ劣速

ノモノハ之ヲ爲シ得サルノ不利アルノミ。何
トナレバ對抗艦船各其敵ニ對シ決戦ノ意志ヲ

以テ合戦スルトキハ其相對的對勢ハ速力ノ差
ニ依リ大ナル變化ヲ生セザレハナリ

例ハ第一圖ニ示セル單艦ノ對抗ニ於テ(甲)艦ハ
四節、(乙)艦ハ二十節ノ速力ヲ有シ、(乙)ハ其優
速ヲ以テ戰勢上ノ好位ヲ制セントスルモ(甲)カ

第一圖

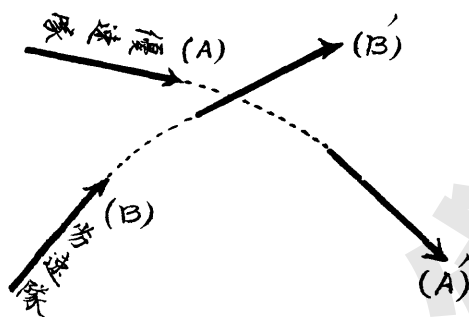


内方線ヲ取リテ回轉運動スルトキハ其對勢ハA' B'ノ如ク殆ト變化スルコトナシ、此時若シ(乙)カ急劇ニB'ノ如ク盲動スルトキハ却テ劣速ナル(甲)ノ爲ニ好位ヲ制セラレ猛烈ナル其縱射ヲ蒙ルコトアルヘシ。但シ戰鬪ヲ強ヒ或ハ之ヲ避クルノ戰略的利益ハ常ニ優速艦ノ占有スル處ニシテ、劣速ノ艦ハ敵ニ多大ノ損害ヲ與ヘ得ルモ其退却スルヲ追撃スル能ハサルノミナラズ、我カ損害大ナルタメ避戰セントスル

モ能ハサルナリ

速力ノ差カ戰術上ニ及ホス前記單艦ノ例證ハ單隊ノ戰鬪ニ於テモ殆ント同一ニ適合スルモノニテ、唯タ必要アル場合ニ比較的迅速ニ好位ヲ占メ、若クハ非境ヲ脱シ、或ハ比較的長時間好位ヲ保持スルノ利アルノミニテ場合ニ依リテハ優速却テ戰術上不利ナルコトナシトセス。例ハ第二圖ノ一例ニ示スカ如ク、(A)ナル優速隊カ(B)ナル敵ニ對シ恰好ノ位地ヲ占メ其全線ノ砲火ヲ敵ノ先頭ニ集中セルトキ、其優速ヲ以テ尙ホ前進スルトキハ數分時ノ後戰勢ハ一變シテ却テ劣速

第 貳 圖



ノ敵ニ我カ後尾ヲ猛撃セラレ、A' B'ノ如キ對勢トナルコトアルヘシ。然レトモニ隊以上即チ複隊ノ戰鬪ニ於テハ速力ノ戰略的利益(機戰避戰ノ利)カ友軍諸隊ノ集散離合ヲ容易ナラシメ、戰機ニ應シテ協同動作スルノ利ヲ得セシムルコト多シ。之ヲ要スルニ優速ノ利益ハ固ヨリ之アリト雖モ、唯タ其優速ヲ利用シ得ル場合ノミニ存スルモノニテ、終始如何ナル場合ニモ之レニ伴フ利益アルモノニアス

回轉力ノ大小モ亦水雷戰、衝突戰ノ如キ接戰ニ於テハ其効用著大ナリト雖モ、近戰又ハ遠戰ニ於テハ其影響スル處比較的僅少ナリ。特ニ編隊シテ戰鬪スルトキハ各戰鬪單位ノ回轉圈ノ小ナランヨリハ寧ロ齊一ナルヲ有利トス

○運動力ノ有形的要素ハ即チ艦艇ノ推進機關及操舵機關ニシテ、一ツハ進退ヲ掌リ一ツハ回轉ヲ理シ共ニ相須テ其運動ヲ自在ナラシムルコト尙ホ鳥ノ翼ト尾ニ於ケルカ如シ。往時ノ推進及操舵機關ハ單純ナル帆ト舵トヲ以テ天然ノ風力ヲ利用セシカ、汽力ノ應用以來汽機之レニ代リ漸次ニ其機關複雑シテ終ニ現時ノ如ク進化シ來リ、其重量ト價額ハ艦艇全体ノ五分ノ一乃至三分ノ一ヲ占領スルニ至レリ。而シテ其重量ヲ消極ニ減少スルト全時ニ其効力ヲ積極ニ増大セントスルハ固ヨリ戰術ノ要求スル處ナレバ汽機ト汽罐ノ別無ク凡テ此方向ニ發達セシメサル可ラス

現時ノ推進機關ヲ往時ノ檣帆ニ比スレハ其利便ナルコト固ヨリ言フヲ俟タスト雖モ、更ニ將來ノ發達ヲ望ミテ現在ノ欠點ヲ數フルトキハ蓋シ左ノ如クナラン

一、瀛罐及其燃料ガ艦ノ大重量及大容積ヲ占有シ爾他ノ戰鬪力量ヲ輕減スルコト

二、瀛罐通風ノタメ數個ノ大煙突及通風管カ艦上ニ暴露シ防禦力ヲ減殺スルコト

三、瀛罐ノ煤煙ガ通信力ヲ妨害スルコト

如上ノ欠點ハ吾人今日已ムヲ得サルモノトシテ之レヲ忍フト雖モ、戰術上ノ見地ヨリ虛心平氣ニ考察スルトキハ戰鬪力素ノ第三位ニ立テル運動力ノタメニ斯クノ如キ大重量ト大容積ヲ分配スルハ聊カ偏重ノ感無キ能ハス。故ニ瀛力ニ代ハルヘキ他ノ簡便ナル力素ヲ適用スルカ、或ハ尙ホ瀛力ヲ用フトスレバ一層有効ニシテ輕小ナル瀛罐ヲ創造シ、石炭ニ代ハルヘキ輕便ノ燃料ヲ求メサルヘカラサルナリ。之レト全時ニ造機家ニ對シテ希望スヘキハ用機者ノ智能ニ適應スル機關ヲ供給スルコト是ナリ、用機者ノ大部分ハ本來素養少キカ故ニ複雜精巧ナル機關ヲ巧妙ニ使用シテ其全能ヲ發揮セシムルコト甚々難シ、少許ノ注意ヲ怠レハ忽チ其機能ヲ失スルカ如キ機關ハ假令ヒ精巧ナルモ武人ノ蠻用ニ適スルモノニアラス

○運動力ノ無形の要素ハ艦ヲ運轉スル技術即チ運用術ニシテ、機關術ハ運用術ノ範圍内ニ屬スル一部ノ間接要素ナリトス

運用術ノ目的ヲ約言スレハ艦ヲ必要ノ方向及位地ニ移動及靜止セシムルニアリ。固ヨリ此目的ヲ達スル爲メニハ諸多細末ノ技術アリテ錨具、索具、桁材ノ用法等ナキニアラスト雖モ其最終ノ目的ハ單ニ

上記セルモノ、外ニ出テス。人動モスレハ運用術ノ眞義ヲ解セス、唯タ末技ニ習熟シテ其術能ヲ得タリトスルハ誤レルノ甚シキモノナリ。而シテ現時ノ運用術ニ熟達センニハ先ツ其有形要素タル推進及回轉機關ノ性能及其力量ヲ詳知シ、多度ノ經驗ニ依リ之ヲ活用スルノ呼吸ヲ會得セサル可ラズ。往昔帆船時代ノ將校ガ檣帆ノ性能ト其取扱法ヲ知ルヲ以テ運用術トスレハ今日ノ將校ガ帆ニ代リタル汽機、汽罐ノ性能ト其取扱法ヲ知ルノ必要アルハ當然ノコトニシテ、尙ホ銃砲カ弓矢ニ代レハ吾人ハ弓術ヲ棄テ、銃砲術ヲ學バサルベカラサルカ如シ。然ルニ海軍將校ノ運用術ヲ言フモノ往々尙ホ帆船時代ヲ追想シテ「ジブ」「フライングジブ」等ニ戀着セルノミナラズ、直接ノ必要アル機關術ヲ別科ノ如ク度外視シ、其部下ヲ教育スルニ當リテモ尙ホ古物ヲ持出サントスル傾向アルハ抑モ事物進歩ノ道理ヲ解セサルノ結果ニシテ、宛モ小銃射撃ノ稽古ヲ弓矢ニテ爲スト一般ナリ。若シ夫レ吾人ニ時間ノ餘裕アリテ帆前ノ運用術モ汽機ノ運用術モ或ハ又前裝砲モ後裝砲モ悉ク歴史的ニ研究練磨スルヲ得ハ之レニ優レル能事ナシト雖モ、奈何セン人間ノ一生ハ古人モ今人モ同一ニシテ先代以來進化シ來レル技術ヲ歴史的ニ學ハント欲セハ忽チ時間ノ不足ヲ感スルニ至ラン。去レバ吾人ハ常ニ現在ヲ標準トシ現在用ユル處ノ機關ヲ運用スルノ技術ニ習熟セサル可ラサルノミナラス、尙ホ將來ノ發達ニ着眼シテ新機關ノ現出スル毎ニ直ニ之ヲ活用シ得ルノ用意ナカラサル可ラズ。今ヤ旋轉汽機ハ將來ノ推進機關タラントス、其性能ハ前進力ニ強ク後退力ニ弱シ、故ニ此新汽機ヲ裝載セル艦船ノ運用術ハ又今日ノモノト

其趣ヲ異ニスルヤ必セリ

○機關術ハ本來運用術ノ範圍ニ屬スルモノナレトモ、近時ノ複雑ナル汽機汽罐ノ精密ナル保存及取扱法等ニ至リテハ到底一人ノ力ノ能クスル所ニアラサルヲ以テ終ニ此一分業ヲ形成シ、機關官ヲシテ之ヲ担任セシメ、運用術ノ要求ニ應シテ機關ヲ有効ニ保全シ其最大効力ヲ發揮セシムルノ業務トナレリ。而テ推進及回轉機關并ニ諸多補助機關カ年ヲ逐フテ多岐精巧トナルニ從ヒ、運用術ニ對スル斯術ノ責任愈々重且ツ大トナリ、益々一大專科トシテ之ヲ研究練磨セサル可ラサルニ至レリ。然ルニ近時泰西ノ先進海軍國中ニ於テ此分業ノ因テ來レル原由ト其必要ヲ否認シ、運用術ヲ担任セル將校ト機關術ヲ擔任セル機關官ヲ混合シテ一團トナシ、之ヲ一型ニ教育使役セントス。實ニ誤レルノ甚シキモノニテ此ノ如キ海軍ハ一朝有事ニ際シ機關ノ欠點損傷等ニ原因セル戰術上ノ過失ヲ招クヘキコト疑ヲ容レズ。吾人ハ運用家ニ對シ帆前根性ヲ棄テ現時ノ汽機ヲ基礎トセル所謂汽機的運用術ヲ攻究センコトヲ希望スルト同時ニ、主機家ニ對シテハ自家分業ノ重要ナルヲ自覺シテ其ノ限界ヲ確守シ常ニ運用家ノ緩急要求ニ應シ得ルノ用意アラシコトヲ切望セサルヲ得ス、是レ實ニ戰闘力素トシテ運動力量ヲ増大スヘキ上乘ノ道ナレバナリ

第五節 通信力

○戰闘力ヲ人体ニ譬ヘ、其ノ攻撃力ヲ手腕トシ、防禦力ヲ體軀トシ、運動力ヲ脚足ト見做セハ、通信

力ハ即チ耳目ノ用ヲナスモノナリ。手足體軀等如何ニ強健ナルモ之ヲ適當ニ指導スヘキ耳目ナキトキハ人間ノ行爲ハ唯タ盲動亂打ニ了ランノミ。多數ノ艦艇カ相集團シテ編隊行動シ、或ハ攻撃目標ニ對シ協同動作スルヲ得セシムルモノハ皆通信力ノ効能ナラサルハ無シ。然ルニ戰鬪力素トシテ通信力ノ價值第四ニ位スルモノハ其効能ノ比較的劣小ナルガタメニハアラスシテ、戰鬪其物カ大抵視界内ニ戰ハル、カ故ニ人類天賦ノ通信機關タル視官聽官等カ直接ニ其作用ヲ爲シ、人工機關ノ力ヲ借ルノ要少キヲ以テナリ。此故ニ通信機力及術力ノ戰術上ノ價值ハ其戰略上ノ價值ニ比スレハ遙ニ少シ。而テ通信機關ハ其艦内通信ト艦外通信トニ論無ク、確實ニシテ且ツ迅速ナルモノヲ要シ、確實ナルモ遲緩ナルカ或ハ迅速ナルモ不確實ナルモノハ共ニ不具タルヲ免レサルナリ

○現時ノ海軍ニ於ケル有形的艦外通信機力ノ重要ナルモノハ信號機及無線電信機ニシテ、戰術ノ要求ニ對スル近距離通信ニハ比較的精巧ナル無線電信ヨリモ簡易ナル信號ニ依ルヲ便利ナリトス。蓋シ無線電信機ハ戰略的遠距離通信ニハ適良ナルモ、敵軍友軍相混亂セル戰場ニ於テ之ヲ我軍ノミニ專用セントスルモ恐クハ混信不通ノ場合多カルヘシ。又彼ノ望遠鏡及「メガホン」ノ如キモ視力聽力ヲ増大スル一種ノ信通機ニシテ、若シ之ヲ銳利ニ改良シテ數十里外ヲ明視シ得ヘキ望遠鏡ト一戰隊ニ言令シ得ヘキ「メガホン」等ノ現出スルニ至レハ其戰術及戰略上ニ及ホス効益ノ至大ナルヤ知ルヘキナリ

艦内通信機ハ戰術上ニ於テ却テ艦外通信機ヨリモ重要ナルコトアリ。一艦ノ神經的連絡ヲ確實ニシ

其攻撃力、防禦力、運動力ノ適用并ニ其相互ノ連繋ヲ保持スルハ艦内通信ノ力ニ依ルモノニシテ、特ニ攻撃力ト運動力トハ最モ密接ノ關係ヲ有シ、運動ニ依リテ生スル射距離苗頭ノ變差及攻撃目標ノ轉換等ノ通報ハ直接ニ攻撃力ノ効果ニ影響スルコト頗ル大ナリ。故ニ之ニ要スル通報器等ハ最モ確實迅速ナルモノヲ撰用スルト全時ニ戦闘準備ニ際シ充分ニ其被護ノ方法ヲ盡サ、ル可ラス

○通信力ノ無形の術力ハ前記シタル各種通信機ヲ完全ニ使用シテ通信ヲ交換スルノ技術ニ過キス。而テ信號術ト謂ヒ又無線電信術ト謂ヒ、凡テ通信技術ハ下士卒ノ業務ニ屬シ、其練習實施共ニ比較的容易ナリト雖モ、將校ノ担任ニ屬スル通信法ノ制定ニ至リテハ最モ明晰ナル組織的腦力ヲ要スル至難ノ事業ナリトス。此通信法ノ適否ハ通信機ノ良否及通信兵技能ノ巧拙ヨリモ一層著シク通信力ヲ消長スルモノナリ。適良ニ案畫編組サレタル通信法ハ錯誤遲達ノ虞ナクシテ能ク明瞭ニ意志ヲ疎通シ、以テ戰術上ノ諸要求ニ應スルヲ得ルト雖モ、不完全ノモノハ或ハ通信ノ速度ヲ減却シ或ハ誤解不明ノ原因トナルヘシ。彼ノ大冊ノ信號書、電信暗號書、其他諸種ノ通信規定ノ如キ、多クハ一個ノ頭腦ニ依リ編組サレタルモノニテ萬人之レヲ慣用シテ通信上ノ利澤ヲ蒙リツ、アルニ拘ラス、其通信力ノ要素トシテ幾何ノ價值アルヤヲ認識スルモノ甚タ少シ

第六節 結 論

○以上戰鬥力ノ要素ニ就キテ列叙シタル處ハ凡テ戰術上ノ見地ヨリ立論シタルモノニシテ、戰略上ヨ

リ觀察スルトキハ、要素ノ種別及其價值等ニ於テ多少ノ異同ナカラサル可ラス。例ハ運動力要素ニ屬スル**速力**、**航續力**、或ハ**通信力**要素ニ屬ズル**遠距離****通信力**、或ハ**攻撃力**要素ニ屬スヘキ**彈藥貯藏**及**供給力**、或ハ**防禦力**要素ニ屬スヘキ**耐海力**等、何レモ**戰略上**欠ク可ラサル重要ノ力素ナレトモ、本編**戰術**講究ノ範圍内ニ於テハ混雜ヲ避ケ之レカ論究ヲ省キタリ。然リト雖モ**戰鬪機關**ハ凡テ一物ヲ以テ**戰略**及**戰術**兩様ノ諸要求ニ應セシムルヘキモノナルカ故ニ、是亦全時ニ考究ヲ要スルモノナリ

之ヲ要スルニ、單ニ**戰術**ノミノ要求ニ適應センニハ、將校タルモノ本章説ク處ノ**戰鬪力**要素カ**戰鬪萬事**ノ素因ヲ成セルモノタルヲ**理會**服膺シ、其**主務**ニアルモノト在ラサルモノトヲ問ハス、常ニ怠ラス有形及無形各種要素ノ力量ヲ増大スルニ努メ、他日事アルトキハ**最良**ノ要素ニ依リ、**最上**ノ**戰術計畫**ヲ立テ、之ヲ**最巧**ニ實施シ、以テ**最大**ノ**戰果**ヲ収メサル可ラス。而テ此等要素中有形ノ要素ハ個人ノ**意匠**ヲ以テ之ヲ改良スルニ易ク、且ツ其力量モ大抵平時ノ**軍事調查**ニ依リ、彼國ノ**艦數**ハ幾何、此國ノ**砲數**ハ幾何ト謂フカ如クニ之ヲ測量スルヲ得、以テ**戰術計畫**ノ資料トスルニ難カラスト雖モ、無形ノ**術力**要素ニ至リテハ獨リ其**進歩**ノ遲々タルノミナラス、外國ノモノハ勿論、自國ノモノモ尙ホ容易ニ其力量ヲ檢定スルコト難ク、**戰場**ニ敵ト相見エ、己ニ大事去リタル後ニ至リ、初テ彼我力量ノ優劣ヲ自覺スルコト多シ。是レ誠ニ吾人ノ**寤寐**ニモ忘却スヘカラサル處ニシテ、若シ到底彼我ノ**術力**ヲ判定スル能ハサルモノトスレハ、吾人ハ唯々終始及ハサルヲ恐レテ、孜孜汲々平時ノ**教育訓練**ニ精勵シ、

以テ術力ノ練度ヲ積極ニ保持スルノ外無シ。若シ夫レ彼ハ百發十中我ハ百發三十中、我レノ一能ク彼ノ三ニ對抗シ得ヘシナドノ自負の立算ヲ以テ戰場ニ臨メバ、意外ニモ彼ノ百發五十中ニ壓倒セラレテ、又起ツ能ハサルノ敗滅ヲ招クコトアルヘシ。況ンヤ我レノ特ミシ百發三十中スラモ、士氣其他ノ影響ヲ受ケテ轉瞬ノ間ニ百發零中ニ減退スルコトアルニ於テヲヤ、深ク戒メサル可ラス。要ハ唯タ百發百中ニ達スル迄進ンテ息マサルニ在リ

終ニ臨ミ尙ホ一言ノ附スヘキモノアリ。他無シ、此等有形及無形ノ要素ハ人智ノ進歩ニ伴ヒ間斷ナク發達シテ底止スル處無ク、從テ之ヲ以テ戰鬪スル技術、即チ吾人ノ茲ニ講究シツ、アル戰術モ時々刻々ニ進化シツ、アルカ故ニ、今日一戰術ヲ講習シ得タリトテ、果シテ之レヲ將來ニ適用シ得ヘシト安心スル能ハサルコト是ナリ。要素ノ進化スルニ準ヒ、戰術モ亦間斷無ク研究進化セシメサル可ラズ。奈破翁ハ一戰術ノ有効保險期限ヲ十年トナセリ。兵器ノ改良進歩極メテ遲鈍ナル陸軍ニ於テスラ尙ホ且ツ然リ、昨ノ堅艦今ハ弱艦ト化シ、今日ノ良砲明日ノ廢砲トナルカ如キ海軍ニ於テハ、其戰術ノ有効期限ハ蓋シ二年ヲ越フルコト無カラン

第二章 戰鬪單位ノ本能

第一節 總 說

○戰鬪單位トハ戰鬪部隊ノ兵軍ヲ組成セル最小單位ニシテ、戰鬪ニ當リ分離別働セシメ得ル兵力ノ極限ヲ謂フ。而シテ數個ノ戰鬪單位ヲ團結シ、一隊ト成リテ戰鬪スルモノヲ戰術單位ト謂フ、即チ戰鬪單位ハ戰術單位ノ最小ナルモノナリ

戰鬪單位ニハ大小アリテ、海軍ニ於ケル最小單位ハ艦艇一隻ナリト雖モ、戰術上ノ必要ニ應シ二隻以上ヲ集團シテ較ヤ大ナル單位、即チ群隊單位（茲ニ群隊ト謂フハ從來ノ群陣ノ意義ニアラス）ヲ組成スルコトアリ。而シテ巡洋艦以上ノ群隊單位ハ二隻若クハ三隻ヨリ成ル所謂分隊單位或ハ小隊單位ヲ用ヒ、驅逐艦水雷艇等ハ大抵四隻乃至六隻ノ群隊單位ヲ常用ス。但シ前記ノ如キ大單位ノ建制ハ各海軍國ヲ通シテ未タ一定確立シタルモノ無ク、多クハ時ノ必要ニ應シテ指揮官任意ノ隊制ヲ設クルノ慣例ヲナセリ。然レトモ各國海軍ノ兵力年ヲ逐フテ増加スルニ從ヒ、大單位ノ建制ヲ常設スルノ必要ヲ生スヘキハ自然ノ趨勢ニシテ、已ニ驅逐艦水雷艇ノ如キハ各國共ニ群隊單位ノ建制ヲ採用シ、巡洋艦以上モ群隊單位ヲ編組セントスルニ至レリ。以下本章ニ説ク處ハ主トシテ最小單位即チ隻艦隻艇ニ就キテ其本能ノ標準及分限ヲ明ニセントスルモノニテ、大單位ニ論及セルモノニアラス

○各種戰鬪單位ヲシテ單ニ戰術上ノ要求ニ適應セシメンニハ、艦艇ハ唯タ定限ノ戰鬪力要素ヲ具備ス

レハ足レリト雖モ、戦闘單位ハ相集團シテ戰術單位ヲ成シ、戰術單位ハ更ニ團結シテ戰略單位即チ大艦隊ヲ編組スルノ必要アルガ故ニ、或程度迄ハ戰略上ノ要求ニモ應シ得ヘキ性能ヲ兼備セシメサル可ラス。例ハ航續力、貯藏力、遠距離通信力等ハ主トシテ戰略上ノ要求ヨリ戦闘單位ノ本能ニ加入スルヲ要スルモノナリ。此ノ如ク戰術及戰略上ノ諸要求ヲ悉ク完容シテ、萬全無欠ナル戰鬥力及競争力ヲ各個單位ニ具備セシムルコトハ、現時ノ機力的發達ノ程度尙ホ未タ之ヲ許サル、ノミナラス、働力ノ經濟ヲ目的トセル分業ノ原則ニ從フトキハ、必スシモ各個單位ニ萬能ヲ保全セシムルノ要無シ。例ハ陸軍ニ於テ其戰鬥單位ノ本能ヲ定ムルカ如ク、歩、騎、砲、工、各兵種ノ性能ヲ一個單位ニ完備セシメントスルコトハ、遠キ將來ハ知ラス、現時ハ到底不可能ニ屬スルノミナラス、若シ今日強テ此分業ヲ合一セントセハ兵力上少ナカラサル不經濟ヲ生スルニ至ラン。是故ニ海軍ノ戰鬥單位モ各種ノ目的ニ對シテ其業務ヲ分別シ、各其用途ニ應シテ定限ノ本能ヲ賦與セリ。而テ其種別及本能ノ定限ニ就テハ各海軍國其採ル處ヲ異ニスト雖モ、之ヲ通觀スレハ大同小異ニテ著シキ差隔ヲ有セス。今其種別ヲ列記セハ大要左ノ八種ナリ

- 一、戰艦
- 二、巡洋艦
- 三、通報艦
- 四、海防艦
- 五、砲艦
- 六、驅逐艦
- 七、水雷艇
- 八、潜水艇

此等各種ノ艦船ハ其大小ニ依リ、更ニ分類シテ之ヲ一等乃至三等ニ小別ス。例ハ一等巡洋艦、二等巡

洋艦或ハ一等水雷艇、二等水雷艇ト謂フカ如シ。而シテ艦種ノ何タルヲ問ハス、大艦ノ小數ト小艦ノ多數ト孰レカ戰略及戰術上ニ有利ナルヤハ或ル定限ノ製艦費ヲ以テ一海軍ヲ建造セントスルニ當リ、直ニ起ルヘキ問題ニシテ、双方共ニ利害得失アルコト左記ノ如シ

大艦少數ノ利點

- 一、兵力集中ノ利ヲ有スルコト
- 二、戰鬪力ヲ充分ニ具備セシメ得ルコト

- 三、航續力、貯藏力、耐海力等ヲ大ナラシムルコト

小艦多數ノ利點

- 一、必要ニ應シ兵力ヲ分離シ得ルコト
- 二、戰鬪其他ノ原因ヨリ生スル被害ヲ分限シ得ルコト
- 三、修理特ニ入渠等ニ大設備ヲ要セス、且ツ淺水ヲ航海シ得ルコト

如上相反スル利害ハ固ヨリ絶對的ナラズシテ比較的ナリ。而テ双方ノ利點ハ共ニ戰略、戰術上欠ク可ラサルモノニシテ、戰鬪單位タル一艦一艇ハ少クモ或程度迄此双方ノ利能ヲ有セシメサル可ラス。故ニ双方共ニ極端ニ至ルトキハ一方ノ利ヲ占有シ得ルト全時ニ全ク他方ノ利ヲ亡失シ、遂ニ不具ノ艦艇タルヲ免レサルナリ。是故ニ最適良ナル造船政策ハ前記兩主義ノ極端ニ馳セスシテ、其中庸ヲ撰ムニ

アリ。然ルニ近時各海軍國漸次ニ大艦ヲ建造スル所以ハ如何。曰ク是レ必スシモ大艦少數主義ヲ探レ
ルニアラス。世運ノ進歩ニ伴ヒ、凡百ノ事物カ向上膨大スルハ自然ノ數ニシテ、十年前ノ金百圓ガ十
年後ノ金千圓ニ相當スルカ如ク、軍艦ノ進化モ亦此時勢ニ驅ラレ昨ノ大艦今ハ小艦ト化シ去リ、各國
共ニ海軍力ヲ擴張スルニ從ヒ、單ニ其單位ノ數ヲ漸加スルノミナラズ、單位其物ノ力量ヲモ増大シテ、
兵力集中ノ理ニ合ヘル緊縮隊形コンパクト・オー・ションヲ採ラサル可ラサルニ至レルモノナリ。即チ換言スレハ大艦多數
ノ積極主義ニ外ナラサルナリ

以下節ヲ別チテ各種戰鬪單位ノ本能ヲ論究セントス

第一節 戰艦ノ本能

○戰艦ハ其名稱ノ如ク海上ノ戰鬪ヲ主管セル戰鬪單位ノ基本ニシテ、爾他各種ノ戰鬪單位ハ皆之ヲ基
準トシテ其本能ヲ定ムルモノナリ

戰艦ノ本能ノ標準ヲ定ムルニハ固ヨリ定限アルコトナジ。唯タ機力ノ許ス限り、益々其戰鬪力ヲ大ニ
シ攻撃、防禦、運動、通信ノ諸力素ヲ充實完備セシムルヲ可トス。然レトモ機力ニハ自ラ其當時ノ發
達程度アリテ、無限ニ之ヲ増大スルヲ許サ、ルノミナラス、度外ニ之ヲ増加スレハ却テ其力量ヲ減少
スルノ虞アリトス。例ハ現時ニ於ケル砲煩ノ最大發達程度ハ四十五口徑十二吋後裝砲ニシテ、此以上
ニ大ナル砲ヲ製出シテ砲力ヲ増大シ得サルニアラサルモ、却テ砲ノ命數ヲ減少シ、或ハ之ヲ裝載スル

爲メ艦幅ノ大ナルヲ要シ、從テ艦ノ容積ヲ大ニシ、艦ノ速力ヲ減シ、利スル所失フ處ヲ償ハサルノ結果ヲ生ス。或ハ又一艦ニ可成の多數ノ砲煩ヲ裝載セントスルモ、或ル限界ヲ越フレハ艦ノ容積ヲ過大ニシ從テ其防禦力、運動力等ニ又多大ノ重量ヲ拂ヒ、寧ロ之ヲ小型ノ二艦ニ分造シ、其攻撃力ヲ合同スルノ利ナルニ如カサルニ至ル。故ニ戰艦ノ艦型ハ其當時ノ機力的發達ニ準シ、其重量若クハ價額ニ對スル戰鬪力ノ比例カ最大ナルモノヲ其最大限トシ、之ヲ超フルトキハ却テ其効力ヲ減殺スルニ至シ。而テ現時ニ於ケル其極限ハ蓋シ十二吋砲十門ヲ主兵トセル速力二十節、排水量二萬噸内外ノ戰艦ナラシ

○己ニ前章ニ述ヘタル如ク、戰鬪力ノ主要力素ハ攻撃力ナリ。故ニ戰鬪ヲ本務トセル戰艦ノ本能モ亦攻撃力ヲ主能トシ、他力之レニ隨伴セサル可ラス。即チ先ツ一戰艦ニ保有セシムヘキ攻撃力ノ分量ヲ定メ、之ヲ基準トシテ順次ニ防禦力、運動力及通信力等ニ及ホスヲ要ス。若シ其本未輕重ヲ顛倒スルトキハ、全ク戰艦ノ本能ヲ亡失スルニ至ラン。然ルニ海軍國中往々此順序ヲ無視シ、速力ヲ増加センカ爲ニ裝甲ヲ薄弱ニシ、甚シキハ無裝甲戰艦ヲ製出シタル實例アレトモ、此ノ如キハ自然ノ原則ニ適合セサルモノニテ、假令優速ヲ以テ挑戰避戰ノ利ヲ占有シ得ルモ、一タヒ決戰場裡ニ敵ト對抗スルトキハ忽チ一敗地ニ塗レテ又起ツ能ハサルヤ必セリ、是レ正當ニ戰艦ノ本能ヲ具備セサルガ爲メナリ

○戰艦ノ主能タル攻撃力ハ砲煩ヲ主兵、魚雷ヲ副兵トシ、其砲煩ハ又更ニ主砲、副砲及防禦砲ノ三種

ニ分類ス。而テ主砲ハ十二吋砲、副砲ハ六吋砲、防禦砲ハ四吋砲ヲ以テ適良トシ、其裝載ノ比例ハ主砲一門、副砲二門、防禦砲三門ヲ適度トス。(十二吋砲一門ノ裝載重量ハ六吋砲約八門ニ相當ス)十二吋砲ヲ主砲トスルニ就テハ各海軍國殆ント其軌ヲ一ニスルモ、副砲及防禦砲ニ至リテハ區々ニシテ一定スル處無シ。然レトモ七吋以上ノ副砲ハ其裝載砲數及發射速度ノ著シク減少スル故ヲ以テ副砲タルノ價值ヲ失ス。蓋シ軍艦ノ主砲ハ宛カモ陸軍ノ砲兵ノ如ク、遠戰及破壊ヲ主トスルモ、副砲ニ至リテハ歩兵銃火ノ如ク其多數ト迅速ナル發射ニ依リ、近戰及壓倒ヲ以テ主砲機能ノ足ラサルヲ補足スルモノナレバナリ。若シ夫レ防禦砲ニ至リテハ單ニ水雷艇防禦ヲ目的トセルヲ以テ、魚雷ノ加害距離及雷艇ノ速力増大セル今日ニ於テ、千五百米突以外ノ命中不確實ナル十二吋砲及四十七密砲ニ依頼スルハ最早時勢ニ後レタルモノト謂ハサルヲ得ス。但シ副砲モ防禦砲ニ代用シ得ルヲ以テ度外ニ多數ノ防禦砲ヲ裝載スルノ必要ヲ認メス

(附記) 茲ニ附記スヘキコトアリ。他無シ、近時副砲ヲ全廢シテ主砲全裝ノ戰艦現出シツ、アルコト是レナリ。蓋シ皮相ノ觀察ニ依リ將來ノ海戰ヲ遠戰ノミト誤想セルニ起因シタルモノニテ、戰闘ノ如何ナルモノ、戰術ノ如何ナルモノナルカラ理解セザルモノト謂ツヘシ。夫レ戰闘ハ遠戰ノミヲ爲サント欲スルモ、爲シ得ヘキモノニアラサルノミナラス、戰勢ノ如何ニ依リ、又近戰セサル可ラサル場合少シトセス。否ナ多クノ場合ニ於テ、近戰ニアラザレバ勝敗ヲ決シ戰闘ヲ終結セシムルコト殆ド難シ。此有要ナル近戰ニ當リ、少數ノ主砲ヨリモ多數副砲ノ効力遙ニ偉大ナルハ

最近實戰ノ證明セル處ニシテ、數理ニ質スモ其然ルヲ知ルニ足ルナリ。惟フニ海軍ノ主砲全裝論ハ陸軍ノ砲兵萬能論ト一般ニシテ、歩兵銃火ノ近戰ニ最要ナルヲ知ラサルガ如シ。若シ夫レ主砲ニシテ副砲ノ如ク其發射速度著シク増進シ、且ツ其多數ヲ裝載シ得ル時代ニ至レハ知ラス、少クモ現時及近キ將來ニ於テハ未タ副砲ヲ廢棄シ得ヘキモノニアラズ

魚雷ハ固ヨリ戰艦ノ副兵ニシテ、單ニ接戰ニノミ使用スルモノナレバ、之ガ裝載ニ重キヲ措クノ要ナシト雖モ、其加害距離漸ク伸長シテ將ニ近戰武器ノ斑ニ入ラントシ、大ニ戰術上ニ影響スルニ至ルケレバ決シテ之ヲ廢棄スヘキモノニアラス、却テ益々其裝載ノ必要ヲ増加セルモノナリ。而テ其裝載ノ方法ハ容積ノ許ス範圍内ニ於テ左ノ要領ニ據ルヲ可トス

一、敵彈ノ毀害ヲ避クルタメ、可成の水の中ニ裝備スルヲ要ス

二、舷側ニ四門乃至六門、艦尾ニ一門ヲ射線ヲ異シテ裝備スルヲ要ス

(註) 艦尾發射管ハ戰術上發射ノ機會甚ダ多シ

○戰艦ノ防禦力ハ攻撃力ニ次テ重ンセサル可ラス。是レ戰鬪ハ其勝敗ヲ決スル迄ニ必ス若干ノ時間ヲ要シ、其間彼我相撃ツニ當リ、敵ノ攻撃ニ耐抗シテ我カ諸他ノ戰鬪力ヲ保護シ、交戰ヲ繼續シテ最終ノ勝者タラントセハ、一ツニ防禦力ニ依頼セサル可ラサルヲ以テナリ。戰艦ニシテ防禦力乏シキトキハ一時其優勢ナル攻撃力ヲ發揮シ得ルモ、到底之ヲ保續シテ永ク戰場ニ存立スルコト能ハザルヘシ。

故ニ若シ爲シ得ベクシハ防禦力モ其完全無欠ナルヲ望ムト雖モ、奈何セン各種戰鬥力素配合ノ原則ハ之ヲ許サ、ルコト前章ニ述ヘタル如クナルヲ以テ、人智益々發達シテ造艦技術カ如何ニ進歩スルモ此原則ハ依然變スルコトナク、到底防禦ノ完全ヲ期望ス可ラサルナリ。此原則ニ悖戾セル戰艦ハ宛モ甲冑武者ニ銃器彈藥ヲ携帶セシメ其行動ノ自由ヲ望ムト一般ニシテ、結局戰術上ノ要求ニ適セサル不具無用ノ長物タルヲ免レサシナリ。此故ニ吾人ハ未來永々戰艦防禦力ノ不完全ナルヲ覺悟スルヲ要スルト全時ニ、現時ノ戰艦ニ要求スヘキ防禦力ノ程度モ大約左記ノ標準ニ満足セサル可ラサルナリ

一、重要部(司令塔、主砲塔、機關部水線)ノ装甲ハ最大近戰距離(約五千米突)ニ於テ主砲彈ノ正撃ニ抗シ得ルコト

二、水線部(中央機關部及前後ノ端末ヲ除ク)ノ上下約七呎、副砲臺、水線部ト副砲臺ノ間、煙突下部ノ装甲ハ最大近戰距離ニ於テ副砲彈ノ正撃ニ抗シ得ルコト

三、水線面ニ亘ル保護甲板ハ最大近戰距離ニ於テ主砲彈ノ炸發及落角副砲彈ニ抗シ得ルコト

四、砲臺甲板及其ノ上甲板ハ最大遠戰距離(約一萬米突)ニ於テ落角副砲彈ニ抗シ得ルコト

五、艦底全部ノ防水區劃ハ魚雷及敷設水雷一個ノ爆發ニ對シ浮泛力及運動力ヲ維持シ得ルコト

六、揚彈筒及必要ナル通信機關ハ装甲部ニアラシムルカ、或ハ特ニ装甲ノ被護ヲ附スルコト

七、推進及回轉機關其他重要ナル補助機關ハ保護甲板下ニ置クコト

如上ノ標準固ヨリ完全ナルモノニアラスト雖モ、之レスラ尙ホ充實スルコト能ハサルハ今日ノ實狀ニ

シテ、上記第一項ノ要求ニ應スルモ、現時ノ被帽彈ニ對シ尙ホ十二吋厚ノ装甲ヲ要ス、其他推シテ知ルヘキナリ。故ニ吾人ハ之レニ満足シテ其足ラサル處ハ間接防禦力タル攻撃力ヲ以テ補フノ外無シ

○戰艦ノ運動力特ニ速力ニ就テハ多々其大ナルヲ可トシ、其標準トシテ別ニ據ルヘキモノ無シト雖モ、之レ亦前記攻防二力ニ制セラレテ其度外ヲ望ム可ラス、故ニ攻防二力ヲ減セサル限り、機力ノ許ス範圍内ニ於テ其最大ナルモノヲ採レハ足レリトス。此主義ニ基キ吾人ガ現時ノ戰艦ニ期望シ得ル最大速力ハ蓋シ約二十節ナルヘシ。固ヨリ速力ノ優長ハ戰術上利ナキニアラサルモ、二十節ノ内外ニ於ケル一二節ノ差隔ハ決戰々術上ニ著シキ利益ヲ生セサルコト已ニ前章ニ論述シタル如クナルヲ以テ、戰艦ヲ本務トセル戰艦ニ於テハ僅少ノ優速ヨリモ寧ロ攻撃力又ハ防禦力ヲ増加スルニ如カズ。一節ノ増速ニ要スル機關ノ重量ヲ攻撃力ニ轉スルトキハ其増勢ノ比例ハ増速ノモノヨリモ遙ニ大ナリ

戰艦ノ能力中速力ニ干連シテ考慮スベキモノハ其航續力ナリ。航續力ハ主トシテ戰略上ノ要求ヨリ打算セサル可ラスト雖モ、單ニ戰術上ノ要求ヲ充サンニハ其標準ヲ交戰時間ニ取ルヲ要ス。而テ今後ノ海戰ハ二日以上ニ亘ルコトアルヲ豫期シ。其前後ニ消費スヘキ燃料ノ分量ヲ加ヘテ、戰闘速力(最大速力ヨリ)ニテ三晝夜以上ノ航續ヲ標準トセサル可ラス。此航續力ハ通常速力ヲ以テスル戰略上ノ諸要求ヲモ充タスニ足ルナリ。但シ近時石油燃料及旋轉機(タービン)ヲ用フルニ及ンテヨリ大ニ燃料ノ貯藏容積ヲ輕

減シ、一等戰艦ハ其航續力ニ對スル充分ノ燃料ヲ搭載シ得ルニ至レリ

第三節 巡洋艦ノ本能

○巡洋艦ノ本務ハ戰艦ノ耳目トナリテ搜索及偵察ニ從事シ、或ハ敗敵ノ追擊、敵驅逐隊艇隊ノ擊攘其他商船ノ拿捕等ニ任スルニアリ。此本務ニ適應セシメンニハ其本能トシテ速力及航續力ヲ第一ニ置カサル可ラス。然レトモ其速力アルヲ以テ追擊戰ノ重要部ヲ働カサル可ラサルノミナラズ、搜索及偵察等ニ任スルニ當リテモ、尙ホ敵ノ全種艦ニ對シ威力ヲ以テ我カ任務ヲ強行シ、或ハ敵ノ全一任務ヲ阻害セサル可ラサルガ故ニ、或ル程度迄攻撃力及防禦力ヲ保有セサル可ラス。若シ巡洋艦ニシテ(二三等巡洋艦ト雖モ)攻防二力ニ乏シク單ニ運動力ノ優超ヲ以テ足レリトセハ、宛カモ武裝ヲ施シタル快速商船即チ所謂假裝巡洋艦ト撰フ處無ク、軍國ハ敢テ此ノ如キ製艦ニ浪費センヨリハ寧ロ高速ノ商艦ヲ徵發スルニ如カス。之ニ反シ裝甲巡洋艦ヲ以テ一種ノ快速戰艦タラシメントシテ其攻防力ヲ増大スルニ勉メ、其主能タル速力ノ減退ヲ顧慮セサルカ如キモ亦一方ノ極端ニ失シタルモノニテ、寧ロ初ヨリ之ヲ戰艦トシテ建造スルヲ得策トス。夫ノ速力二十節内外ノ裝甲巡洋艦ノ如キ機力ノ進歩セル今日ニ於テハ最早巡洋艦ノ本能ヲ失シ、攻防力ノ劣弱ナル二等戰艦ニ等シク、帶ニハ短ク擲ニハ長ク、將來ノ用兵家ヲシテ其用途ヲ撰ムニ腐心セシムヘキ無要ノ戰鬥單位ナリトス

如上巡洋艦ノ本能ノ標準ヲ定ムルハ由來各軍國ノ焦慮セル處ニシテ、到底單一ノ標準ヲ以テ一型ノ巡

洋艦ヲ造リ、其雜多ナル戰術及戰略上ノ諸要求ニ應セシムルコト難キカ故ニ、茲ヨ巡洋艦ニ一等乃至三等ノ種別ヲ生シ、一等巡洋艦ハ比較的攻撃力ヲ大ニシテ裝甲ヲモ施シ、又二三等巡洋艦ハ快速ヲ主能トシテ攻防力ヲ減少シ、左記ノ原則ニ準ヒ各種巡洋艦ヲ備ヘサル可ラサルニ至レリ

一、各等巡洋艦ハ戰艦ヨリ優速ナラサル可ラス

二、高等巡洋艦ハ下等巡洋艦ヨリモ攻防力大ナラサル可ラス

三、下等巡洋艦ハ高等巡洋艦ヨリモ優速ナラサル可ラス

此原則ハ製艦上動カス可ラサルモノニシテ、若シ造船術上之レニ適合セル巡洋艦ヲ建造スル能ハストセハ固ヨリ之ヲ製ル可ラス、何トナレハ其本能ヲ亡失セル無要物タルノミナラズ、却テ之レアルガ爲ニ實戰ニ當リ強テ其用途ヲ作ラントシ、終ニ不虞ノ失敗ヲ醸スヘキ原因タルヘケレバナリ

此原則ニ準據セル近時ノ巡洋艦ノ種別ハ大抵一等巡洋艦(裝甲)及二等巡洋艦(保護)ノ二種トナレリ。是レ造船術ハ未タ二等巡洋艦ヨリ優速ナル三千噸内外ノ三等巡洋艦ヲ建造スルニ苦ムノミナラズ、近時通報艦ノ構造進歩セルタメ、之レト二等巡洋艦ノ間ニ此一艦種ヲ設クルノ必要ナキニ至リタルヲ以テナリ

○以上ハ巡洋艦ノ本能ニ就キ其標準ノ要領ヲ述ヘタルモノナリ、以下更ニ之ヲ詳說セントス
巡洋艦ノ主能タル速力ハ二十四節以上ナルヲ要シ、戰艦ニ比シ少クモ四節優速ナラサル可ラス。三節

以內ノ優速ハ其戰略及戰術上ニ及ホス利益眞ニ僅少ナリ。例ハ茲ニ十五哩ヲ隔テ、我ヨリ避退セントスル三節劣速ノ敵艦隊アリト假定センニ、之ニ近接シテ戰鬥ヲ強ユル迄ニハ實際五時間以上ヲ要シ、發見時機ニ依リ、多クハ夜陰ニ妨害セラレ交戦ノ目的ヲ達スル能ハサルヘシ。又二等巡洋艦ハ一等巡洋艦ヨリモ更ニ一節乃至二節ノ優速アルヲ要ス、若シ此長所無リセハ二等巡洋艦ハ到底敵一等巡洋艦ノ行動範圍内ニ進入シテ其本務ヲ遂行スルコト難ク、從テ其行動範圍ヲ著シク縮少サル、ニ至ラン

巡洋艦ノ航續力モ亦戰艦ヨリ大ナラサルヘカラサルハ論ヲ俟タス、而テ其標準ハ主トシテ戰略上ヨリ打算スルヲ要スト雖モ、戰艦ト等シク戰闘速力(最大速力ヨリ二節ヲ減シタルモノ)ニテ三晝夜ノ航續ヲ標準トセハ優ニ戰略上ノ諸要求ニモ應シ得ルナリ。但シ排水量一萬五千噸以下ノ巡洋艦ニテ、假リニ其戰闘速力ヲ廿三節トスレバ通常吃水ヲ以テ三晝夜ノ航續燃料ヲ搭載スルコトハ稍ヤ困難ナリ

○巡洋艦ノ攻防力ハ其副次ノ能力ナリ、若シ之レニ戰艦ニ匹敵スヘキ攻防力ヲ賦與スルトキハ其重量ハ遙ニ戰艦ヲ超過シ、初ヨリ之ヲ基準戰艦トシテ建造スルニ如カス。故ニ戰艦本能ノ基準已ニ一定セル以上ハ其排水量ニ超過セサル範圍内ニ於テ巡洋艦ノ最大排水量ヲ定メ、之レニ戰艦ニ優ルヘキ必要ノ速力及航續力ヲ與ヘタル後、攻防ノ力量ヲ定ムルヲ至當トス。是レ實ニ沒却スヘカラサル分業ノ原則ヨリ由來セルモノニシテ、巡洋艦ノ攻防力ガ其速力ノ優超ト相加減スルタメ戰艦ヨリモ劣勢ナラサル可ラサルハ自然ノ數理ナリトス。而テ一等巡洋艦ハ決戦ニモ參加シ得ルノ攻防力ヲ保有セシムルタメ

其排水量ハ殆ント戰艦ト全等ナラシムルノ必要ヲ生シ、二等巡洋艦ハ唯タ敵ノ全種艦ニ匹敵シ得ルノ
攻防カヲ保有セシムルヲ標準トシテ遙カニ之ヲ輕小ニ建造シ得ルナリ
之ヲ要スルニ巡洋艦ノ主能ハ速力ト航續力トニアリテ、此ノ主能アルカ故ニ戰艦ノ耳目手足トナリ、
戰艦其物ヲシテ其本能ヲ發揮セシムルモノナリ。此故ニ巡洋艦ノ必要ハ過去帆船時代ノ海軍ニ於テモ
尙ホ「フリゲート」トシテ存在シ、又將來ノ軍事カ如何ニ進歩スルトモ此必要ハ依然トシテ消滅スル
モノニアラス

第四節 通報艦、海防艦及砲艦ノ本能

○通報艦

通報艦ノ本務ハ其名稱ノ如ク通報傳令ニ任シ又巡洋艦ニ代リテ近距離ノ偵察及搜索等ニ從事スルニア
リ。而テ其戰鬪任務ハ主トシテ敵ノ驅逐隊艇隊ヲ驅逐擊攘スルニアリ。戰鬪單位ノ分業ニ於テ此艦種
ノ必要ナル所以ハ迅速ヲ專一トセル通信上ノ要求、并ニ敵驅逐隊ヲ擊攘スヘキ戰術上ノ要求ニ對シ、二
等洋艦ノ速力ニテハ満足スル能ハサルヲ以ナリ

然ルニ近時英國ニ於テハ偵察艦(Scout)ナル名稱ノ下ニ此艦種ヲ製出シ、二等巡洋艦ノ主務ヲ之レニ負
ハシメントスルモ、蓋シ是レ一時ノ謬策ナランカ。偵察及搜索勤務等ハ之ヲ強行スルニ必要ナル攻防ノ
威力ヲ要スルカ故ニ、單ニ速力ノ長所ヲ特ミ敵影ヲ見レハ直ニ避退セサルヘカザルガ如キ小艦ニ信賴

スル能ハサルノミナラズ、遠距離ノ偵察、荒天ノ搜索等ハ到底二等巡洋艦ヨリ小型ニシテ遂行シ得ラルヘキモノニアラズ。通報艦ハ唯タ其副務トシテ近距離偵察及搜索ヲ命シ得ルノミ

如上ノ本務ニ適合セシムヘキ通報艦ノ本能ハ主トシテ其高速力ニアリテ、二等巡洋艦ニ對シ少クモ二節以上ノ優速アルヲ其標準トス。而テ近時ノ造船術ハ優ニ此要求ニ應スルノ技能ヲ有シ、排水量一千乃至一千五百噸ノ通報艦ニ三十節以上ヲ駛走セシムルハ己ニ可能ノ事實トナレリ。但シ航續力ニ至リテハ石油燃料ヲ用ユルモ到底此ノ如キ小艦ニ其多キヲ望ムコト難シ

又其副能タル攻撃力ハ驅逐艦ヲ擊沈シ得ヘキ砲力ト魚雷攻撃ヲ決行シ得ヘキ水雷力ヲ標準トシ、敢テ其大ナルヲ貴ハス、防禦力ニ至リテハ更ニ其多キヲ要セスシテ殆ント皆無ナルモ可ナリ。是レ其主能タル高速力ハ敵ノ驅逐隊ニ對シ間接ノ攻撃力タルト全時ニ、敵ノ巡洋艦ニ對シテハ間接ノ防禦力タルヲ以テナリ

○海防艦

海防艦ノ本務ハ其名稱ノ如ク海岸要塞ト協力シテ海岸防禦ニ從事スルニアリテ、所謂移動要塞是レナリ。故ニ其本能ハ其攻撃力及防禦力ニ殆ント全力ヲ傾注シ、運動力、航續力、耐海力等ニ至リテハ唯タ一地ヨリ一地ニ移動シ得ルヲ以テ足レリトス。本來海國戰略ノ本義ヲ了解シ、海上ニ於ケル積極的攻勢防禦カ國防ノ上策タルヲ自覺セル軍國ニハ此種ノ戰鬥單位ヲ備フルノ要無シ、故ニ世界海軍國中

今尙ホ海防艦ヲ建造スルモノハ獨リ米國アルノミ、蓋シ全國ハ其歴史上ニ於テ「モニトル」艦カ南北戰
争ニ成功シタルニ由リ之ヲ珍重シ、且ツ海岸要塞ノ薄弱ナルタメ其地方自治制カ各州沿岸ノ首要都市
ニ此ノ如キ移動防禦ヲ有セントスルニ原因セルモノナラン。加之世運ノ進歩ニ伴ヒ年々歲々其本能ヲ
失ヒツ、アル幾多ノ舊式戰艦ハ自然ニ海防艦ニ入籍シツ、アルヲ以テ、舊來ノ海軍國ハ假令之ヲ備フ
ルノ要アルモ新ニ之ヲ建造スルニ及ハサルヘシ

○砲艦

砲艦ノ本務ハ海岸ニ近接シ或ハ河川ヲ溯航シ主トシテ陸上ノ敵ヲ制壓スルニアリ。故ニ其本能ハ輕小
淺底ニシテ淺水航行ニ耐ヘ、且ツ陸兵ヲ威嚇スルニ足ルノ攻撃力ヲ具備スレバ可ナリ。即チ我海軍ノ
軍艦宇治、隅田ノ如キハ此艦種ニシテ昔日ノ所謂砲艦トハ較ヤ其趣ヲ異ニス

戰時此ノ如キ艦種ノ需要起ルハ海上作戰己ニ進行シ、海陸協同作戰ノ開始サル、時期ニアリテ、固ヨ
リ其多數ヲ要セス。是レ驅逐艦、水雷艇ハ此目的ニ代用シ得ルノミナラス、戰時ニ際シ淺吃水ノ小瀛
船ニ武裝シ所謂假裝砲艦トシテ急須ニ應シ得ルヲ以テナリ。然レトモ其建造費極メテ低廉ナルカ故ニ
大海軍國ハ其平戰時ノ軍事經濟上却テ多少ノ砲艦ヲ備フルヲ利便ナリトス

第五節 驅逐艦、水雷艇及潛水艇ノ本能

○驅逐艦

驅逐艦ノ名稱ハ其實ヲ適表セス、寧ロ水雷艦若クハ艇ト謂フヲ適稱トス。何トナレハ其本務ノ主タルモノハ敵艦隊ニ對スル水雷攻撃ニアリテ、水雷艇ノ驅逐ハ却テ其副務タレバナリ。戰鬪單位ノ分業ニ於テ此艦種ノ必要ナル所以ハ夜戰ノ武器タル魚雷ヲ利用スル爲メ輕快敏速ニシテ且ツ或ル程度迄航洋ニ適スルモノヲ欠クヘカラサルヲ以テテリ

此本務ニ適應スヘキ驅逐艦ノ本能ノ主タルモノハ高速力ト水雷攻撃力ナリ。而テ其速力ノ標準ハ機力ノ許ス限り多々益々大ナルヲ要シ、其増加スルニ從ヒ間接ニ其攻撃力及防禦力ヲ助長ス。水雷攻撃力モ亦較ヤ大ナルヲ要シ、少クモ魚雷發射管四門、搭載魚雷十二個、特種水雷四連以上タラサル可ラス。從來ノ驅逐艦ニ於ケル發射管二門、搭載魚雷四個ニテハ一合戰ノ後忽チ其攻撃力ヲ消耗シ、長時ノ戰鬪ニ亘リテハ到底其主能ヲ發揮スルコト難シ。砲煩ノ攻撃力ハ此艦種ノ副能ニ屬ス、若シ其主務ヲ敵水雷艇ノ驅逐擊滅ニアリトセハ之レニ重キヲ措クノ必要アレトモ、其然ラサルハ已ニ前記セルカ如シ。然レトモ亦敵ノ驅逐艦、水雷艇ト對抗セサル可ラサルヲ以テ其主能ヲ減殺セサル限り砲力ヲモ大ナラシムルヲ可トス

驅逐艦ノ航續力、貯藏力等ニ至リテハ到底其多キヲ望ムコト難シ、故ニ或ル程度ヲ超ユレハ母艦ノ補給力ニ須タサル可ラス。近時驅逐艦ノ主能ヲ完全ニスルト全時ニ航續力等ヲ増加センカ爲ニ排水量千噸以上ノモノヲ建造セントスル傾向アレトモ、此ノ如キハ却テ通報艦ニ近似シテ分業ノ本旨ニ戻リ

遂ニ輕快敏速ノ操縦ヲナス能ハサルニ至ラン。蓋シ此艦種ニ充ツヘキ排水量ノ最大限ハ約六百噸ナルヘシ

○水雷艇

水雷艇ノ本務ハ驅逐艦ト全ニシテ唯タ其行動半徑ノ縮少セルモノナリ、即チ驅逐艦ノ如ク艦隊ト共ニ外洋ニ行動スルモノニアラスシテ、或ル地點ヲ根據トシ其局地ニ使用セラル、ニ過キス。故ニ主トシテ海岸防禦ニ充テ、攻勢作戰ニ於テハ先ツ之ヲ前進根據地ニ移シ、然ル後其戰局ニ利用スルモノトス

從來ノ水雷艇ハ其大小ニ準シ之ヲ一等乃至三等ニ種別シ、其一等艇ハ航洋ニ耐ユルモノト認定サレシモ、其航續力、耐海力等ノ過少ナル爲メ、常ニ其母隊ノ行動ヲ妨害スルコト多シ。二、三等艇ニ至リテハ耐海力益々乏シキヲ以テ港灣防禦ニモ尙ホ充分ニ其効用ヲ盡クスコト難シ。本來此ノ如キ小艇ニ精巧ナル魚雷ヲ裝載シテ波浪ノ上ニ之ヲ發射セシメントシタルハ、港内ノ平水ヨリ打算シタル過大ノ要求タリシヲ以テ、將來ノ雷艇ハ港灣防禦用ノモノト雖モ悉ク排水量百噸以上ノ一等艇タルヲ要ス

○潜水艇

潜水艇ハ近時海軍ニ其頭角ヲ現シ來リ、從來ノ平面戰術ヲ水面下ニ於テ立体的ニ變化セシムルノ端緒ヲ開キ、後世頗ル恐ルヘキ兵器ナリト雖モ、其發達尙ホ未タ幼稚ナルカ故ニ戰鬪單位トシテ此ニ列叙

スルハ較ヤ早キニ過キタリ。今マ現時ノ發達程度ニ於テ之レニ任務ヲ課スレハ、海岸ノ要地ニ近ク行動シテ其地ニ近接セントスル敵艦ヲ威嚇セシムルニ過キスシテ、可動的艦艇ト云ハンヨリハ寧ロ之ヲ移動的敷設水雷ト看做スヲ適當トス。故ニ今日ハ未タ海岸防禦ノ要具ニ屬スト雖モ將來必ス容積ト運動力ヲ増加シテ終ニ有力ナル攻勢兵器ト化スルハ當然ノ理勢ナリトス

第三章 艦隊ノ編制

第一節 総説

○兵軍ノ單位ヲ集團シテ軍隊ヲ編組スル之ヲ編制ト謂フ。夫レ五指ノ交々彈クハ一拳ニ如カス、個々力行ノ成績ハ多力結合ノ功果ニ及ハサルコト遠シ。兵戰ニ於テモ此物理ハ同一ニ適合スルモノニテ、兵衆結合シテ同一目的ニ對シ協同動作スルトキハ其効力ハ兵衆個々ニ動作スルヨリモ遙ニ優大ナリ。結合無キ軍隊ハ其個兵ノ能力如何ニ卓越スルモ所謂烏合ノ衆ニシテ兵戰ニ使用ス可ラザルナリ。此結合一致ヲ得ント欲セハ兵衆ヲ以テ軍隊ヲ編制シ一指揮ノ下ニ統率セシメサル可ラス。是レ即チ編制ノ目的ニシテ、軍ノ海陸ヲ問ハス編制ノ必要欠ク可ラサル所以ナリトス。然レトモ直接一指揮ノ下ニ運用シ得ル兵力ニハ自ラ其限度アルカ故ニ、若干ノ戰鬥單位ヲ集團シテ先ツ軍隊ヲ編成シ、更ニ其數隊ヲ集團シテ團隊トナスカ如ク、順次ニ其組織ヲ大ニシ、各級ノ團隊ニハ之レニ相當スル指揮官及其機關即チ所謂司令部ヲ置キ、以テ全軍ノ指揮ヲ系統スルモノナリ。但シ編制トハ必スシモ軍隊ノ有形的結合ヲ意味スルモノニハアラス。其集散離合ニ拘ラス一指揮ノ下ニ動作スヘキ無形的結合即チ意志ノ結合ヲ謂フモノニシテ、有形的結合ハ之ヲ運用スル隊形ニ過キズ、意志ノ結合セサル軍隊ハ假令形容外觀ニ於テ團結スルモ未タ烏合タルヲ免レサルナリ。編制ノ目的主トシテ此點ニ存ス

○編制ニ二種アリ、臨時編制及永久編制是レナリ、前者ハ通常軍ニ編制ト慣稱シ、後者ハ特ニ之ヲ建制ト謂フ。又建制ハ之ヲ平時編制及戰時編制ニ區別シテ平戰兩時ニ於ケル兵力ヲ増減ス。臨時編制ノ軍隊ハ有事ニ際シ急ニ編成スルモノナレハ、常ニ確定セル永久編制ノ下ニ訓練サレタル軍隊ニ劣ルヘキハ論ヲ俟タス。然レトモ平時ニ當リ多大ノ軍隊ヲ建制常備スルハ軍費上許サ、ルヲ以テ、之ヲ平時編制及戰時編制ニ區別シ、平時ハ單ニ幹隊ノミヲ置キテ其隊規ヲ維持シ、戰時ニ際セハ直ニ之ヲ補充シテ所要ノ兵力ヲ保有セシムルモノナリ

陸軍ニテハ其兵種ノ素質齊一ニシテ兵力多大ナルカ故ニ、古來ノ實戰ニ於ケル多度ノ經驗ニ鑑ミ、各軍國其見ル所ニ準ヒ各一定不變ノ建制ヲ劃立スト雖モ、海軍ニ於テハ其最小單位タル艦艇素質ノ不同并ニ其進化ノ急劇ナルノミナラス、艦數寡少ニシテ其増減常無キヲ以テ列國海軍中今ニ至ル迄尙ホ一定ノ建制ヲ確定シタルモノ無シ。然リト雖モ世運ノ發達ニ伴ヒ海上武力ハ愈々増大スヘキカ故ニ、海軍モ亦用兵上必須ノ原則ニ基キ、終ニ其建制ヲ劃立スルニ至ルハ自然ノ趨勢ニシテ、已ニ英國ノ如キハ各方面ニ分置セル艦隊ノ編制ヲ可成的變更セサルノ方針ヲ執リ、獨國モ亦將來ノ艦隊ヲ建制スルノ目的ヲ持シテ其新艦艇ヲ建造シツ、アルカ如シ。蓋シ戰術ノ要求スル處ハ善美ナル編制計畫ノミニアラスシテ、其編制ニ依リ運用ノ練磨ヲ積ミタル艦隊ナリトス、假令計畫完美ナラサルモ一定ノ建制ヲ以テ平時ヨリ訓練サレタル艦隊ハ戰時ニ於ケル其効用遙ニ大ナリ

平戰時ニ於ケル艦隊ノ建制前記ノ如ク必要ナリトスレバ、軍國カ其海軍ヲ創設若ハ擴張スルニ當リテモ、須ク先ツ其艦隊編制ヲ劃定シ、然ル後之ヲ編組スヘキ艦艇(豫備艦ヲモ合シテ)ヲ建造スルヲ正當ノ順序トス。換言スレバ艦艇アリテ編制アルニアラスシテ、編制先ツ立テ之レニ要スル艦艇生スルモノナリ。若シ此順序ヲ顛倒スルトキハ遂ニ艦隊ニ編入スル能ハサル無用ノ艦艇ヲ餘スカ、或ハ編制上必要ナル艦艇ヲ欠クニ至ラン。然レトモ製艦ハ其工事ニ長日月ヲ要シ、一時ニ所要ノ艦數ヲ製出艤裝スルコト難キカ故ニ、何レノ海軍國ト雖モ大抵現有セル新舊雜多ノ艦艇ヨリ撰拔シテ艦隊ヲ編制スルノ已ムヲ得サルニ至ルヲ常トス。此ノ如キ變法ヲ執ル場合ニ於テハ宜シク左記ノ二項ニ準據シテ一隊ヲ編制スヘキ艦種ヲ撰擇スルヲ要ス

一、各單位ノ運動力ヲ齊一ナラシムルコト

二、各單位ノ攻撃及防禦力ヲ齊一ナラシムルコト

即チ第一ニ艦ノ速力及回轉力ノ齊一ナルヲ重ンジ、第二ニ攻防力ノ齊一ナルモノヲ拔キテ一隊ヲ編成セサル可ラス。是レ戰術ノ最大要求タル各單位ノ戰闘力ヲ均一且ツ極度ニ發揮セシムルカ爲ニ欠ク可ラサル要件ナルヲ以テナリ

○團隊ノ小大ヲ問ヘス、軍隊ヲ編制スルニ當リ、其要旨トスル處ハ左ニ列記スルカ如シ

一、指揮、運用ニ便利ナルコト

二、 分離、別働ニ便利ナルコト

三、 教育、訓練ニ便利ナルコト

四、 給與、經理ニ便利ナルコト

此ノ第一、第二ノ要旨ハ主トシテ戰畧及戰術上ノ要求ヨリ生シ、之レニ適應センニハ、其團隊ヲ編成スル單位ノ員數ヲ制限セサル可ラス。又第三、第四ノ要旨ハ主トシテ教育及戰務上ノ要求ヨリ來リ、之レニ準據スルニハ各團隊ヲ編成スル單位ノ員數ヲ均等ナラシムルヲ要ス。固ヨリ前者ハ主眼ニシテ後者ハ副次ノ要旨ナリト雖モ、教育訓練及給與經理ニ關スル事ハ軍隊ノ敵前ニアルト否トヲ問ハス、又平時ト戰時ニ拘ラス、終始其利便ヲ享クルモノナルガ故ニ何レモ全時ニ考慮セサル可ラズ。而シテ若シ此各要旨ヲ充サントシテ相容レサルトキハ前段列記ノ順序ニ從ヒテ重キヲ置クヲ通則トス前記編制ノ要旨ニ基キ、團隊ヲ編制スルニ二分法、三分法及四分法ノ三種アリ二分法ハ其隊ヲ二分シテ使用シ得ル如ク二個單位ヲ以テ之ヲ編成スルヲ謂ヒ、三分法ハ三個單位、四分法ハ四個單位ヲ以テ編成スルヲ謂フ。例ハ陸軍々隊ニ於テ二箇旅團ヲ以テ一師團ヲ編成スルハ二分法ニシテ、三箇大隊ヲ以テ一聯隊ヲ編成スルハ三分法ナリ。而シテ各法團隊ノ大小ニ依リ利害適否アリト雖モ、編制ノ要旨ニ對シテハ二分法ヲ採ルヲ最モ簡便ナリトス。三分法ハ其隊ノ一部ヲ豫備隊トシテ使用スル等ニハ便ナルモ、作業等ヲ分担セシムル場合ニ於テ常ニ三分ノ必要ヲ生シ較ヤ隊務ノ繁雜ヲ増加スルノ不利

アリ。故ニ軍ノ海陸并ニ團隊ノ大小ヲ問ハス、二分法若クハ四分法ヲ採レル軍國最モ多シ

第一節 戰隊ノ編制

○戰隊トハ戰艦若クハ巡洋艦ヲ以テ編組セル單隊ノ總稱ニシテ、直接一指揮ノ下ニ戰鬪シ得ル海軍々隊ノ最大ナルモノ、即チ戰術單位ヲ謂フナリ

一箇戰隊ヲ編制スルニ當リ、相干連シテ考慮スヘキ二問題ハ(第一)之ヲ最大單位トシテ使用スルニハ其艦數ヲ幾何ニ制限スルヤ(第二)之ヲ編組スル小單位ノ數ヲ撰ムニ二分法ヲ取ルカ將タ三若クハ四分法ヲ取ルヤニアリ。現時ノ軍艦ヲ以テ制規ノ隊形ヲ形成セシムルニ列艦ノ距離四百米突トスレバ、一箇戰隊ノ艦數ハ八隻ヲ以テ其最大限トス。之ヲ超フルトキハ隊列延長シテ指揮運用ニ不便ナルノミナラズ、敵ニ對シ適當ノ戰鬪距離ニ近キ全隊ノ攻撃力ヲ均一且ツ極度ニ發揮セシムルコト難シ。故ニ各海軍國ハ大抵八隻編制ヲ採用シ、之ヲ二分法ニ依リ二箇小隊單位トシ、更ニ各小隊ヲ二箇分隊單位トシ、各分隊ヲ二箇ノ單艦單位トシ、以テ二分法及四分法ヲ併用シテ分離別働ノ利便ヲ共得セシム。獨リ佛國ノミハ更ニ艦數ヲ減シテ六隻編制ヲ採用シ、二分法ニ依リ之ヲ三隻編制ノ二箇小隊單位トナセリ。蓋シ六隻編制ハ其隊列緊縮スルガ故ニ操縱ニハ便ナリト雖モ、八隻編制ノ如ク單艦ニ至ル迄二分法ヲ以テ分割スル能ハサルノミナラス、戰鬪ノ際一艦ヲ亡失スルモ其兵力ヲ劣弱ナラシムルノ不利アリ。我カ元龜天正時代ノ水軍ニテハ正船、奇船ト稱別セル二隻ノ群隊ヲ以テ戰鬪單位トナシ、兩隻終

始相離ル、コト無く協力シテ戰鬪其他ノ任務ニ從事セシメ、又正隊、奇隊ノ二箇群隊ヲ以テ一箇小船隊ヲ編制スルカ如ク、凡テ二分法ニ依リ二箇單位ヲ以テ艦隊ヲ編制シタリ。此古法ハ今日多數ノ海軍國カ採用セル二分法ノ八隻編制ト全一ニシテ、吾人ノ祖先ハ遠キ昔ヨリ已ニ適良ナル艦隊編制法ノ範例ヲ指示セリ

如上六隻及八隻編制ノ利害ヲ比較スルトキハ八隻編制ノ利點多キヲ以テ、今後ノ海軍戰隊ハ其艦艦タルト巡洋艦タルトヲ問ハス、凡テ二分法ノ八隻編制ヲ採用スルヲ可トス。而テ其戰鬪單位ヲ二隻ノ分隊トシ、二箇分隊ヲ以テ小隊ヲ編成シ、二箇小隊ヲ以テ一箇戰隊ヲ編制シ、或ハ最小ノ分隊單位、又ハ較ヤ大ナル小隊單位、或ハ又最大ノ戰隊單位ニ便宜離合シ得ル如クセハ、以テ戰術及戰略上ノ諸要求ニ應スルニ足ルヘシ

○前記八隻編制ノ戰隊ニ指揮官ヲ配スルニハ、戰隊指揮官トシテ高級將官一名、各小隊指揮官トシテ下級將官二名ヲ置キ(二等巡洋艦ノ戰隊ハ戰隊指揮官ヲ兼テ第一小隊指揮官ヲ兼テシム)其一名ハ戰隊指揮官ト乘艦ヲ共ニシ、戰隊ノ參謀長ヲ兼テシムルヲ適良トス。此配置法ハ戰隊カ一團トナリテ行動スル場合等ニハ較ヤ指揮ノ系統ヲ複雑ナラシムルカ如クナレトモ、却テ然ラス。八隻ノ戰隊單列ニテ運動スル場合等ニハ戰隊指揮官カ總艦ノ運動ヲ通視監督スルコト難キヲ以テ、各小隊指揮官カ其部下小隊ノ行動ヲ監督シテ戰隊指揮官ニ對シ責ヲ負フコトハ全隊ノ行動ヲ正確敏速ニ遂行スル上ニ於テ比較的有利ナリトス。加之各小隊ニ指揮官

ヲ配スルトキハ分離別働ニ便ナルハ論無ク、平戰時ニ於ケル教育訓練并ニ給與經理ニ關シテモ亦其責任ヲ分担セシムルノ利アリ。夫ノ英國艦隊等ニテ首席指揮官ノ現在セル間ハ次席指揮官ニ何等ノ權能ヲ附與セス、從テ其責任ヲ皆無ナラシムルカ如キハ決シテ編制ノ要旨ニ適合セルモノニアラサルナリ。但シ各分隊ニハ特ニ指揮官ヲ配セス、分隊トシテ分離別働スル場合ニハ先任艦長ヲシテ之ヲ指揮セシムルモノトス

○一箇戰隊ニ附屬スヘヤ通報艦ノ員數ハ編制上ニ二隻ヲ定數トシ、各小隊ニ一隻宛ヲ附屬ス、而テ其任務ノ主ナルモノハ各級指揮官ノ通信傳令、該戰隊ノ警戒勤務又ハ附屬驅逐隊ノ嚮導等ニ服スルニアリ（附記）本章戰隊編制ノ名稱中小隊ヲ聯隊ニ分隊ヲ群隊ニ改名スルヲ可ナリト認ム、是レ小隊及分隊ノ名稱ハ陸軍ノ戰鬪單位タル一中隊ノ編制名稱ナレバナリ

第二節 水雷戰隊ノ編制

○水雷戰隊トハ其戰鬪單位タル驅逐隊若クハ水雷艇隊ヲ以テ編組セル單隊ノ總稱ニシテ、水雷戰ニ使用スヘキ海軍戰術單位ノ最大ナルモノナリ。水雷戰隊ノ編制ハ各海軍國ニ未タ其例ヲ見スト雖モ、多數ノ驅逐隊、艇隊ヲ統率運用スルニ當リ、其指揮ヲ統一シテ協同動作ヲ遂ケシムルカ爲メ、己ニ其必要ヲ感スルノ時期ニ達セリ

○水雷戰隊ヲ編成スルニ當リ、先ツ攻究スヘキモノハ其ノ戰鬪單位タル驅逐隊、艇隊ノ編制ナリト

ス。夫レ驅逐隊、艇隊ハ夜間ノ接戰ヲ主務トスルモノナリ、多數艦艇ノ集團ハ夜間ノ接戰ニ適セサルノミナラス、却テ友軍混雜ノ原因ヲナスカ故ニ其編制ハ四隻ヲ最大限トス、此數ヲ超フルトキハ最小單位トシテ夜間ノ集團到底望ム可ラサルナリ。若シ驅逐艦ノ艦型及速力尙ホモ増大スルトキハ其最小單位ハ終ニ二隻ヲ適良トスルニ至ラン

現時各海軍國驅逐隊、艇隊ノ編制ハ大抵四隻ヲ標準トス。獨リ獨國ハ五隻編制ヲ採リ、其司令艇ニ大型ノ艦艇ヲ充テタリ。此特種ノ編制ハ操縱ニモ亦分離スルニモ不便ナルノミナラス(最小單位ト雖モ必要アレバ分離スルコトアリ)大型ノ司令艇ヲ編入スルカ如キハ却テ全隊ノ運動力ヲ不均一ナラシメ益々操縱ノ不便ヲ増加スヘシ

○戰鬪單位ノ編制ヲ四隻ト定メ、幾箇ノ最小單位ヲ以テ水雷戰隊ヲ編組スヘキヤハ次ニ來ルヘキ問題ナリ。戰術上ヨリ見ルトキハ全一ノ攻撃目標ニ對シ全時ノ襲撃ニ使用シ得ル驅逐隊(艇隊)ハ二隊ヲ超ユ可ラス。故ニ驅逐隊(艇隊)ニ隊ヲ以テ聯隊ヲ編組シ、此二隊ハ常ニ協同シテ攻撃目的ヲ達セシムル如クシ、更ニ二箇聯隊(即チ驅逐隊四箇)ヲ合セテ水雷戰隊ヲ編制シ、之ヲ一指揮ノ下ニ置クトキハ二分編制法ノ利便ヲ享得シ、哨戒勤務等ニ從事スル場合ニ於テ業務ノ分担及服務ノ交代等ノ便益至大ナルベシ。或ハ聯隊ノ編制ヲ除キ驅逐隊(艇隊)三隊ヲ以テ直ニ水雷戰隊ヲ編組スルノ一法ナキニアラサルモ、是レ純然タル三分法ニシテ、二隊ノ協同動作ヲ基準トセル戰術上ノ要求ニ適應セサルノミナラス、分離別働ノ不便モ亦少シトセス。故ニ水雷戰隊ノ編制ハ前記二箇聯隊(四箇驅逐隊)十六隻ノ編制ヲ最モ適良

ナリト認ム

○水雷戰隊ニ指揮官ヲ配スルニハ各驅逐隊(艇隊)ニ司令タル少佐若ハ中佐指揮官ヲ置キ、聯隊ノ指揮官ハ先任驅逐隊司令ヲシテ之ヲ兼テシメ、水雷戰隊指揮官トシテ特ニ將官又ハ大佐ヲ充ツルヲ可トス此水雷戰隊指揮官ニハ必要ノ幕僚ヲ附シテ隊務ヲ處理セシメ、又其乘艦ニハ別ニ通報艦一隻ヲ充ツルヲ便ナリトス。之レ四箇ノ驅逐隊ヲ指揮運用スルニハ隊中ノ一艦ニ偏在スル能ハサルノミナラス、母隊タル戰隊トノ通信連絡其他敵情ノ觀察等ハ到底小艦艇ノ能クスル處ナラサルヲ以テナリ

(附記) 水雷戰隊編制法ノ可否ニ就テハ尙ホ第二編第四章「水雷戰隊戰法」ヲ參考スルヲ要ス

第四節 大艦隊ノ編制

○大艦隊トハ各種戰隊及水雷戰隊并ニ之レニ要スル特務隊等ヲ以テ編組セル艦隊ノ名稱ニシテ、一指揮ノ下ニ統率セラレ、獨立シテ一方面ノ作戰ニ從事シ得ヘキ海軍戰略單位ヲ謂フ

大艦隊ノ編制法ニ就テハ各海軍國未タ完全ナル範例ヲ示サス、多クハ戰時ニ當リ其敵國ノ兵力及編制ニ對シ優利ナル臨時ノ編制ヲ案劃セントスルモノ、如シ。然レトモ軍國カ其國軍ヲ常備スルニ當リ其兵力及編制ヲ劃定セス、漫然艦艇ヲ建造シテ唯タ其隻數及噸數ノ多キヲ競フガ如キハ決シテ用兵ノ目的ニ適應スルモノニアラズ。少クモ平時ニ於テ其戰略單位ヲ確定シ、戰時ニ際セハ幾何ノ戰略單位ヲ以テ聯合大艦隊ヲ編成スヘキヤヲ豫定シ置カサル可ラス

○大艦隊ヲ平時ヨリ建制スルト、或ハ戰時ニ當リ臨時ニ編制スルトヲ問ハス、先ツ其主力タルヘキ戰艦戰隊ノ兵力ヲ限定スルハ之レカ編制ノ基礎ナリ。主幹定立スレハ其枝葉タルヘキ補助兵力ハ自ラ決定スヘシ。現時兵器ノ發達程度ヨリ其効力ノ極限ニ稽ヘ、全一ノ攻撃目標ニ對シ全時ニ使用シ得ル戰艦戰隊(八隻)(編制)ノ兵力ハ蓋シ二箇戰隊(十六隻)ニ超フル能ハス。三箇戰隊以上ヲ一指揮ノ下ニ置キテ協同動作セシムルハ殆ント不可能ニ屬シ、之ヲ全時ニ使用スルモ實際戰列ニ立チテ其戰鬪力ヲ極度ニ發揮セシメ得ルモノハ二箇戰隊ニ過キササルヘシ。故ニ大艦隊ノ主力ハ二箇ノ戰艦戰隊ヲ以テ編組スルヲ其極限トシ、若シ三個戰隊以上ノ兵力アルトキハ之ヲ二大艦隊ニ分ツヲ戰略上有利ナリトス。加之二箇戰隊單位ヲ以テ一艦隊ヲ編制スルコトハ二分編制法ノ利點ヲ享得スルカ故ニ戰略及戰術上ノ諸要求ニ應シテ分離、分業等ニ便ナルコト尙ホ前節小單位ノ編制ニ就テ述ヘタルカ如シ

○大艦隊ノ主隊ヲ先ツ二箇ノ戰艦戰隊トシ、次ニ定ムヘキモノハ其耳目手足トシテ之レニ附屬スヘキ巡洋艦戰隊ノ兵力ナリトス。近時無線電信カ海上ノ遠距離通信ニ利用セラル、ニ至リテヨリ、艦隊ニ附屬スヘキ巡洋艦ノ隻數ハ昔日ノ如ク多數ヲ要セザルカ如キ觀アルモ、其實決シテ然ラス。通信距離ノ伸長ハ却テ海戰ノ局面ヲ廣大ニシ警戒ノ方面、偵察ノ距離、搜索ノ面積漸次ニ增長シ、從テ益々其多數ヲ要求スルニ至レリ。此等戰略上ノ要求ハ固ヨリ際限アラスト雖モ、今日モ尙ホ昔日ノ如ク戰艦一隻ニ對シ巡洋艦二隻ヲ充ツルハ妥當ノ標準ナルヘシ。加之戰鬪ニ當リテモ戰列翼端ノ警固、追

撃戦ノ先驅、退却戦ノ殿備、或ハ又我水雷戦隊ノ掩護、敵水雷戦隊ノ擊攘ノ如キ、何レモ巡洋艦戦隊ノ力ニ待タサル可ラス、故ニ單ニ戰術上ノ要求ヨリ打算スルモ、前記ノ標準ハ未タ足ラザルモ過キタリト謂フ能ハサルナリ。即チ最小限トシテ主戰々隊一箇ニ巡洋艦戦隊二箇ヲ附屬スヘキモノトス。而テ此巡洋艦戦隊ノ幾分ヲ一等巡洋艦戦隊トスヘキヤニ就テハ、攻防力ノ強大ナル装甲巡洋艦ト、速力ノ優長ナル保護巡洋艦トニ對スル戰略及戰術上ノ需要ハ大抵相半スルモノトシ、一等巡洋艦戦隊(八隻)ニ隊、及二等巡洋艦戦隊(編制)ニ隊ノ配合ヲ適良ト認ム。此配合ハ戰略上ノ必要ニ應シテ大艦隊ヲ二分シテ二方面ニ作戦セシムル等ノ場合ニ於テ戰隊單位ヲ分割スルコト無ク、各種戰隊一箇宛ヲ分配スルノ利便ヲ有ス

○次ニ定ムヘキモノハ大艦隊ニ編入スヘキ水雷戦隊ノ兵力ナリ、水雷戦隊ハ夜戦ニ使用スヘキ唯一ノ兵種ナルガ故ニ、其兵力ハ晝戦ニ於ケル主戰々隊ニ匹敵セサル可ラス。今假リニ一箇ノ驅逐隊能ク戰艦一隻ニ對抗シ得ルモノトセハ、前記ノ標準ニ基キ、大艦隊ノ水雷戦隊ハ少クモ四個(驅逐艦ノ總數六十四隻)以上タルヲ要ス。然レトモ斯ノ如キ多數ノ驅逐艦ヲ戰場ニ於テ有効ニ運用スルニハ之レカ掩護タルヘキ巡洋艦ノ隻數ヲ増加スルヲ要スルノミナラス、戰境ニ於テ之レカ給與ニ欠クルコト無カラシメンニハ多大ノ給與機關ヲ具備セサル可ラス。是レ主戰々隊ノ繁累ヲ増加シ、其行動ト威力トヲ澁鈍セシムル原因タルカ故ニ、適當ノ隻數迄之ヲ削減セサル可ラス。前記ノ利害ヲ對照シテ水雷戦隊ノ兵力ヲ撰擇セハ

蓋シ三個水雷戰隊(驅逐艦ノ總數四十八隻)トスルヲ最モ適良ナリトス。此總隻數ハ各種戰隊ノ艦數四十八隻ニ相當スルカ故ニ特務部隊ノ力ヲ借ラスシテ、一時戰隊ノ給與ヲ受クル場合等ニ於テモ軍艦一隻カ驅逐艦一隻ヲ担任シ得ルノ便アリ

○前段列叙シ來リタル主戰々隊二隊、一等巡洋艦戰隊二隊、二等巡洋艦戰隊二隊、并ニ水雷戰隊三隊ヲ以テ戰鬪部隊トシ、之レカ行動生存ニ必要ナル特務部隊ヲ加ヘテ一大艦隊ヲ編成スルトキハ即チ左表ノ如シ

〔戰鬪部隊〕

總司令部	第一戰隊	第二戰隊	第三戰隊	第四戰隊	第五戰隊	第六戰隊	第一水雷戰隊
通戰報艦	通戰報艦	通戰報艦	通戰報艦	通戰報艦	通戰報艦	通戰報艦	通戰報艦
一 三	一 二	一 二	一 二	一 二	一 二	一 二	一 四
隻隻	隻隻	隻隻	隻隻	隻隻	隻隻	隻隻	隻隻

第二水雷戰隊
第三水雷戰隊

全 全
右 右

〔特務部隊〕

特務隊司令部

二等巡洋艦若クハ假裝巡洋艦

一 隻

水雷母艦

三 隻

水雷敷設艦

二 隻

給炭船

三十二隻

給水船

四 隻

給兵船

二 隻

給品船

四 隻

工作船

二 隻

通信船

四 隻

病院船

二 隻

(附記) 右ノ外戦局ノ必要ニ應シテ假裝巡洋艦、砲艦、假裝砲艦、水雷艇隊、海底電線敷設船等若

干ヲ附屬ス

此編制表ニ於テ總司令部ノ乘艦ヲ一等巡洋艦ニ定メ、之ヲ戰隊ヨリ獨立セシメタルコトハ英國海軍等ノ範例ニ反スト雖モ、此ノ如キ大艦隊ヲ統率指揮スル總指揮官カ一戰隊ノ一艦ニ坐乗シテ之レト行動ヲ共ニスルカ如キハ、戰略上ヨリ見ルモ將タ戰術上ニ於テモ決シテ有利ナルモノニアラス。所謂旗艦先頭シテ指揮官自ラ其意志ノ向フ處ニ麾下ヲ嚮導スルカ如キハ一戰隊ヲ指揮スル部將ノ任ナリ、若シ假リニ其必要アリトスルモ獨立旗艦ヲ以テ爲ス能ハサルコトニアラス。英國ハ其古名將タルネルソノカ常ニ旗艦嚮導ノ戰法ヲ執リタルニ倣ヒ、今尙ホ之ヲ墨守スルト雖モ、蓋シネルソンハ當時其部將ニ充分ノ信頼ヲ置カサリシト、又一ツハ自ラ率先シテ其部下ノ士氣ヲ興奮セシメンガ爲ニ此流義ヲリ執タルニ過キスシテ、必スシモ戰法上ノ利害ヨリ之ヲ撰ミタルモノニアラス。主將自ラ先頭シテ戰鬪ノ初期ヨリ危地ニ進入シ、最終ニ至ル迄戰鬪ノ全局ヲ主宰スルノ責任ヲ輕視スルカ如キハ抑々將ニ將タルモノ、敢テスヘキ行爲ニアラサルナリ。若シ夫レ大艦隊ヲ分離シテ三箇戰隊ノ兵力ニ半減スルトキハ便宜上先任戰隊ノ指揮官カ總指揮官ヲ兼ヌルモ可ナリト雖モ、此場合ニ於テモ尙ホ獨立旗艦ヲ設クルヲ利便ナリトス

又此總司令部ノ乘艦ヲ一等巡洋艦ニ撰ミタルモノハ戰略及戰術上ニ於テ敏速ノ運動ヲ要スルト全時ニ多少ノ自衛の攻防力ヲ保有セサル可ラサルヲ以テナリ。而テ之レニ通報艦三隻ヲ專屬シ總指揮官ノ命令傳達ニ從事セシム、故ニ通報艦ハ各戰隊及水雷戰隊ノモノヲ合セテ其總數十六隻ナリ

特務部隊ニ屬スル諸艦船ハ水雷母艦及給炭船ノ外何レモ二隻若クハ四隻トナセリ、是レ大艦隊ヲ二分
スル場合ニ適應センガタメナリ。而テ其内四隻アルモノハ大抵其補給基地等ニ往復スルニ當リ、常ニ
其半數ヲ前進根據地ニ泊在セシムルノ必要アルモノニシテ、水雷母艦ノ三隻ナルハ各水雷戰隊ニ一隻
宛ヲ充テタルモノナリ。然レトモ此編制表ニ掲ケタル特務艦船ハ其容積豊裕ニシテ設備完全ナルモノ
ト看做シ、最小限ノ隻數ヲ示セルモノニテ、若シ各船ノ容積設備不充分ナルカ、或ハ戰局ノ情況之ヲ
要スルトキハ更ニ此隻數ヲ増加セサル可ラス

○以上ハ單ニ本職ノ理想ニ屬スル大艦隊編制ノ一例ヲ示シタルニ過キササルモノニテ、未タ何レノ海軍
國ニ於テモ此ノ如キ編制ヲ劃定セルニハアラス。惟フニ現時世界ノ海國タルモノ前記ノ如キ大艦隊ノ
編制ヲ確立シテ之ヲ其戰略單位ト定メ、一朝有事ニ際シ少クモ二箇戰略單位ヲ整備出師セシムル如ク
經營セハ、以テ其國利ヲ完全ニ保護シ國權ヲ積極ニ伸張シ得ルニ足ルヘシ

第四章 艦隊ノ隊形

第一節 總 說

○凡ソ軍隊カ其編制ノ下ニ集團シテ地上ニ存在スルトキハ、其運動セルト靜止セルトニ論ナク、必ツ或ル地域ヲ占領シ、其各單位ノ占位ニ依リ自ラ一定ノ形狀ヲ成ス。此ノ形狀不規則ニシテ列伍整頓セサルトキハ假令其編制ハ善美ニ劃立スルモ未タ團隊トシテ編隊行動スル能ハサルノミナラス、各單位相互ノ運動及通信ヲ妨害シテ衝觸ノ危險ヲ醸シ、從テ戰鬪若ハ航行ノ目的ニ適應スル能ハサルナリ。此ニ於テ軍隊ニ制規ノ隊形ヲ設クルノ必要ヲ生ス。(海軍ニテハ小艦隊ノ隊形ヲ陣形ト謂ヒ大艦隊ノ隊形ヲ陣列ト謂フ)去レハ小ハ一艇隊ノ陣形ヨリ大ハ聯合大艦隊ノ陣列ニ至ル迄、皆ナ前記ノ目的ニ適應スル如ク制定サレタルモノニテ、其戰鬪ノ目的ニ對スルモノヲ戰鬪隊形ト謂ヒ、航行ノ目的ニ應スルモノヲ航行若ハ碇泊隊形ト謂フナリ。然レトモ隊形ノ基本ヲ成スモノ即チ所謂基本隊形ハ戰術上ノ要求ニ適合セル戰鬪隊形ニシテ、航行及碇泊隊形モ可成の其儘基本隊形ヲ用フルカ、或ハ之レニ近似シテ容易ク基本隊形ニ變形シ得ルモノナラサル可ラス。是レ艦隊ハ其敵前ニアルト否トニ拘ラス常ニ戰鬪ノ姿勢ヲ持スルノ必要アルヲ以テナリ

○編制ノ大小ヲ問ハス艦隊ノ隊形ヲ制定スルニ當リ、通則トシテ則ルヘキ要旨ハ左記ノ五項ニ外ナラス

- 一、一定ノ方面ニ全隊ノ最大攻撃力ヲ發展シ得ルコト
- 二、所要ノ方向ニ全隊ノ正面ヲ變換スルニ自在ナルコト
- 三、列伍ノ整頓迅速且ツ容易ナルコト
- 四、隊列ノ屈伸自在ナルコト
- 五、各單位間ノ通信迅速且ツ確實ナルコト

此諸要旨ヲ充タサバ、隊形ハ戰鬪及航泊ノ目的ニ適應スヘキモノニアラス。特ニ其第一及第二項ヲ具備セサルモノハ到底戰鬪隊形トシテ採用スルコト難シ、何トナレバ此二要旨ハ相須テ戰鬪ノ本旨タル攻撃ヲ有効ニ繼續セシムルモノナレバナリ。然レトモ現時ノ艦艇ヲ以テ編組セル艦隊ニ此等ノ各要旨ヲ完全ニ具備セシムルコトハ事實上不可能ナルカ故ニ、唯タ比較的最も多ク之レニ適合セル隊形ヲ最良ト認ムルノ外ナシ。而テ各要旨中其ノ何レニ重キヲ置クカニ至リテハ、前段列記ノ順序ニ據ルヲ正當ナリトス。蓋シ隊形ナルモノハ軍隊ノ姿勢ニシテ、恰モ劍道ニ於ケル構ヘノ姿勢ノ如ク刀ヲ上段ニ構フレハ對手ヲ攻撃スルニ迅速ナルモ、我カ胴部以下ノ防禦ニ適セス。或ハ又中段ニ構フレハ全身ノ防禦ニ便ナルモ、攻撃ニ當リ刀ヲ揚ル丈ケノ時間ヲ要スルノ不利アリ。即チ一方ニ利スレハ他方ニ失スルハ數ノ免レサル處ニシテ、艦隊ノ隊形ヲ制定スルニ當リテモ、亦其完全無欠ヲ望ムトキハ到底得ル處無キヲ以テ、豫メ自家戰術上ノ主義ヲ確定シ(積極的攻撃主義、消極的攻撃主義或ハ中正的攻防主義等ノ如シ)之レニ基キテ其要求ニ適應

スル隊形ヲ選擇スルヲ可トス。凡ソ主義ノ確立ハ人間ノ萬事ヲ決定スルニ最モ必要ナルモノニテ、此大本成立セサレハ其末法ヲ構成シ得ラルヘキモノニアラス。即チ前記隊形ノ要旨ノ如キモ積極的攻撃主義ヨリ算出サレタル一種ノ數理ニ外ナラサルナリ

第二節 戰隊ノ隊形

○戰隊ノ編制ヲ二箇小隊、四箇分隊ノ八隻戰鬪單位及通報艦二隻トシ、先ツ其基本隊形ヲ制定セントスルニ當リ、各別ニ講究スヘキ事項ハ左ニ列記スルカ如シ

一、隊形ノ列數

(註) 隊列ハ單列トスヘキカ將タ複列トスヘキヤ

二、隊形ノ正面

(註) 隊列ハ縱列、橫列、若ハ梯列ノ何レヲ撰ムヘキヤ

三、列艦ノ距離

(註) 隊列ヲ形成セル艦々ノ距離ヲ幾何トスキヤ

四、列艦ノ序位

(註) 隊列ノ諸艦ハ艦型ノ異同、艦長任官ノ先後等ニ依リ之ヲ如何ナル順序ニ配列スヘキヤ

五、指揮艦及通報艦ノ占位

(註) 戰隊及各小隊指揮官ハ列艦ノ何レニ坐乘スヘキヤ、又通報艦ハ隊列ニ對シ如何ニ占位セシムヘキヤ

即チ前記ノ項目ニ準ヒ以下逐次ニ之ヲ論究セントス

(隊形ノ列數)

前節ニ述ヘタル隊形制定ノ要旨ニ從ヒ、一定ノ方面ニ戰隊ノ最大攻撃力ヲ發展シ、且ツ其正面變換及隊列ノ屈伸ヲ自在ナラシメンニハ、到底單列陣形ヲ撰ムノ外アラサルナリ。單列ハ一見單調無趣ナルカ如シト雖モ、精細ニ之ヲ研究スレハ、唯タ較ヤ通信上ノ不便アルノ外、殆ント隊形制定ノ各要旨ニ適應セル最良ノ陣形ニシテ、其通信上ノ不便モ鱗次陣形ノ應用、若ハ通報艦ノ利用ニ依リ或ル程度迄之ヲ補除シ得ルナリ。故ニ古今ノ海戰ニ於ケル戰列艦隊ノ隊形ハ大抵單列ナラサルモノ無ク、唯タリッサニ於テ塙軍カ異様ノ後翼梯陣ヲ採リタル除外例アルノミ。複列陣形ニテハ僚艦相遮蔽シテ射撃ノ効力ヲ減殺スルノミナラス。戰術上ニ最モ必要ナル正面變換ニ時間ヲ要シ、且ツ其自在ヲ欠クノ不利アリ。彼ノ所謂小隊陣形若ハ分隊陣形ノ如キハ皆ナ隊形ノ要旨ニ違反シ、戰鬪隊形ハ固ヨリ航行隊形トシテモ採用シ得ヘキモノニアラス。蓋シ此ノ如キ無要ナル複列陣形カ現時モ尙ホ列國海軍ノ艦隊操典ニ殘存セル所以ハ他無シ、第十九世紀ノ初ヨリ其終リニ亘リ、海戰トシテ見ルヘキ戰例無ク、其間海軍ハ唯タ外交的示威若ハ平和的儀式ニノミ使役セラレタルタメ、漸次ニ形容ノ整美ヲ銜フノ弊風ヲ

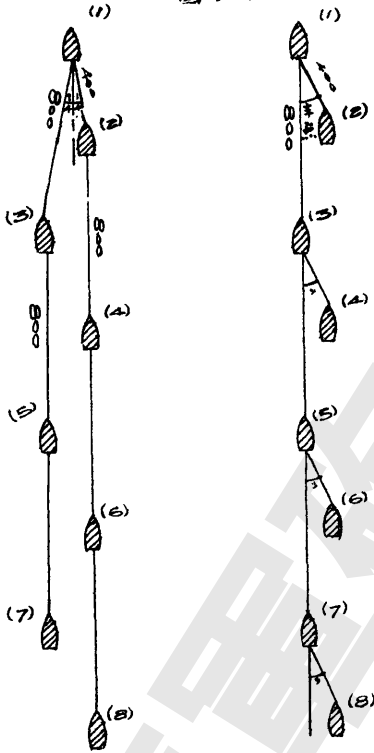
生シ、加ルニ瀛力ノ應用ハ益々其傾向ヲ助長シタルヨリ、英佛等ニ於ケル紙上ノ軍人ガ、其祖先ノ戰場ニ於テ經驗シタル遺法ノ重ンスヘキヲ忘却シ、徒ラニ形式ニ拘泥シテ複雑ヲ以テ能事ト誤認シ、二列ヲ四列ニ變シ三角ヲ四角トナスガ如キ虚飾的艦隊運動ヲ構成シタルモノガ、海戰ノ中絶ト共ニ尙ホ今日ニ因襲サレタルニ外ナラサルナリ。夫レ隊形制定ノ目的ハ戰鬪若ハ航泊ニアリ、此目的ニ適應セサル隊形何ノ要ヲ爲サンヤ、要ナキモノ之ヲ操典ニ記載スルノ資格アラサルナリ。軍事ハ凡テ簡約ヲ貴フ、其簡約ナルモノモ、之ヲ實地ニ應用スルニ當リテ、尙ホ多大ノ習練ヲ要ス、然ルヲ况ンヤ複雑ナルモノニ於テヲヤ。故ニ曰ク戰隊ノ隊形ハ單一ナル單列陣形ナラサル可ラス

(隊形ノ正面)

戰隊ノ隊列ヲ單列トシ、次ニ決定スヘキハ其正面ヲ何レニ向クヘキヤノ問題ナリ。今列艦八隻ヲ一列ニ並列シ、各艦ノ正面即チ艦首ヲ列線ト全一方向ニ向クレハ縱列即チ單縱陣ト成リ、又列線ト直角ノ方向ニ向クレハ橫列即チ單橫陣ヲ成シ、其他ノ各方向ニ向クレハ或ル角度ノ梯列即チ單梯陣ト成ルヘシ。此三種ノ内、隊形ノ正面トシテ最モ適當ナルモノハ縱列ノ正面ナラサル可ラス。是レ本來單艦攻撃力ノ大部分カ其正面ニアラスシテ側面ニアルノミナラス、其連動力カ縱動ノミニ限ラレ寸毫ノ橫動ヲ許サ、ルニ基因セルモノニテ。隊形制定ノ主要々旨トシテ一定ノ方面ニ戰隊ノ最大攻撃力ヲ發展シ、其正面變換ヲ迅速且ツ容易ナラシメンニハ、唯タ縱列ニ於テ之ヲ充タスヲ得ルノミ。其他隊列ノ整頓、

屈伸自在ナルモノ、即チ所謂柔軟(Flexible)ニシテ操縦ニ便ナルモノモ亦縦列ナリ。之ヲ卑近ノ物ニ例フレハ横列又ハ梯列ヲ操縦スルハ恰カモ棒ヲ取扱フカ如クナルモ、縦列ハ尙ホ鍵ヲ取扱フニ似タリ。其操縦ノ難易固ヨリ同日ノ論ニアラス。故ニ單縦陣ハ現時ノ艦型ガ變形セサル限り、永遠ニ最良無二ノ基本隊形タルヲ失ハサルヘシ。但シ之ヲ操縦スルニ當リテハ縦列ヲ基本トシテ適宜横列及梯列ヲモ混用スヘキハ言フヲ俟タサルナリ

圖 參 肆



然リト雖モ前段ニ述タル如ク單列陣形ニハ其縦列ナルト否トヲ問ハス、列艦互ニ其信號ヲ遮蔽シテ通信速度ヲ減スルノ欠點アリ。此欠點ヲ補除センカタメ單縦陣ノ變形トシテ第三圖ニ示スカ如キ一種ノ鱗次陣形アリ。此陣形ハ從來米國海軍ニ於テ航行隊形ニ常用サル、モノニテ、其目的トスル處ハ之ヲ單縦陣ト全

一ニ操縦シ、主トシテ信號ノ速度ヲ増加シ、傍ラ霧中航行ノ際隣艦ノ近接ヲ豫防スルニアリ。但シ戰鬪ノ際ハ單縱陣ノ隊列屈折若ハ彎曲スルコト多ク、從テ列艦互ニ其信號ヲ遮蔽セザルカ故ニ、戰鬪隊形トシテハ此鱗次陣形ヲ採用セス

(列艦ノ距離)

戰隊ノ基本隊形ヲ單縱陣ト定ムレハ其列艦ノ距離ヲ幾何米突ニ調整スヘキ乎。兵力集中ノ原則ヨリ打算スレハ距離ハ可成的短縮スルヲ可トス、然レトモ密集ハ被害ヲ局限シ難キノミナラス、友艦互ニ其動作ヲ妨礙スルノ不利アリ。故ニ或ル程度迄疎散ナラサル可ラサルモ亦戰術ノ要旨ナリ。即チ密集ニ過キス、疎散ニ失セザル適度ノ距離ヲ求メサル可ラス。現時ノ艦船ノ全長及其運動力ニ考ヘ、我カ隊列ニ對スル敵ノ遠距離魚雷ノ攻撃、并ニ回轉圈ノ異同ヨリ生スル一齊回頭ノ危險等ヲ顧慮スルトキハ、蓋シ四百米突ハ其消極ニシテ最モ適當ノ距離ナルヘシ。即チ一箇戰隊ノ全長二千八百米突ニシテ、現時ノ海戰ニ於ケル近戰距離ニ對シ、戰隊ノ展開幅員トシテモ亦適良ナルモノナリ

(列艦ノ序位)

戰隊ヲ編組セル列艦ノ艦型同一ニシテ其戰鬪力ニ等差ナキトキハ、列艦ハ如何ニ之ヲ配列スルモ戰術上ニ利害ノ關係ナク、爲シ得レハ總艦同型同質ナルヲ可トス。然レトモ造船術ノ進歩ニ伴フヘキ艦型ノ異同ハ到底免ル可ラサルヲ以テ、列艦ノ序位ニモ亦考慮ヲ要ス、即チ其要件左ニ列擧スルカ如シ

一、最大防禦力ノ艦ヲ列端ニ近ク配置スルヲ要ス

(理由) 隊列ノ最弱點ハ其端末ニアリテ敵ノ攻撃ヲ蒙ルコト最大ナレハナリ

二、最大速度力ノ艦ヲ列端ニ近ク配置スルヲ要ス

(理由) 正面ノ前後ヲ問ハス隊列ヲ整頓スルニ當リ後半ノ列艦ハ増速ヲ要スルモノナレバナリ

三、最大回轉力ノ艦ヲ列端ニ近ク配置スルヲ要ス

(理由) 回轉圈ノ大ナル列艦カ中部ニ位スルトキハ一齊回頭ニ當リ隊列ヲ亂シ易キヲ以テナリ

四、最大攻撃力ノ艦ヲ列端ニ近ク配置スルヲ要ス

(理由) 隊列ノ端末ニアル列艦ハ最大攻撃力ヲ發揮スルヲ要スル場合多ケレバナリ

五、最先任官ノ艦ヲ列端ニ近ク配置スルヲ要ス

(理由) 正面ノ前後ヲ問ハス隊列ノ嚮導ニ便ナレバナリ

前記ノ五要件ハ固ヨリ全時ニ充タスコト難ク、往々利害相矛盾スルコトアルヘシ。此ノ如キ場合ニ於テハ前段列記ノ順序ニ準ヒ重キヲ置カサル可ラス。就中必要ナルモノハ其第一項ニシテ、第五項艦長任官ノ先後ノ如キハ必スシモ深ク拘泥スルノ要無シ。何トナレハ苟モ艦長タルモノハ其任官ノ先後ニ拘ラス、隊列ヲ嚮導スルノ器量アルヘキモノナレバナリ

(指揮艦及通報艦ノ占位)

戰隊指揮官及各小隊指揮官ハ單縱陣ヲ形成セル列艦ノ何レニ坐乗スヘキヤニ就テハ全然反對セル左記二様ノ主義アリ

一、戰隊指揮官ハ先頭艦ニ、先任小隊指揮官ハ殿艦ニ後任小隊指揮官ハ四番艦(參謀長小隊指揮官ヲ兼ヌルコトアルトキハ先頭艦)ニ乘艦スルモノ

二、戰隊指揮官ハ中央艦(四番若ハ五番艦)ニ各小隊指揮官ハ先頭艦及殿艦ニ乘艦スルモノ

前者ハ即チ緒戰期ノ機動ニ重キヲ置キ、戰隊指揮官ノ意圖ヲ以テ其隊ヲ嚮導シ、若シ正面ヲ反轉スルトキハ先任小隊指揮官ヲシテ戰列ヲ嚮導セシメントスルノ主義ニシテ、我國及米國海軍等ノ常用セル處ナリ。又後者ハ即チ戰隊指揮官ヲシテ危害多キ列端ヲ避ケ、終戰期迄全隊ノ運動ヲ監督スルニ便易ナル中央ニ自重セシメ、戰列ノ嚮導ハ各小隊指揮官ニ委任セントスルノ主義ニシテ、英國其他ノ海軍ニ於テ之ヲ唱道實行セルモノアルヲ見ル。両者何レモ利害得失アリテ主義トシテハ共ニ理想ニ適セリ。然レトモ古來實戰ノ教訓及士氣ノ關係等ヲ考察スルトキハ、吾人ハ前者ニ同意セサルヲ得サルナリ。何トナレハ緒戰期ニ於ケル適良ナル指導カ戰勝ノ端緒ヲ開キタル戰例最モ多ク、戰隊指揮官トシテノ責任ハ此時已ニ其大部分ヲ了レルモノト謂フヘケレハナリ

前記二法ノ外、尙ホ戰隊指揮官ハ獨立旗艦ニ坐乗スルノ說アルモ、一箇戰隊毎ニ戰列ニ立タザル一艦ヲ割クハ兵力ノ經濟上到底許サル可キモノニアラス

又二隻ノ通報艦ハ何處ニ占位スヘキカ。先頭ニアル戰隊指揮官ノ信號ヲ中繼シ、以テ通信速度ヲ増加センニハ、三番艦及六番艦ノ各正横六百米突ニ占位スルヲ最モ適當トス。然レトモ戰闘中ハ信號中繼ノ必要少キノミナラズ、隊外ノ傳令及敵驅逐隊等ノ奇襲ニ對シ、我カ列端ノ警固ヲ要スルカ故ニ、非戰側ニ於テ列端ノ斜前及斜後各六百米突ニ占位スルヲ可トス

○前段述ヘ來リタルカ如ク、戰隊ノ基本隊形ハ單縱陣ヲ措テ、他ニ求ムヘキモノ無シ。而テ之ヲ操縦スルニ當リテハ、一齊回頭ノ角度ノ大小ニ依リ、一時或ハ單橫陣トナリ或ハ又各角度ノ單梯陣ヲ形成スルコトアルモ、常ニ其基本タル單縱陣ニ復元スヘキモノトス。此基本戰闘隊形ハ航行及碇泊隊形ニモ適應スルカ故ニ、此以外ニ小隊陣形、分隊陣形或ハ兩翼梯陣等ノ如キ異種ノ隊形ヲ設クルノ必要アラサルナリ。隊形ノ種類雜多ナルハ運動法ヲ複雜ナラシムルノミニテ、本來隊形ノ由テ生シタル戰闘及航泊ノ目的ニ對シ何等ノ益無ク、却テ其害ノ大ナルモノアリ。人或ハ諸種ノ隊形ヲ設ケ、以テ訓練ノ目的ヲ達セントスルモノアリト雖モ、凡ソ教練ノ法簡ヨリ雜ニ入り、漸次ニ最終ノ達域ニ練入スルヲ道トシ、未タ雜ヨリ簡ニ入ル如キモノアラズ。加之單ニ單縱陣ノミノ運動スラモ、之ヲ眞面目ニ訓練シテ、遺憾ナク戰術上ノ諸要求ニ應スルヲ得セシムル迄ニハ、尙ホ一年有餘ヲ要シ、艦長ノ交迭年ヲ越ヘザルカ如キ海軍ニ於テハ訓練ノ時日ナキニ苦ムヲ常トス。然ルヲ況ンヤ雜多ノ隊形及其運動法アルニ於テオヤ。惟フニ此ノ如キ複雜ナル隊形及其運動法ヲ設クルトキハ、如何ナル指揮官カ戰隊ニ長タ

ルモ、遂ニ其操縦ニ熟達シ安シテ戰陣ニ臨ミ得ルノ日ハ來ラサルベシ

第三節 水雷戰隊ノ隊形

○水雷戰隊ノ編制ハ通報艦一隻及二箇水雷聯隊ヨリ成リ、水雷聯隊ハ二箇驅逐隊若クハ艇隊ヨリ成リ、驅逐隊艇隊ハ四隻ノ驅逐艦又ハ水雷艇ヨリ成ルコト已ニ前章ニ述ヘタル如シ。以下主トシテ驅逐艦ヲ本位トシ、先ツ其戰闘單位タル驅逐隊ノ隊形ヲ制定シテ、次第二水雷戰隊ノ隊形ニ及ハントス

○驅逐艦ノ隊形

隊形制定ノ要旨ニ準據スルトキハ、驅逐隊ノ基本隊形ハ指揮艦嚮導ノ單縱陣ヲ最モ適良トシ、其列艦

ノ距離ハ二百米突ヲ適度トス。即チ隊列ノ全長六

百米突ナリ。戰術上ノ要求ニ適應センニハ列長ハ

可成的短縮シテ緊縮隊形タラシメサル可ラサルカ

故ニ、艦型及速力ノ増大スルニ從ヒ、二百米突ノ列

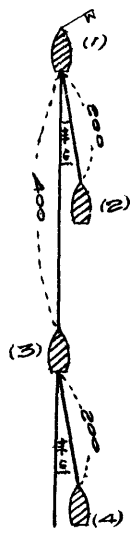
距離ヲ危險ナリトスレハ第四圖ノ如キ鱗次單縱陣

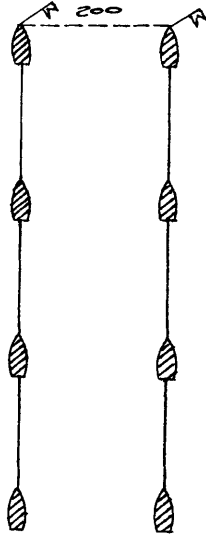
ヲ用フルヲ安全ナリトス。此鱗次陣形ハ素ヨリ單

縱陣ト全ニ操縦スルモノニテ、之レカタメ特別

ノ運動法ヲ設クヘキモノニアラス

第四圖





第五圖

驅逐隊ノ隊形ハ前記單縱陣ト鱗次單縱陣ノ外特種ノ隊形ヲ制定スルノ必要ヲ認メス。隊形ノ雜多ナルハ運動ノ復雜ヲ來タシ、却テ必要ナル訓練ノ進歩ヲ妨クルコト前節戰隊ノ隊形ニ就キテ詳論シタルカ如シ。獨國海軍ニ於テハ水雷艇隊ノ編制五隻ナルカ故ニ、一種ノ後翼梯陣ヲ設ケ之ヲ單縱陣ノ如クニ操縱シ、以テ其隊形ヲ緊縮スレトモ、未タ戰鬪及航行ノ目的ニ適スルモノト認メ難シ

○水雷聯隊ノ隊形

水雷聯隊ヲ編成セル二箇驅逐隊ハ水雷戰ト砲戰トヲ問ハス常ニ協全動作スヘキモノニテ、或ハ集結シテ一群ヲ成シ敵ニ對シ、或ハ連繫シテ二方面ヨリ全一ノ目標ヲ攻撃スルコトアルヲ以テ、其隊形ハ兩隊相互ノ運動ヲ阻害シ、射線ヲ遮蔽スルモノナラサルヲ要ス。此ノ如キ隊形ハ單列ノ外ニ之ヲ求ムル能ハサルガ故ニ、水雷聯隊ノ基本隊形モ亦二箇驅逐隊ヲ連接セル單縱陣ナラザル可ラズ、即チ其隊列ノ全長一千四百米突ナリ。然レトモ此兩隊ノ指揮艦ハ屢々通信ノタメ第五圖ノ如ク並頭シテ航行スルノ便利ナルコトアルヘシ。故ニ基本隊形單縱陣ノ外特ニ此並列隊形ヲ設ケ置クヲ可トス。而テ其正面

變換ハ其角度ノ大小ニ拘ラス、内方隊ノ減速ト外方隊ノ増速トニ依リテ之ヲ行フモノナリ。英國海軍等ノ驅逐隊ハ其平時ノ航行ニ於テ大抵此並列隊形ヲ執リ、熟練ニ依リ宛カモ單縱陣ノ如ク巧ニ之ヲ運用スルヲ見ル

○水雷戰隊ノ隊形

水雷戰隊ノ二箇聯隊ハ戰鬪ニ當リ大抵分離シテ行動スルモノニテ、全時ニ全一攻撃目標ニ對シ集結シテ運動スルコト殆ント稀ナリ。故ニ水雷戰隊ヲ一團トナシタル戰鬪隊形ヲ設クルノ必要ナク、唯タ其指揮艦嚮導ノ下ニ編隊航行スルノ隊形アレバ足レリトス。而テ此航行隊形ハ各水雷聯隊ノ基本隊形ヲ維持スルト全時ニ各隊ノ通信ヲ容易ナラシムルタメ、可成的其全長ヲ緊縮セルモノナルヲ要ス。此ノ如キ要求ノ下ニ水雷戰隊ノ隊形ヲ制定セハ蓋シ第六圖ニ示スカ如キモノ、外、之レアラザルベシ

第六圖

(第一隊列)

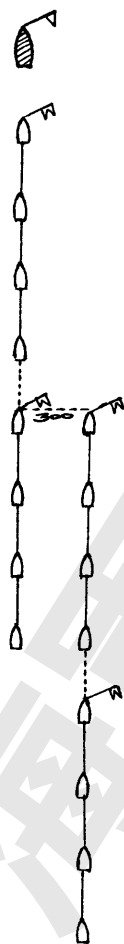


(第二隊列)



(備考) 必要ニ應ニ間隔ヲ二百米突減縮スルコトヲ得

(第三隊列)



前記第一陣形ハ單ニ兩聯隊ヲ一縱列ニ連接シタルモノニシテ、其全長三千米突ヲ超ヘ、通信ノ不便少カラスト雖モ、出入港若ハ狹水道ヲ通過スル場合ニハ此隊形ノ外用フヘキモノナシ。第二陣形ハ即チ第一陣形ノ欠點ヲ補足スルタメ、洋中ノ航行隊形トシテ用フヘキ並列隊形ニシテ、其全長ハ緊縮シテ聯隊ニ等シク、且ツ通信モ比較的自在ナルヘシ。然レトモ此隊形ニテハ各聯隊分離ノ行動ヲ執ラントスルニ際シ、兩隊相並頭セルガタメ、右隊左ニ出テ、左隊右ニ出ルニ便ナラサルガ故ニ。更ニ第三陣形ヲ設ケテ此ノ如キ場合ニ應スルヲ得セシム。即チ其先頭聯隊ハ適宜増速シテ、先ツ所要ノ方向ニ向針シ、後續聯隊ハ先頭聯隊ノ運動ヲ妨ケ或ハ之レニ妨ケラル、コトナク、適宜後方ヨリ其目標ニ向針セシムルモノナリ。此ノ三種ノ隊形アルトキハ水雷戰隊ノ編隊航行ノ目的ニ對スル諸要求ニ適應スルヲ得ヘシ

○以上ハ水雷戰隊ノ單獨航行ノ目的ニ應スル隊形ヲ述ヘタルモノナリ。然ルニ又水雷戰隊ハ屢々戰術上ノ必要ニ依リ、戰隊ニ隨伴シテ之レト運動ヲ共ニスヘキ場合アリ。此ノ如キ場合ニ於テ水雷戰隊ハ戰隊ニ對シ如何ナル位地ニ占位スヘキカラ攻究シ置カサル可ラス

戰隊カ水雷戰隊ヲ伴フトキハ、戰隊ヲ以テ主隊トシ水雷戰隊ヲ副隊トスヘキハ言フヲ俟タス。故ニ水雷戰隊ノ占位ハ戰隊ノ運動ヲ阻害シ且ツ其射線ヲ遮蔽セサルト同時ニ、常ニ戰隊指揮官ト呼應ノ距離ニアリテ必要ニ應シ戰隊ノ兩側何レニモ轉位スルニ便易ナラシメサル可カラス。如上ノ要求ヲ充サン

ニハ水雷戰隊ヲ二分シテ戰隊ノ斜前及斜後ニ占位セシムルノ外ナク、其隊形ハ即チ第七圖ニ示ス如キモノトナルベシ

第七圖



第四節 大艦隊ノ隊形

○大艦隊ノ戰鬪部隊ハ六箇戰隊及三箇水雷戰隊ヨリ編成サル、コト前章ニ述ヘタルカ如シ。此等ノ各種戰隊ハ固ヨリ戰鬪ノ目的ニ對シ一隊形ヲ成シテ運動スルコトナク、又航行ノ目的ニ對シテモ數團ニ分離シテ各別ニ行進スルコト多ク、唯タ時々一團ニ集結シテ編隊航行スルノ必要アルノミ。故ニ大艦隊ノ隊形ハ左記三様ノ要求ニ應シ得ル如ク制定シ置クヲ便利ナリトス

一、六箇戰隊ノ隊制

第四章 艦隊ノ隊形

二、三箇水雷戰隊ノ隊制

三、六箇戰隊及三箇水雷戰隊ノ隊制

以下此區別ニ準ヒ逐次ニ其隊形ヲ攻究説明セントス

○六箇戰隊ノ隊制

凡ソ數個ノ部隊ヲ集結シテ大隊形ヲ合成スルニ當リ、先ツ顧慮スヘキ事項ハ概テ左ニ列記スルカ如シ

一、各部隊個々ノ運動ヲ容易ナラシムルタメ、其基本隊形ヲ維持セシムルコト

二、各部隊個々ノ伸長若ハ列位ノ不正カ其隣隊ニ影響セサルタメ、各隊間ニ適當ノ間隔ヲ有セシムルコト

三、各部隊カ分離ノ行動ヲ執ルヘキ場合ニ際シ相互ノ運動ヲ妨害セサルタメ、各隊間ニ適當ノ間隔ヲ有セシムルコト

四、各部隊間ノ呼應連絡ヲ容易ナラシムルタメ、可成の各隊ノ配列ヲ緊縮スルコト

前記ノ四要項ヲ全時ニ顧慮シテ、航行ノ目的ニ對スル諸要求ニ應シ得ヘキ隊形ヲ案畫スルトキハ少クモ第八圖ニ示スカ如キ三種ヲ設ケサル可ラス。即チ六箇戰隊ヲ其隊號ニ準シ、八百米突ノ間隔ヲ置キテ、縦列、鱗次列、並列及方列ノ四様ニ配列シタルモノナリ。而シテ其第一陣列ハ縦長十海里ヲ超ヘ首尾相應スルコト難ク、素ヨリ之ヲ緊縮隊形ト謂フ能ハサルモ、奈何セン出入港其他狹水道ノ通過等

第八圖

第一陣列 (縱列)



第二陣列 (鱗次列)



第三陣列 (並列)



第四章 艦隊ノ隊形

第四陣列(方列)



(備考) 大艦隊指揮艦ノ占位ハ適宜トシ特ニ其定位ヲ設ケス

ニハ此隊形ノ外他ニ執ルヘキモノナシ。故ニ或程度迄之ヲ緊縮シテ第二陣列ヲ設ケ、更ニ其緊縮ノ度ヲ高メテ第三及第四陣列ヲ設ケタリ。就中第四陣列ハ最モ緊縮スルカ故ニ通信ノ便易ナルコト言フヲ俟タスト雖モ、其廣正面ナルタメ正面ヲ變換スルニ困難ナルノミナラス、各隊分離ノ運動ヲ執ルニモ亦其不便少シトセス。故ニ此隊形ハ戦闘開始前ノ陣列即チ所謂戦闘陣列等ニハ之ヲ適用スルコト難ク、唯々洋中ノ通常航行等ニ之ヲ用ユルコトアルノミ。蓋シ戦闘陣列トシテ最モ適良ナルモノハ第二陣列(鱗次陣列)ナラン

前記各種ノ隊形ニ於ケル各戰隊ノ間隔ヲ八百米突トシタルハ其基準ヲ示セルモノニテ、航行ノ際ハ各

戰隊ノ伸縮若ハ列位ノ不正等ヨリ生スル差隔ヲ豫算シ、此基準間隔ノ内外各二百米突ノ伸縮ヲ許スモノトス

又此等各種ノ隊形ハ六箇戰隊悉ク集合セルモノトシ、其隊號ニ準シテ其占位ヲ制定シタリト雖モ、大艦隊ノ一部ハ大抵警戒、搜索、偵察等ノ如キ特別任務ニ從事シテ分散シアルベキヲ以テ、常ニ隊號ニ基キ隊制ヲ立ツルコト難シ。此ノ如キ場合ニ於テハ豫メ定メラレタル序列ノ番號ニ準シテ現在セル各戰隊ヲ配列スルモノトス

如上四種ノ隊形ノ外、尙ホ大艦隊ノ隊形トシテ橫陣列、梯陣列、後翼陣列等ナキニアラサルモ、航行ノ目的ニ對スル便否ハ孰レモ小異ナルカ故ニ、寧ろ隊形ノ多種ヨリ生スル運動法ノ複雑ヲ避ケ、簡約ナル四種ニ止ムルヲ適良トス。但シ碇泊ノ目的ニ對スル隊形ハ別ニ之ヲ設クルモ可ナリ

○三箇水雷戰隊ノ隊制

水雷戰隊カ箇々ニ航行スルコトキハ前節ニ述ヘタル其固有ノ隊形ニ據ルヘシト雖モ、大艦隊編制ノ下ニ三隊ヲ合同シテ航行スルトキハ又別種ノ隊制ナカラサル可ラス

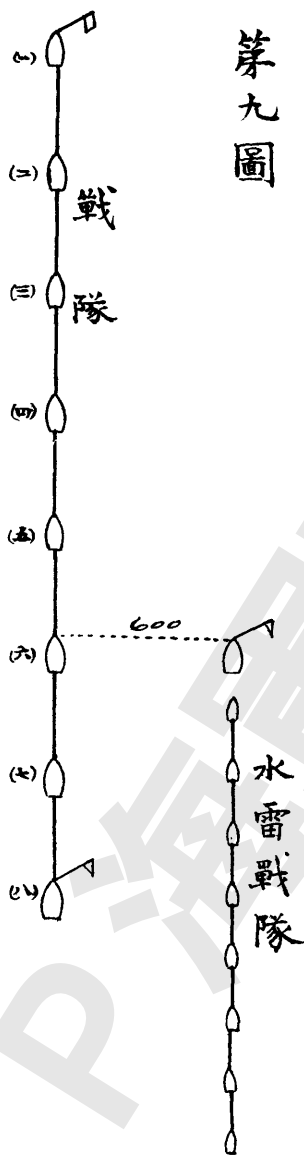
此隊制ハ簡約ヲ趣旨トシ、凡テ前記六箇戰隊ノ隊制ニ準據ス。即チ三箇水雷戰隊ノ各聯隊ヲ本位トシ、六箇水雷聯隊ヲ以テ合成スルモノトス。但シ各聯隊ノ基準間隔ハ四百米突トシ、内外百米突ノ伸縮ヲ許シ、各水雷戰隊ノ指揮艦(通報艦)ハ其麾下先任聯隊ノ先頭ニ占位スルモノトス

○六箇戰隊及三箇水雷戰隊ノ隊制

大艦隊ヲ操縦スルニハ大抵其戰隊ト水雷戰隊トヲ各別ニ集團シ、二團ト成シテ運用スルヲ便ナリトス。然レトモ亦時ニ全戰團部隊ヲ一團ニ集結シテ航行スルノ必要ナシトセス。是レ茲ニ此隊制ヲ設クル所以ナリ

此合同隊制モ亦簡約ヲ趣旨トシ、前記シタル六箇戰隊ノ四種隊形ヲ其儘變セスシテ、第九圖ニ示スカ如ク、水雷戰隊ノ各聯隊ヲ各戰隊ノ後側ニ於テ戰隊ノ六番艦ト六百米突ノ間隔ニ並頭セシメ、以テ全隊ノ隊形ヲ第十圖ニ示スカ如クス。但シ此圖ニ於テハ各戰隊及其配屬水雷聯隊ノ隊號ヲ全一ナラシメアルモ、作戰其他ノ必要ニ應シ、此配屬ヲ轉換シ得サルノ限リニアラス

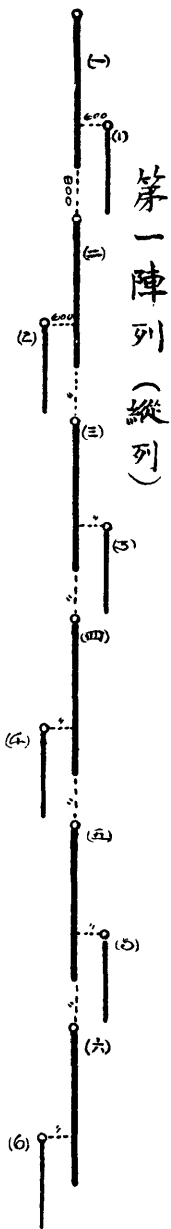
第九圖



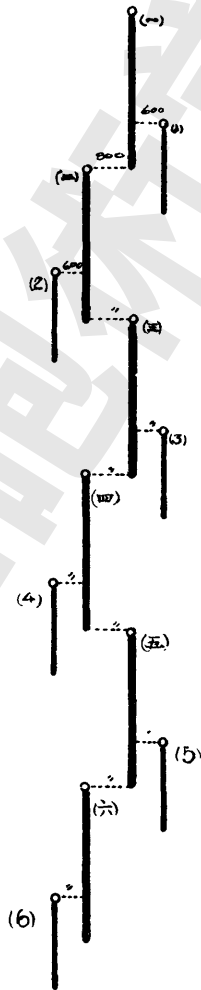
第

十

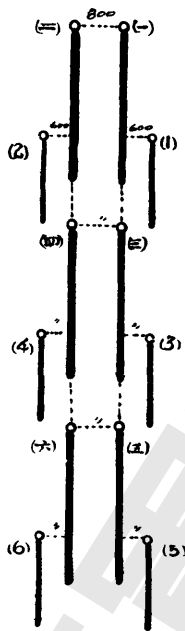
圖



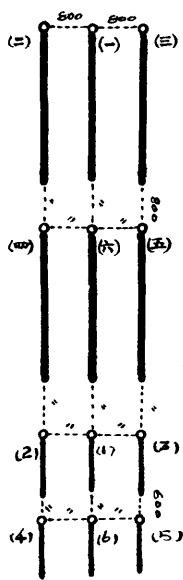
第一陣列 (縱列)



第二陣列 (鱗次列)



第三陣列 (並列)



第四陣列 (方列)

○之ヲ要スルニ、前段ニ列叙シタル大艦隊ノ各種隊制ハ之ヲ編組セル各部隊ノ基本隊形ヲ維持シ、危険ニ對スル安全ナル間隔ヲ保有セシムルト全時ニ、爲シ得ル限り之ヲ緊縮シタルモノナリ。故ニ其基礎タルヘキ各部隊ノ基本隊形整頓セサルトキハ大艦隊ノ隊制ハ成立スルモノニアラズ。若シ基本隊形ノ運用未熟ナル部隊ヲ以テ之ヲ形成セントスルトキハ適宜ニ此間隔ヲ伸長スルヲ安全ナリトス。然レトモ安全ノミヲ希フトキハ、到底戰術及戰略上ノ要求ニ適應スヘキ緊縮隊形ヲ形成スルコト難ク、終ニ或ル程度迄ハ運用ノ妙技ニ依頼セサル可ラサルニ至ルモノニテ、熟練ナキ艦隊ノ運動ハ如何ニ安全ナル隊形ヲ以テスルモ尙ホ危険アルヲ免レサルナリ

第五章 艦隊ノ運動法

第一節 總 說

○艦隊ノ編制及隊形已ニ定マル、次ニ攻究スヘキモノハ艦隊ノ運動法ナリ。編制ト隊形ハ理想ノ整美ニ合フト雖モ、唯タ是レ不動不變ノ形以下ニ止リ、之ヲ形以上ニ活動セシムヘキ運動法其宜キヲ得サルトキハ、未タ以テ戰術上ノ諸要求ニ適應スル能ハザルナリ

○夫レ軍隊運動ノ方法種々アリト雖モ、其目的トスル處ハ、要スルニ左記ノ三件ヲ遂行セントスルニ外ナラサルナリ

一、所要ノ位地ニ其隊位ヲ移動若ハ靜止セシムルコト

二、所要ノ方向ニ其隊面(正面若ハ側面)ヲ變向セシムルコト

三、所要ノ形狀ニ其隊形ヲ變換セシムルコト

曰ク行進及停止、曰ク斜行進、側面行進、轉廻(即チ一齊回頭)、曰ク並步、早步、駟步(即チ微速半速原速)、曰ク正面變換、隊形變換等ノ如キ、皆ナ是レ前記ノ三目的ヲ達セントスル手段ニ過キス。而シテ手段ハ敢テ多技複雜ナルヲ要セス、單簡ニシテ其目的ヲ達スルニ最モ適良ナルモノノミヲ撰ミ、之レニ習熟練達スルヲ要義トス。銃隊操式及砲隊操式ニ於ケル各種運動法已ニ然リ。豈ニ艦隊操式(即チ所謂運動程式)ニ於テ然ラサ

ルノ理由アラシヤ。然ルニ由來列國海軍ノ艦隊操典ヲ見ルニ單一ナル運動ノ目的ニ對シ多様ノ運動法ヲ列記シ、甚シキニ至リテハ所要ノ目的無クシテ手段ノ末技ノミヲ掲クルモノアリ。是レ蓋シ前章ニ述ヘタル海戰中絶時代ニ於ケル歐洲海軍ノ虚飾的運動法ナルベシト雖モ、抑モ又本末ヲ顛倒セルモノニシテ、敵ニ對シ滴當ノ時機ニ滴當ノ兵力ヲ滴當ノ地位ニ在ラシメントスル戰術ノ要求スル處ニアラサルナリ。此故ニ茲ニ艦隊ノ運動法ヲ攻究スルニハ、敢テ從來ノ遺法ニ拘泥スルコトナク、唯タ能ク前記ノ三目的ヲ服膺シテ之ヲ遂行スルニ最モ適切ナル手段即チ方法ヲ求ムルヲ至當トス。以下本章ニ説ク處凡テ此趣旨ニ據レリ

○凡ソ運動法ノ何タルヲ問ハス、其要旨トスル處ハ其運動ノ目的ヲ達スルニ簡易ニシテ迅速ナルコト是レナリ。簡易ナラサレバ混雜ナル兵戰場裡ニ於テ安全ニ之ヲ遂行スルコト難ク、爲ニ友隊僚艦相撞亂スルノ危険ナシトセス。又迅速ナラサレハ以テ戰術上ノ要求ニ對シ戰勢ノ變化ニ即應スル能ハス、爲ニ屢々有利ナル戰機ヲ逸スルコトアルヘシ。故ニ簡易ト迅速ハ並立スルヲ要スト雖モ、簡易ノ安全ナルト迅速ノ危険ナルトハ往々相矛盾シテ、運動法ノ取捨ニ迷惑セサル可ラサルニ至ルコトアリ。例ハ現時ノ艦隊運動法ニ於ケル等速力逐次運動法(列艦各其速力ヲ變セズシテ逐次ニ其占位ニ着クモノ)ト異速力直行運動法(列艦各其速力ヲ増減シテ個々全時ニ其占位ニ着クモノ)ト其孰レヲ撰ムヘキヤノ如キモ、唯タ簡易ト迅速ノ程度ノ比較ニ外ナラサルナリ。然ルニ戰術上ノ見地ヨリセル要求ハ兩旨共ニ必要ニシテ、何レモ其極端ニ失スルヲ許サス。是ニ於テ此兩旨ヲ調和

スヘキ運用ノ熟練ヲ必要トシ、或ル程度迄ハ熟練ヲ以テ危険ヲ排除シ、又或ル程度迄ハ安全ノ爲ニ緩慢ニ甘シ、以テ適良ナル運動法ヲ案畫セサル可ラス。蓋シ熟練ヲ無視スルトキハ諸種ノ運動法悉ク危険ナラサルハナシ。若シ夫レ簡易ニシテ且ツ迅速ナルモノアレバ其直行運動タルト逐次運動タルトヲ問ハス、之レ吾人ノ先ツ採用セサル可ラサル運動法ナリ

○運動法其物ノ簡易ニシテ迅速ナルヲ要スルト全時ニ、之レガ實施ニ當リ必要欠ク可ラサルモノハ、運動ノ基本タル各單位ノ運動力要素ノ檢定ナリトス。運動力要素トヘ即チ第一章第四節ニ記述シタル速力即チ前進力、後退力及回轉力等是レナリ。此等要素ノ力量檢定サレサルトキハ假令運動法ハ適良ナルモノレヲ確實ニ實施スルコト難シ。故ニ海軍ニ於テハ豫メ各艦艇ノ運動力ヲ檢定シテ運動要表ヲ編纂シ之ヲ艦隊ニ配布ス。而シテ之レニ檢定記載スヘキ要項概チ左ノ如シ

- 一、前進及後退(各種速力)ニ對スル推進機關ノ回轉數
- 二、前進(各種速力)中、機關ヲ停止シテ艦ノ靜止スル迄ノ距離及時間
- 三、前進(各種速力)中、後退(各種速力)ヲ行ヒ艦ノ靜止スル迄ノ距離及時間
- 四、前進(各種速力)中、各種舵角ニ對スル回轉圈ノ縱長、橫長及回轉時間
- 五、前進(各種速力)中、片舷機ヲ停止シ、各種舵角ニ對スル回轉圈ノ縱長、橫長及回轉時間
- 六、前進(各種速力)中、片舷機ノ後退(各種速力)ヲ行ヒ各種舵角ニ對スル回轉圈ノ縱長、橫長及回轉時間

七、後退(各種速力)中、各種舵角ニ對スル回轉圈ノ縱長、橫長及回轉時間

(備考) 前記ノ前進(各種速力)トハ四節ヲ最小トシ以上二節乃至四節宛ヲ増加セルモノヲ謂ヒ、又(各種舵角)トハ五度ヲ最小トシ以上五度宛ヲ増加セルモノヲ謂フ

如上ノ檢定事項ハ實ニ多端ニシテ、之レカ實施ニ少カラサル時日ト勞力ヲ要スト雖モ、運動ノ基準タルヘキ此素識無クシテ艦艇ハ運用サレ得ルモノニアラス。若シ茲ニ眞實一艦ノ操縦ニ巧ミナル艦長アリトセハ、其人ハ多年ノ熟練若ハ周到ナル注意ニ依リ、必ス此素識ヲ有スル人ナリ。艦隊運動ノ基礎モ亦此ニ確立スルカ故ニ吾人ハ常ニ之レカ檢定ヲ怠ル可ラサルナリ。然リト雖モ此等檢定事項ヲ記載セル運動要表ナルモノハ終始必スシモ正確ニシテ、之レニ信賴シ得ヘキモノニアラス。何トナレハ艦船ハ其年齡ト共ニ機關ノ運轉力ヲ減耗スルノミナラス、艦底ノ清汚、風浪ノ強弱等ニ依リ常ニ一定ノ運動力ヲ發作スルモノニアラサレハナリ。此故ニ新ニ一艦艇ニ長タルモノハ必ス先ツ當時ノ現狀ニ於テ其艦ノ運動力要素ヲ檢定シ(少クトモ最重要ナル事項ニ就キ)然ル後艦隊ニ入りテ僚艦ト運動ヲ共ニスルヲ要ス

○以上ハ各單位ノ長即チ艦艇長トシテ留意スヘキ要件ナリ。然ルニ茲ニ又艦隊運動ノ實施ニ當リ、艦隊指揮官トシテ意ヲ用ユヘキ他ノ一要件アリ。他無シ、運動中常ニ艦隊各單位ノ意志ヲ統一整合スルコト是ナリ。本來軍隊ハ個々ノ意志ヲ有スル各單位ヨリ成レリ、此各單位ノ意志一致セサルトキハ右セントスルモノハ右シ、左セントスルモノハ左シテ、到底團隊トシテノ運動ヲ遂行スル能ハサルコト

論ヲ埃タス。故ニ之ヲ動カスニ號令ヲ以テシ、其發動令ニ依リ一齊ニ發動セシメ、號令ナキ限リ一舉一止ト雖モ各單位ノ隨動ヲ許サス、即チ號令ナルモノハ各單位ノ意志ヲ統一整合スル唯一ノ手段ナリトス。而シテ陸軍々隊ノ如キ小部隊ニ於テハ言令若ハ號音ヲ以テ號令シ得ト雖モ、艦隊ノ如キ音聲ノ傳達距離以外ニ排列セルモノニ對シテハ之レニ代フルニ信號ヲ以テシ、其ノ下ルヲ見テ發動セシムルコト吾人カ從來慣用セルカ如シ。斯クノ如ク號令ノ方法ハ軍隊ノ大小ニ準シ異レリト雖モ、其趣旨ノ存在スル處ハ唯タ各單位ノ意志ヲ統一整合スルニ外ナラサルナリ。艦隊ヲ指揮スルモノ若シ此趣旨ヲ服膺セスシテ、其麾下ニ對スル號令ヲ忽ニシ、濫リニ各單位ノ隨動ヲ許シ、或ハ其過動ヲ匡サ、ルトキハ、艦々ノ意志ハ漸次ニ其一致ノ結合ヲ失ヒ、率テ隊形ノ混亂撞着ヲ來スニ至ル、特ニ最モ留意スヘキハ艦隊ノ拔錨及投錨ノ時ニシテ、此際所謂便宜拔錨若ハ投錨等ヲ濫用シテ全隊ノ統御ヲ弛ムルトキハ、艦速ノ異同、風潮ノ影響等ハ艦々意志ノ不統一ト共ニ益々衝觸ノ危險ヲ増加シ、遂ニ又救済ス可ラサルニ至ルコトアリ。由來艦隊運動ニ於ケル過失ノ原因多クハ此コニ發シ、精細ニ之ヲ質セハ其責ノ指揮官ニ歸セサルモノ少シ、戒メサル可ラス。乃チ指揮官タルモノハ其麾下諸艦ノ錨ノ地ヲ離ル、瞬間ヨリ其ノ地ニ着クニ至ル迄、終始其號令ヲ嚴明ニシテ全隊ノ動機ヲ掌握シ、己ムヲ得サルノ外濫ニ其統御ヲ弛メサルヲ要ス

○以上艦隊運動法ノ目的及要旨并ニ運動ノ實施ニ關スル一二要件ヲ列記シテ之ヲ總說トシ、以下節ヲ

分テテ各種部隊ノ各種運動法ヲ説明セントス

第二節 戦隊及水雷聯隊ノ運動法

本節ハ主トシテ戦隊ノ各種運動法ヲ説明スルモノニシテ、此運動法ハ又水雷聯隊ニモ通用サル、モノナリ。但シ水雷聯隊ニハ其基本隊形以外ニ特種ノ並列隊形アルヲ以テ、其陣形變換ニ就キ、戦隊ト異ル點ノミヲ節末ニ附記セリ

又驅逐隊及水雷艇隊ノ運動法モ此運動法ニ準據スルモノトス

○戦隊運動ノ基準トシテ先ツ調定スヘキモノハ、之ヲ編組スル各單位ノ協定速力及回轉力ニシテ、即チ左記ノ如ク調定スルヲ通則トス

(速力)

全速 最劣速艦ノ全速ヨリ約二節ヲ減シタルモノトス

原速 通常ノ航海ニ必要ナル航行速力ニシテ大抵十節若ハ十二節トス

半速 原速ト微速ノ中間速力トス

微速 舵ノ効力ヲ失ハサル最小速力ニシテ大抵四節ヲ下ラス

(回轉力)

舵角 最大回轉圈ヲ有スル艦ノ最大舵角ヨリ約五度ヲ減シ、各艦之レニ相當スルモノヲ用ユ

此速力及回轉力共ニ二節及五度ノ餘裕ヲ置クコトハ運動ノ修正、隊伍ノ整頓及不虞ノ應急等ニ要スルモノニシテ、之ヲ豫備速力若ハ回轉力ト稱シ、必要ニ應シテ之ヲ用ヒ得ルモノトス。(原速ニモ亦二節ノ豫備速力アルモノトス)

若シ此豫備速力ナキトキハ戰隊ノ速力ヲ減セサル限り、一タヒ遠サカリタル列艦ノ距離ヲ復舊スルノ餘力ヲ有セス。又豫備回轉力無キトキハ一齊回頭等ヲ行フニ當リ、列艦互ニ回轉ヲ調整スル能ハサルナリ

○戰隊ノ運動ハ左記ノ各種ヨリ成レリ

- 一、行進及停止
- 二、速力變換及距離變換
- 三、一齊回頭
- 四、正面變換
- 五、陣形變換

即チ此順序ニ準ヒ、逐次ニ其運動法ヲ説明セントス

(一)行進及停止

○夫レ軍隊運動ノ基礎ハ行進ニアリ。行進ニ習熟セサル軍隊ハ未タ以テ他種ノ運動法ヲ教フルニ足ラス。艦隊ニ於テモ亦行進ノ教練最モ必要ニシテ、之レニ熟達セサル戰隊ニ一齊回頭、正面變換若ハ陣形變換等ヲ幾度行ハシムルモ、到底其ノ隊伍ノ整頓、隊形ノ正容及運動ノ敏速ヲ期シ得ヘキモノニアラス

○戰隊陣形ヲ以テ碇泊シアルトキ、之レニ行進ヲ起サシムルニハ、先ツ號令ヲ以テ一齊ニ錨ヲ抜カシ

メ(指揮官ハ豫メ錨時指定シ各艦ノ錨速度ヲ等一ナラシムルヲ要ス、)各艦靜止游離ノ姿勢ヲ得ルト全時ニ、必

メ(亦風潮ノ外感大ナルトキハ近錨ヲ以テ揚錨ノ作業ヲ區分スルモノトス)

要ニ應シ、回頭信號及方位信號ヲ以テ各艦ヲ全方向ニ向首セシメ、次テ速力信號ヲ以テ一齊ニ發動セシメ、隊伍ノ整頓スル迄少時微速又ハ半速ヲ保持シ、可成の速ニ原速行進ノ姿勢ニ移ルモノトス。之ヲ一齊拔錨法ト稱ス

此一齊拔錨ハ逐次拔錨ニ比スレハ簡易ニシテ迅速ナル拔錨法ニシテ、發動後ニ於ケル隊伍ノ整頓モ亦最モ迅速ナリトス。泊地狹隘ニシテ風潮ノ影響アルトキニ於テモ、尙ホ此法ハ各艦ノ意志統一サル、カ故ニ比較的安全ナルモノニシテ、此場合ニ於テハ發動ノ號令アル迄、各艦適宜ニ其機關ヲ運轉シテ其艦位ヲ保持スルヲ要ス。戰術上ノ要求ハ戰隊カ常ニ列伍ヲ整頓シテ敏速ニ運動シ得ルノ姿勢ニアルコトニテ、碇泊中不時ニ敵ノ出現ニ應シ機動セントスルニ當リ、拔錨發動及列伍ノ整頓ニ長時間ヲ徒費スルトキハ、屢々有利ナル戰機ヲ逸スルノミナラス、却テ敵ニ乘セラレ不利ノ境遇ニ陥ルコトアリ。一齊拔錨ハ此要求ニ對シ最モ適應スルモノナリ

泊地ニ於ケル風潮ノ外感著シク強大ナルカ、或ハ初メヨリ陣形ヲ以テ碇泊シアラサルカ爲メ、港内ニテ隊伍ヲ整頓シテ發動行進スル能ハサルトキハ、通常逐次拔錨法ヲ用ユ。即チ各艦ヲシテ近錨迄一齊ニ錨鎖ヲ縮メシメ、次テ隊列ノ序位ニ準ヒ逐次ニ錨ヲ抜き、先ツ開距離ニテ港外ニ出テ、然ル後陣形ヲ形成シテ行進スルモノナリ。此拔錨法ハ比較的時間ヲ要スルカ故ニ其必要アル場合ノ外之レヲ用ヒス。而シテ若シ此場合ニ於テ常距離ヲ以テ出港セントスルトキハ却テ初メヨリ一齊拔錨法ニ依ルヲ安

全ナリトス

以上二種ノ拔錨法ノ外尙ホ所謂便宜拔錨ノ法アリト雖モ、此便宜ノ範圍不確實ニシテ各艦意志ノ不統一ヲ來シ、危險ノ原因タルカ故ニ宜シク之ヲ廢止スルヲ要ス

戰隊洋中ニ漂泊シアルトキ行進ヲ起スニハ、「行進ヲ起セ」ノ號令ト共ニ行進方位ヲ指示シ、嚮導艦ハ直ニ發動シテ微速又ハ半速ヲ以テ指示方位ニ向針シ、各後續艦ハ隊列ノ序位ニ準ヒ之ニ續航シ、隊伍整頓スルト全時ニ原速ニ増速行進スルコト拔錨ノトキニ於ケルカ如シ

○前段ニ列記セルカ如ク、戰隊已ニ原速ニテ行進スルニ至レハ、其嚮導艦ハ終始一定ノ速力ト針路ヲ保持シ、後續ノ諸艦ハ嚮導艦ヨリ逐次ニ制規ノ距離ヲ保持、若シ過不及アルトキハ、適宜速力ヲ増減シテ（要スレハ豫備速力ヲ用ヒテ）制規ノ隊形ヲ維持スルモノトス。然レトモ斯ク言フハ易ク行フニ難ク、常ニ不變ノ距離ヲ保持シテ、隊伍ノ整頓ヲ亂サザルコトハ長時日ノ練磨ヲ要スルモノニテ、行進中屢々機關ノ回轉數ヲ増減スル列艦アル間ハ未タ行進ニ習熟シタルモノニアラサルナリ。故ニ各艦ハ行進ノ初メニ當リ、斷ヘス其前續艦ニ對シ、機關ノ回轉數ヲ調整シ終ニ一定不變ノモノヲ檢定シ得ル迄之ヲ繼續スルヲ必要トス。若シ單ニ既定ノ運動要表ノミニ頼ルトキハ、艦艇當時ノ現狀等ニ依リ著シキ差隔ヲ發見スルコト多シ。斯クシテ所謂一糸亂レス、其餘カナル林ノ如ク行進シ得ルニ至レハ、即チ熟練ノ域ニ達シタルモノニテ、是ヨリ夜中航行又ハ霧中航行ニ移ルモ寸毫ノ危險アルコトナク、又一齊回頭及正面變換

等ヲ續行スルモ隊列ノ壞亂スルコト少シ。蓋シ艦隊運動ノ教練中行進ヲ以テ最も重要トス

(附記) 霧中航行ノ際往々開距離半速等ヲ用ルコトアレトモ、之レ却テ危險ニ近ツクコト多シ。何ト

ナレハ開距離ハ音響ノ到達ヲ鈍クシ(常距離航行ニ於テモ風下一番艦ノ砲聲カ風上ノ五番艦ニ達セザリシ實例アリ)半速及微速ハ速力ノ調整ヲ失

ハシメ、率テ列艦距離ノ伸縮ヲ來セバナリ(半速及微速ノ步調ハ原速ノ如ク整ハサルヲ常トス)

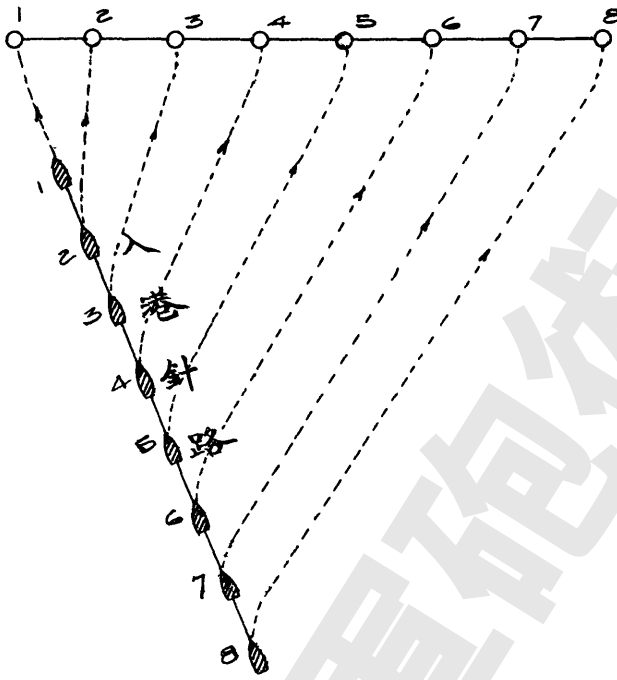
○行進セル戰隊ヲ停止セシムルニハ、時ノ要求ニ應シテ先ツ漂泊若ハ投錨ノ準備ヲ號令シ、風潮ノ影響ニ考へ、適宜ニ半速及微速ニ減速シ、然ル後機關ヲ停止シ直ニ後退ヲ行ヒ靜止スルモノトス。此時半速ノ時間ハ原速ノ惰力消滅スル迄トシ、次テ微速トナシ半速ノ惰力消滅スルト全時ニ停止後退ヲ行フヲ通例トス。若シ減速ノ時間長キニ過キルトキハ列艦距離ノ調整ヲ失ヒ、從テ隊伍ノ整頓ヲ亂ルモノナリ。故ニ漂泊若ハ投錨セントスル位地豫定シアルトキハ、減速ヲ初ムヘキ位地ヲ豫測スルヲ要シ、通常ノ原速ヲ以テ風潮ノ外感ナキ場合ニハ此距離概チ一千乃至二千米突ノ間ニアリ

停止ノ後戰隊ヲ漂泊セシムルニハ、風潮ノ方向ニ考へ、漂泊方位ヲ指示スルヲ可トス。漂泊中各艦區々ニ向首スルトキハ、再ヒ行進ヲ起スニ少カラサル時間ヲ費スヘシ。但シ長時間ノ漂泊ノ場合ニハ通常先ツ開距離ニ變シ横列若クハ梯列ヲ以テスルヲ安全ナリトス

又停止ノ後投錨スルニハ、通常停止後退ヲ行ヒ艦速全ク靜止スルニ及ンテ、列艦號令ニ依リ一齊ニ投錨スルヲ例トス。之ヲ一齊投錨法ト稱ス(艦速ノ惰力不同ニシテ距離ノ調整不良ナルトキハ各艦多少ノ修正ヲ行ヒ相前後シテ投錨セシムルコトアリ)

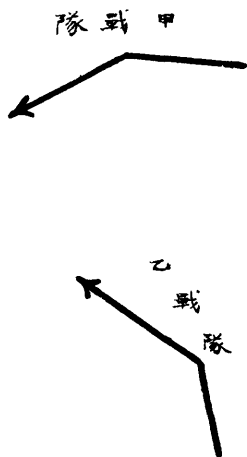
此一齊投錨ハ碇泊陣形ヲ形成スルニ最簡ニシテ且ツ最モ安全ナル方法ナレトモ、戰隊若シ開距離ニテ入港シ常距離ノ碇泊陣形ニ投錨スルカ、或ハ碇泊陣形カ入港ノ陣形ト全シカラサルカ、或ハ又第十一圖ニ示スカ如ク入港ノ針路カ碇泊線ト一致セサルトキハ、逐次投錨法ニ據ラサル可ラス。但シ此場合ニ於テモ可成的長ク入港陣形ヲ維持シテ全隊ノ統御ヲ弛メス、先頭艦カ殆ント投錨セントスルトキ「逐次ニ投錨セヨ」ノ信號ヲ下シ、列艦ヲシテ各自ノ錨位ニ直行投錨セシムルヲ可トス。若シ此ノ解列

第十圖



早キニ過キルトキハ忽チ各艦意志ノ不統一ヲ來シ、爲ニ衝觸ノ危險ニ陥ルコトアルヘシ
 戰隊一齊ニ双錨泊ヲ行フニハ微速ヨリ停止スルト全時ニ第一錨ヲ投下シ、惰力ニ依リ適當ノ距離ヲ前進シ第二錨ヲ投下スルト全時ニ後退スルヲ通例トスレトモ、形容ノ整美ヲ貴フ英國艦隊等ニテハ半速ヨリ停止シテ第一錨ヲ投下スルモノ多シ

第二十圖



前記一齊及逐次投錨ノ外尙ホ便宜投錨ノ法アリテ、泊地ノ情況豫知ス可ラサル場合等ニ之ヲ用フルコトアリト雖モ、便宜拔錨ト等シク其危險ノ度少カラサルヲ以テ、已ムヲ得サルノ外之ニ據ラサルヲ可トス。而テ若シ之ヲ用フル場合ニ於テモ、爲シ得ル限り最終ノ時機迄入港陣形ヲ保持スルヲ必要トス之ヲ要スルニ投錨ノ迅速ニシテ安全ナルハ一齊投錨ニ如クモノナキヲ以テ、數箇ノ戰隊全地ニ碇泊セントスル場合等ニハ各戰隊ノ一齊投錨ヲ行ハシムルヲ可トス。然ラサレハ獨リ投錨ニ長時間ヲ徒費スルノミナラス、碇泊陣形ノ整頓得テ望ム可ラサルナリ

(二) 速力變換及距離變換

○戰隊行進中速力ヲ變換スルノ必要ハ平戰兩時共ニ屢々之アルモノニシテ、特ニ戰闘中ニ於ケル戰術上ノ要求最モ大ナリ。例ハ第十二圖ニ示スカ如ク、甲戰隊ハ其敵タル乙戰隊ニ對シ、今ヤ敵ノ先頭ヲ壓シテ我カ全線ノ砲火ヲ敵列ノ一端ニ集中セントスル好位ヲ制スルモ、其儘前進スルトキハ須臾ニシテ此有利ナル戰勢ヲ失ハサル可ラス。此時若シ之ヲ長ク保續セントスルニハ其速力ヲ減スルヲ最上トシ、轉廻(十六點)之ニ亞ケリ。此ノ如キ

ハ實戰ニ於テモ亦兵棋演習ニ於テモ吾人ノ屢々經驗セル處ニシテ、戰術上速力變換ノ必要アルハ此一例ヲ以テ知ルニ足ルナリ。固ヨリ速力變換ハ隊伍ノ整頓ヲ亂リ易キカ故ニ可成之ヲ避ケサル可ラスト雖モ、己ニ斯ノ如キ必要アリトスレバ、宜シク其方法ヲ盡シテ之レニ熟練セザル可ラス。而テ其最簡ノ方法ハ速力ヲ第一戰鬪速力(通常ノ全速ヲ用ユ)第二戰鬪速力(第一ト第二戰鬪速カトノ中間速力)第三戰鬪速力(通常ノ原速ヲ用フルナ可ナリ)及第四戰鬪速力(是亦通常ノ半速ヲ用ユ)ノ四種ニ區別シ、號令ニ依リ列艦一齊ニ増速若ハ減速セシムルニアリ。蓋シ多度ノ訓練ヲ積ムトキハ必ツ容易ニ變速シ得ルニ至ラン。唯タ之レニ對シ或ハ機關部員ノ異議アルヘシト雖モ、此ノ如キ戰術思想ヲ持シテ其機關ヲ制御スル能ハサルカ如キ機關官ハ將校ト戰功ヲ分ツヘキ戰士ニアラサルナリ

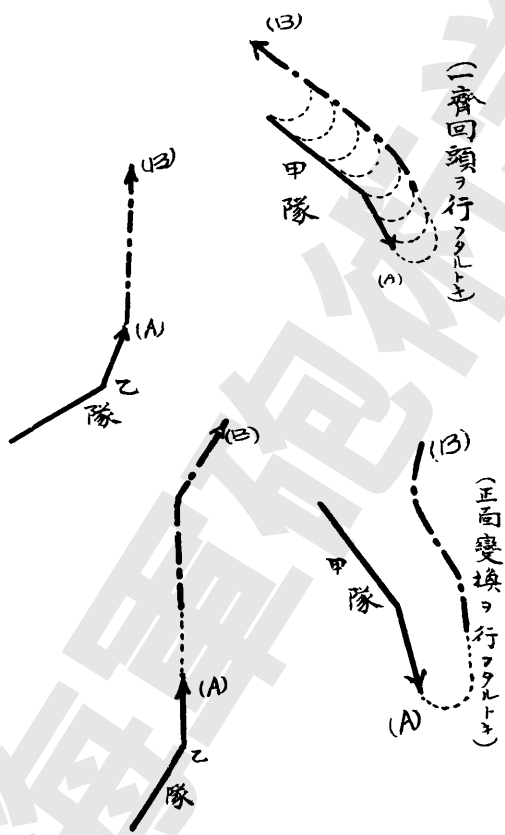
○戰隊行進中列艦距離ヲ伸縮スルコトモ亦時々ノ必要アリトス、狹水道ノ通航、小港ノ出入、漂泊ノ前後、大艦隊ノ運動等即チ是レナリ。其方法「開距離(戰隊ハ八百米突、驅逐隊ハ四百米突)ニ配列セヨ」「常距離ニ配列セヨ」若ハ「列艦距離ヲ何百米突ニ伸(縮)セヨ」等ノ號令ニ依リ、伸長ノ場合ニハ殿艦ヨリ、又短縮ノトキハ先頭艦ヨリ逐次ニ減速シテ距離ヲ伸縮シ、所要ノ距離ヲ得ルニ及ンテ一齊ニ原速ニ復スルニアリ

(三)一齊回頭(斜行進、側面行進及轉廻)

○艦隊運動ノ目的ノ一タル「所要ノ位地ニ隊位ヲ移動セシムル」ニハ一齊回頭ヲ以テスルヨリ迅速ナルハナク、若シ此目的ニ對シ正面變換等ヲ應用スルトキハ、戰術上ノ要求ニ應シテ戰機ヲ獲得スル能

第三十圖

ハサル場合甚タ多シ。例ハ第十三圖(A)ノ位地ニ於テ甲隊カ其敵タル乙隊ノ其後尾ニ出ントスル運動ニ即應セントスルニハ、直ニ十六點ノ一齊回頭ヲ行フノ外ナク、此際若シ正面變換ヲ行ヘバ下圖ニ示スカ如ク、單ニ現下ノ好位ヲ失フノミナラス、却テ不利ノ對勢ニ陥ルコトアリ。戰隊ノ運動法トシテ一



齊回頭ノ必要ナルコト之ヲ以テ知ルニ足ルナリ。而テ此運動法ニ熟練スルノ要義ハ、先ツ行進運動ニ依リ速力ノ調整ニ習熟スルト同時ニ回轉(轉舵)ノ調整ニ熟達スルニアリ。單ニ一定ノ舵角ヲ以テ回頭スルトモ、決シテ一齊回頭ノ妙域ニ練入シ得ラルヘキモノニアラス

○一齊回頭ノ號令法ニ左記ノ二様アリ

一、回頭ノ方向及角度ヲ全時ニ指示スルモノ

二、先ツ回頭ノ方向ノミヲ示シ其角度ハ回頭ヲ終リタル後必要アレハ之ヲ指示スルモノ

前者ハ即チ普通ニ常用サル、號令法ニシテ、此信號ヲ下スト全時ニ各艦轉舵ヲ始メ、約二十秒ノ後協定舵角ニ達セシメ、指示ノ回頭角度ニ達スル約二十秒前ニ轉舵ヲ弛ムルモノナリ。此轉舵ノ時間ハ指揮官豫メ之ヲ指示スルヲ要シ、各艦ハ之ヲ標準トシテ其轉舵ノ速度ヲ調整スヘキモノトス。(艦型輕質ニ依リ操

舵ヲ始メテヨリ回轉ヲ始ムル迄ノ時間ニ異同アルモノナリ)又後者ハ單ニ右舷回頭若ハ左舷回頭ノ一旗信號ヲ檣頭ニ全揚シ、之ヲ半下スル

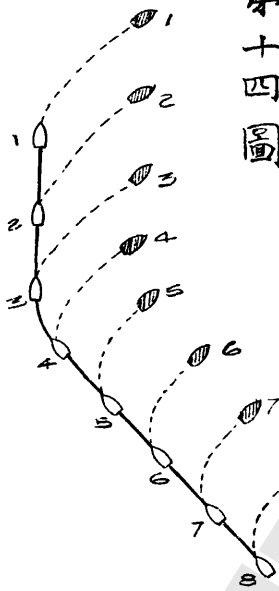
ト全時ニ各艦前法ノ如ク轉舵シ再ヒ之ヲ全揚スルト全時ニ各艦轉舵ヲ弛メ、次ニ之ヲ全下スルト全時ニ、基準艦ニ倣ヒ各艦其方位ニ直進スルモノニシテ、要スレハ最後ニ方位信號ヲ揭示ス。此後法ハ往年英國海軍ニテ之ヲ試用シタルコトアルモ、前法ニ比シ著シキ利益アラサルヲ以テ、其後之ヲ襲用セルヲ聞カス。且ツ同型同質ノ艦船ヲ以テ戰隊ヲ編組スルニアラザレハ較ヤ危險ニシテ之ヲ施シ難シ。

故ニ一齊回頭ハ簡易ナル前法ノミヲ以テ號令シ、各艦ヲシテ轉舵ノ調整ニ熟練セシムルヲ可トス

○一齊回頭ノ運動法ニモ亦二種アリ。即チ(一)直列一齊回頭法(二)曲列一齊回頭法是レナリ

前者ハ普通ノ方法ナレバ茲ニ説明ヲ要セス。後者ハ隊列ノ彎曲屈折セル場合ニ行フモノニシテ、戰術上ノ要求ハ却テ直列ヨリモ曲列ニ多シトス。何トナレハ八隻ノ單列戰隊ハ戰闘中直列ヲ維持スル場合

第十四圖



比較的少ク、而カモ其ノ一齊回頭ヲ要スル戦機ハ大抵僅ニ二分時ノ經過ヲ許サ、ルヲ以テナリ。若シ戦闘中曲列ニテ一齊回頭ヲ行ハサルモノトスレバ、其戦術上ノ不利忍フ可ラサルモノアリ。而テ戦闘中ニ於ケル戦隊ノ曲列ハ其屈曲ノ角度四點ヲ超フルコト少キヲ以テ、曲列一齊回頭法モ屈曲度四點以内ニアル場合ニ制限シ、之ヲ外方回頭及内方回頭ニ區別シテ其方法ヲ制定スルヲ適良トス。即チ外方回頭角度ハ十六點迄制限アラサルモ、内方回頭角度ハ危険ヲ豫防スルタメ四點以内ニ制限スルモノトス。(内方回頭角度ハ常ニ曲列ノ先頭艦ノ艦首方位ヲ基準トシテ指示ス)例ハ第十四圖ニ於テ四點ノ屈曲度ヲ有セル曲列戦隊カ内方ニ其最大

一齊回頭(四點)ヲ行ヘハ圖示ノ如キ屈曲セル梯
横列トナルカ如シ

○之ヲ要スルニ一齊回頭ハ列艦轉舵ノ調整ニ習熟スルヲ最要トシ、其號令法及運動法等ハ頗ル簡易ナルモノナリ。而テ之ヲ訓練スルニハ先ツ小角度ノ直列回頭法ヨリシ、毎回一々基本隊形ノ單縦陣ニ復元シテ漸次ニ大角度ニ及ホシ、已ニ直列回頭ノ熟練ヲ得ルニ至リテ次ニ曲列回頭法ノ教練ニ入ルヲ通則トス

(附記) 凡テ一齊回頭ニ於テ、通報艦ハ其占位ニ於テ回頭スルモノトス

(四) 正面變換

○正面變換ハ主トシテ艦隊運動ノ第二ノ目的タル「所要ノ方向ニ隊面ヲ變向スルコト」ニアリ。但シ戰隊ハ主トシテ其側面ヲ以テ戰闘スルカ故ニ其正面變換ハ取りモ直サス側面變換ヲ目的トセルモノナリ。夫レ艦隊戰闘ニ於テ戰術ハ各艦ノ戰闘力ヲ最大ニ發揮スルヨリハ先ツ之ヲ均一ニ發揮スルコトヲ要求シ。列中ノ艦々其戰闘力發揮ノ度ニ過不及アルヲ好マラス。艦隊運動ニ於ケル正面變換ハ本來主トシテ此要求ニ基キテ生スルモノナリ

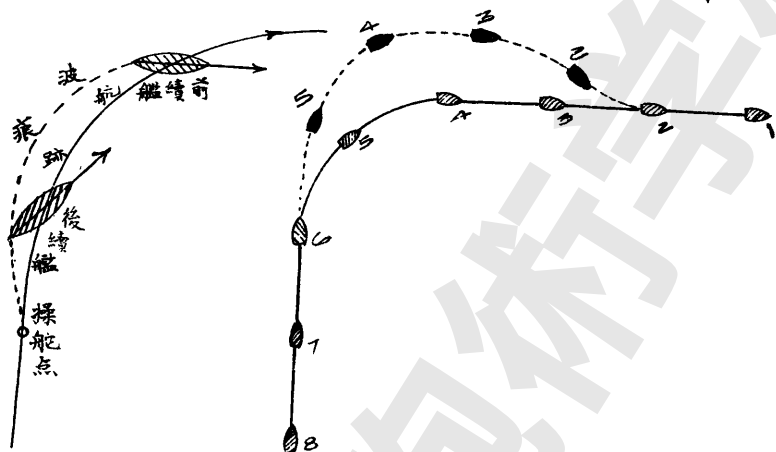
○戰隊基本隊形ノ正面變換ニ二種アリ。即チ嚮導艦ニ倣ヒ逐次運動ヲ以テスルモノ、及基準艦ニ倣ヒ直行運動ヲ以テスルモノニシテ、前者ハ普通ニ行ハル、處ナルモ、後者ハ近來英國海軍將校ノ一部ニ於テ唱道實行サル、モノナリ。乃チ左ニ順次之ヲ説明セントス

○逐次運動正面變換ハ其號令ニ依リ嚮導艦ハ直ニ指示ノ方位ニ回頭シ、後續ノ諸艦ハ嚮導艦ノ回轉シタル位地ニ至リテ、逐次ニ新正面ニ回頭シテ隊列ヲ保持スルモノナリ。此運動ハ一見簡易ナルカ如クニシテ其實然ラス、多度ノ練磨ヲ經サレバ正當ニ前續艦ノ航跡ヲ踵テ回頭行進スルコト難シ。今試ニ新ニ編成サレタル戰隊ヲ以テ右若クハ左八點ノ正面變換ヲ行ヘバ、必ツ其航跡ハ第十五圖ノ點線ニ示スカ如ク外方ニ彎出シ、從テ列艦ノ距離漸次ニ増大スルヲ發見スヘシ。之レ列艦逐次ニ正當ノ航跡

圖六十第

圖五十第

第五章 艦隊ノ運動法



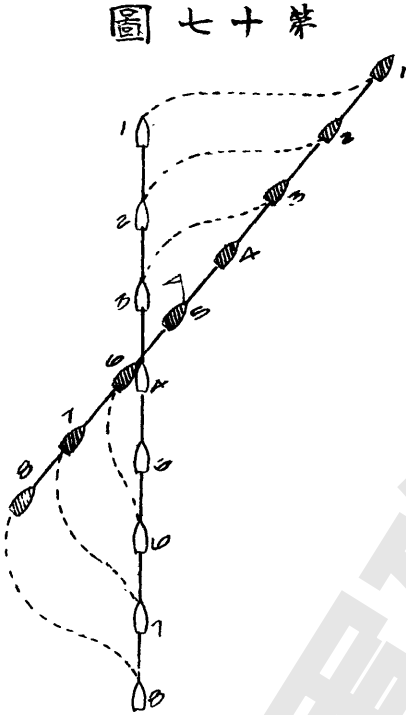
ヲ行進スル能ハサルカ爲メナリ。而テ其主ナル原
 因ハ前續艦ノ艦尾ノ波痕ウエーキカ回轉ノ爲メ其真正ノ航
 跡ヨリ外方ニ彎出シ、後續艦ハ見ル能ハサル真正
 ノ航跡ヨリハ眼界ニ映スル此波痕ニ準フテ轉舵ス
 ルヲ以テナリ。故ニ各後續艦ハ轉舵ノ數理ニ基キ、
 恰カモ前續艦ノ前檣附近ニ向首スルカ如ク操舵
 シ、其波痕ノ内方ニ深入シテ行進スルヲ要スルコ
 ト第十六圖ヲ見テ知ルニ足ルナリ

戰隊此運動法ニ熟練セサルトキハ戰闘中屢々其正
 面ヲ變スル毎ニ列艦ノ距離ハ須臾ニシテ益々伸長
 シ、各後續艦ハ其豫備速力ヲ全用スルモ之ヲ復舊
 スルコト能ハス、終ニ隊列過長トナリ操縱
 意ノ如クナラサルニ至ラン。而テ平時之レ
 ヲ訓練スルニハ、先ツ小角度ノ正面變換ヨ
 リ漸次ニ大角度ノモノニ及ホシ、之レニ習

熟シタル後更ニ蛇行運動ヲ以テ不期雜多ノ正面變換ヲ續行スルニアリ

○直行運動正面變換ハ英國海軍大學教官メー大佐ノ創意セルモノニテ、所謂D.O.運動法是レナリ。其目的トスル處ハ正面變換ヲ可成の迅速ニシテ戰陣ノ必要ニ應セントスルニアリ。其方法正面變換ノ角度ヲ四點以內ニ制限シ、隊列ノ中央ニ位スル二艦(十二隻編制ノ戰隊ナレバ四隻)ヲ基準艦トシ、此號令ニ依リ第十七圖ニ示スカ如ク基準艦ハ直ニ減速シテ新正面ニ逐次回頭シ、又前後ニ位スル爾餘ノ列艦ハ増速シ直行運動ヲ以テ新列位ニ着キ、基準艦ノ標準旗ノ下ルヲ以テ原速ニ復スルモノトス

此直行運動法ハ逐次運動ノモノニ比シ理想上有利ナルカ如シト雖モ、速力ヲ變更スルヲ以テ隊形ヲ壞亂シ易ク、之ヲ戰場ニ實用スルニハ充分ナル訓練ヲ積マザル可ラス。加之其信號了解ノ時間ヲ計算スル



トキハ旗艦先頭ニ立チ其發意ト全時ニ逐次運動ヲ以テ正面ヲ變換スルモノト其速度ニ於テ大差アラズ。故ニ未タ之ヲ適良有利ノ運動法ト認め難ク、唯々參考トシテ茲ニ附記スルモノナリ。若シ強テ之ヲ實用的運動法トセンニハ、減速セザル程度ニ於テ、隊列ノ前部ニアル諸艦ハ逐次運動ヲ以テ正面變

換ヲ行ヒ、隊列ノ後部ニアルニ艦若クハ三艦ノミニ直行運動ヲ取ラシムルヲ適良ト認ム

○戰隊ノ正面變換ハ其基本隊形ニアラサル場合。即チ單橫陣及單梯陣ニ於テモ之ヲ行フノ必要アリ。而テ其方法ニモ亦逐次及直行運動ノ二法アリ。即チ逐次運動ヲ以テスルモノハ必ス先ツ基本隊形ノ單縱陣ニ復シテ正面變換ヲ行ヒ、又直行運動ノモノハ正面變換ノ角度ヲ四點[●]以內ニ限り、內方諸艦ノ減速ト外方諸艦ノ増速ニ依リ、恰カモ銃隊ノ橫隊正面變換ノ如ク之ヲ行フモノトス。然レトモ戰場ニ於ケル要求ハ大抵前者ヲ以テ充シ得ルナリ

(附記) 凡テ正面變換ニ於テ、通報艦ハ新正面ニ於ケル制規ノ位地ヲ占ムルカ如ク、適宜ニ速力ヲ加減シ、適宜ノ舵角ヲ以テ轉舵スルノモトス

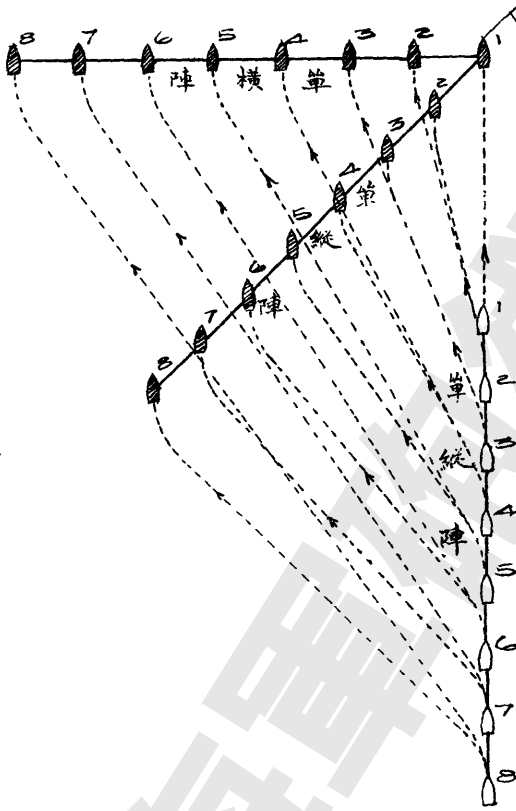
(五)陣形變換

○戰隊ノ陣形ハ其基本隊形タル單縱陣ノ外單橫陣及單梯陣ノ二變形アルノミ。戰術上ニ於ケル此三種陣形變換ノ要求ハ之ヲ一齊回頭及正面變換ニ比スレハ極メテ少シ。何トナレハ戰隊ハ大抵基本隊形ニテ戰鬪スルヲ有利トスル場合多ケレバナリ。然レトモ亦時ニ其必要無キニアラサレバ、其運動法ノ制定ナカラザル可ラス

○陣形變換ノ運動法ニモ逐次運動及直行運動ノ二法アリ。前者ハ即チ先ツ逐次運動ヲ以テ其正面ヲ變換シ、次テ一齊回頭ヲ以テ所要ノ陣形ヲ形成スルモノニテ

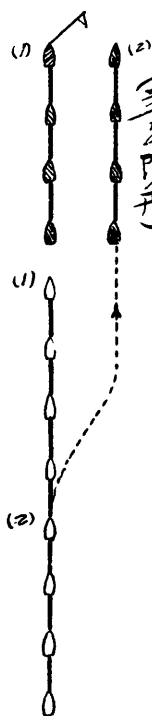
(單橫陣及單梯陣ヨリ單縱陣ニ變形スルニハ之ニ反シ先ツ一齊回頭ヲ行ヒ次ニ正面ヲ變換ス)取リモ

第 十 八 圖



直サス正面變換ト一齊回頭ヲ續行スルニ全シ。故ニ特ニ此運動法ヲ制定スルノ必要無ク、却テ之レガ爲ニ別種ノ號令法ヲ設クルノ繁ヲ省クヲ可トス。加之此二次ノ運動ヲ一號令ニテ續行セシムルコトハ變化ノ急速ナル戰勢ニ即應セントスル戰術ノ要求ニ適セサルモノニテ、已ニ其第一次ノ正面變換ヲ行ヒタル後第二次ノ一齊回頭ヲ行ハサルヲ可トスル場合少カラサルナリ

直行運動ヲ以テスル陣形變換ハ第十八圖ニ示スカ如ク、運動ノ基準タル嚮導艦ハ減速ニテ直進シ、爾



第十九節
並列隊形

餘ノ列艦ハ増速シテ新占位ニ直行シ基準艦ノ標準旗ヲ下スヲ以テ、新隊形ヲ形成シ原速ニ復スルモノトス。而テ此運動法ハ基本隊形ヨリ單梯陣若クハ單橫陣ニ變形スル場合并ニ單梯陣（單橫陣）ヨリ單橫陣（單梯陣）ニ變形スル場合ノ外之ヲ用ユルコト無シ。就中戰術上最モ必要多キモノハ單縱陣ヨリ二點ノ單梯陣ヲ形成スルモノニテ、此場合ニ於テハ殆ント減速セスシテ之ヲ行フコトヲ得

○前記セルモノ、外向ホ單縱陣ノ變形トシテ鱗次單縱陣アレトモ、其陣形變換ハ單ニ偶數番號ノ各後續艦カ其前續艦ノ斜後半點ニ移リ、又基本隊形ニ復スルニモ前續艦ノ直後ニ入ルニ過キサレバ、茲ニ其説明ヲ贅セス。要スルニ戰隊ノ陣形變換法ハ主トシテ前記直行運動ノモノノミニシテ、其他ハ凡テ正面變換及一齊回頭ヲ應用シテ其目的ヲ達シ得ルナリ

○水雷聯隊ノ陣形變換

水雷聯隊ノ基本隊形（單縱）ニ於ケル各種運動法ハ凡テ戰隊ノ運動法ニ全シ。唯タ其並列隊形ノタメニ

特別ノ陣形變換法ヲ要スルノミ。此運動法ハ至極簡易ニシテ、第十九圖ニ示スカ如ク先頭部隊ノ減速ト後尾部隊ノ増速ニ依リ之ヲ形成シ基準艦ノ標準旗ノ下ルヲ見テ原速ニ復スルニ過キス。而テ並列隊形ヨリ基本隊形ニ復ス

ルニハ唯タ後尾部隊ノ減速ヲ以テスルモノトス

第三節 大艦隊ノ運動法

本節ハ主トシテ六箇戰隊ヨリ編成サレタル大艦隊ノ各種運動法ヲ説明セルモノニテ、又之ヲ水雷戰隊ニモ通用シ得ルモノナリ

又此運動法ハ大艦隊編制ノ有無ニ拘ラス、二箇以上ノ戰隊若クハ驅逐隊等ガ集團シテ運動スルニ適用スルコトヲ得

○大艦隊ノ運動法ハ之ヲ編成セル各箇部隊ヲ運動ノ本位ト定メ、前節ニ述ヘタル戰隊運動法ノ如ク各艦ヲ本位トセルモノニアラス。即チ恰カモ銃隊操式ニ於ケル小隊運動ヨリ中隊運動ニ移ルカ如シ。故ニ其本位タル部隊各箇ノ運動ニ熟達セルニアラサレバ、此大艦隊ノ運動法ハ成立スヘキモノニアラズ。若シ夫レ各箇部隊ノ指揮官其麾下ノ操縦ニ熟練セルトキハ、大艦隊ヲ形成シテ集團運動スルニ大ナル困難ヲ感スルコト無シ

○大艦隊ハ其隊形ヲ保持シテ戰鬪スルコトナキヲ以テ、其運動ノ目的ハ主トシテ航行ニアリ。故ニ其運動法モ部隊各箇ノ一齊回頭ヲ行ハス、單ニ正面變換ノミヲ以テ行フモノトシ、之ヲ左ノ如ク種別ス

一、行進及停止 二、速力變換及間隔變換 三、正面變換及列向變換 四、陣列變換

乃チ此順序ニ準ヒ、以下逐次ニ其運動法ノ要領ヲ説明セントス

(一) 行進及停止

○大艦隊ニ於テモ亦行進ハ諸他運動ノ基礎ナリ。艦隊一地ニ碇泊シアルトキ、之レニ行進ヲ起サシムルニハ、常ニ第一若クハ第二陣列(縦陣列若クハ鱗次陣列)ニテ發動スルヲ例トシ、其號令ニ依リ各部隊ハ豫示サレタル序列(若クハ隊號)ニ準ヒ、逐次ニ拔錨發動シ(各部隊指揮官ノ號令ニ依ル)指示ノ隊形ヲ形成スルモノトス。此時其碇泊隊形カ航行隊形ト全キトキハ、各部隊殆ント全時ニ拔錨スルヲ要スト雖モ、若シ然ラサルトキハ其隊位ニ依リ自ラ多少ノ遲速ナカラサル可ラズ。故ニ主旨ニ於テハ各部隊ノ逐次拔錨ナルモ、時ニ後續隊カ前續隊ニ先チテ拔錨スル場合無シトセス。要スルニ各部隊其拔錨發動ノ時機ヲ適當ニ豫測シテ過不及ナカラシメ、以テ迅速ニ航行隊形ヲ形成シ、行進ノ姿勢ニ移ルニアリ

已ニ隊形整頓シテ行進スルニ至レハ各部隊ハ嚮導隊ニ準シテ其間隔ヲ保持シ、若シ過不及アレバ適宜其隊ノ速力ヲ増減シ、隊位ヲ變換シテ、其定位ニ着クヲ要ス。但シ大艦隊ノ隊制ハ間隔ニ於テ二百米突ノ伸縮ヲ許スモノトス

○行進セル艦隊ヲ停止投錨セシムルニモ、亦第一若クハ第二陣列ヨリスルヲ例トシ、其號令ニ依リ各部隊ハ陣列ヲ解キ、序列ニ準ヒ豫示サレタル碇泊位地ニ至リ逐次ニ投錨スルモノトス。此時泊地狹小ニシテ碇泊隊形混雜スルトキハ、入港前豫メ間隔ヲ増加スルヲ要ス

○漂泊中ヨリ行進ヲ起シ、又行進中ヨリ漂泊スルハ、凡テ前記拔錨及投錨ノ運動法ニ準ス

(二) 速力變換及間隔變換

○大艦隊行進シアルトキ全隊ノ速力ヲ變換スルコトハ平戰時ニ於ケル其航行日程ヲ調整スルタメ屢々其必要アリ。而テ其法増速ハ前續隊ヨリ、又減速ハ後續隊ヨリ逐次ニ之ヲ行フモノトス。但第三及第四陣列ニテ行進シアルトキニ限り、並頭セル諸隊ハ全時ニ速力ヲ増減スルヲ要ス

○間隔ノ變換モ亦出入港、漂泊等ノ場合ニ其必要アリ。其法閉間隔ノ場合ニハ前續隊ヨリ開間隔ノトキハ後續隊ヨリ逐次ニ減速シ、所要ノ間隔ヲ得ルニ及ンテ基準隊(最先任隊ヲ基準隊トスルヲ例トス)ノ標準旗ニ依リ各部

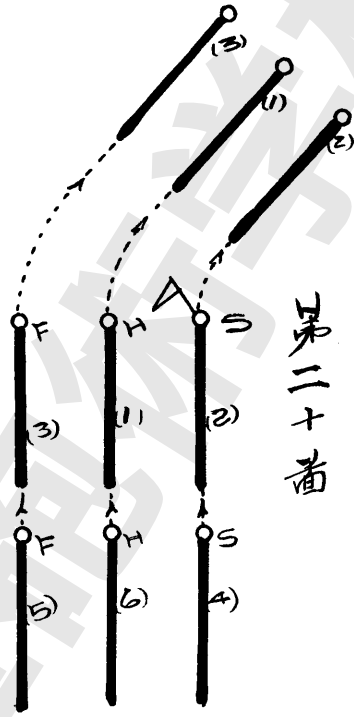
隊原速ニ復スルモノトス。但シ第三及第四陣列ニテ行進シアルトキニ限り、並頭セル諸隊ハ全時ニ減速スルヲ要ス

(三) 正面變換及列向變換

○正面變換ハ大艦隊ノ運動中最モ必要ナルモノナレトモ、其方法ハ比較的簡易ナルモノナリ。即チ第一陣列ニテ行進シアルトキハ、其角度ノ大小ニ拘ラス、各部隊單ニ嚮導隊ノ正面變換ニ準ヒ其通跡ヲ進ムニアリ

又第二、第三若クハ第四陣列ニテ行進シアルトキハ内方隊ハ減速シテ小圈ヲ旋廻シ、外方隊ハ増速シテ大圈ヲ旋廻シ、各部隊新正面ニ着クニ及ンテ、基準隊ノ標準旗ニ依リ原速ニ復スルモノトス。第二十圖ハ即チ第四陣列ニテ正面變換ノ一例ヲ圖示スルモノナリ。但シ此場合ニ於テハ正面變換ノ角度ヲ

第二十番



四點以內ニ限り、若シ其以上ヲ要スル
 キハ之ヲ二回以上ニ續行スルモノトス
 ○列向變換即チ戰隊ノ一齊回頭ニ類似ス
 ルカ如キ大艦隊ノ運動法ハ航行ノ目的ノ
 ミニ對シテハ殆ント其必要ナキカ如シ。
 然レトモ大艦隊カ陣列ヲ保持シテ敵ノ大
 艦隊ト觸接シ、未タ戰鬪ヲ開始セサル場
 合等ニハ、正面變換ノミヲ以テ其隊位ヲ

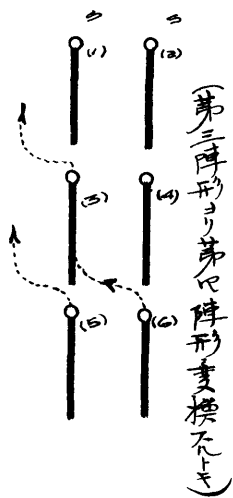
移動スルニ不便ヲ感シ、往々各部隊各箇ノ正面變換即チ列向變換ヲ有利トスルコトアリ。是レ特ニ此
 運動法ヲ設ケタル所以ナリ。而テ其運動法ハ總指揮官ノ號令ニ依リ各部隊一齊ニ正面變換ヲ行フニア
 ルノミ。但シ第三及第四陣列ヨリスルトキハ其變向ノ角度ヲ四點以內ニ制限セサル可ラス

此列向變換ヲ行フニ當リ特ニ留意スヘキハ其號令ノ通達速度ニシテ若シ之レニ長時間ヲ要スルトキ
 ハ、却テ正面變換ヲ用ルヲ敏速ナリトス

(四)陣列變換

○大艦隊四種ノ陣列變換ハ平戰時ヲ問ハス、屢々其必要アリ。例ハ第一陣列ニテ出港後第二陣列ニ變

第十二卷



シ、更ニ洋心ニ出テ、第三若クハ第四陣列ヲ形成シ、或ハ又敵ノ近接シ來ルヲ知リテ第二陣列ニ復スルカ如シ

此運動法ノ要領ハ基準隊ヲ基点トシ、各部隊各箇ノ正面變換及速力變換ヲ以テ新隊形ノ定位ニ着クニアリ。今左ニ其二例ヲ圖示シテ之レカ説明ヲ省略ス

第四節 結論

○以上艦隊ノ運動法ニ就テ説明セル處ハ、凡テ簡單ヲ主旨トシ、複雑ヲ避ケタリ。然リト雖モ此簡單ト思惟スルモノモ之ヲ實地ニ施ストキハ尙ホ未タ簡單ナルモノニアラサルナリ。彼ノ艦隊ノ正面變換或ハ一齊回頭等ノ如キ單一ナル運動法モ、之ヲ各種ノ速力ニテ施行スルトキハ一々其轉舵ノ調子ヲ異ニスシ、決シテ一朝一夕ノ練習ヲ以テ遂行シ得ラルヘキモノニアラス。加之平和ノ海上ニ於テハ已ニ熟達シ得タリト信スル運動モ、之ヲ戰陣ニ施スニ至レハ尙ホ且ツ其容易ナラサルヲ感スルヲ常トシ、戰場ニ敵ト對シ、戰勢ノ變化ニ即應シテ斷乎タル一回ノ一齊回頭ヲ決行スルニ躊躇スルカ如キハ未タ練達ノ域ニ達シタルモノト謂フ可ラス。艦隊ノ運動ハ恰カモ音樂ノ如ク、緩急ノ調子ニ連レ手指自カラ舉止スル迄ニ練磨スルヲ要シ、一音一曲一々艦隊操典否ナ樂符ニ對照シテ撥ヲ上下スル間ハ、未タ傾聽スヘキ奏樂ヲ合成スルモノニアラス。是レ本章ニ於テ運動法ノ形式ヲ可成的簡約ニシテ戰術上必要欠ク可ラサルモノ、ミニ止メ、主トシテ其實施上服膺スヘキ要點ヲ指摘シタル所以ナリ。若シ夫レ本章說ク處ノモノ尙ホ未タ複雑ニシテ其實行ニ困難アリトセハ、更ニ之ヲ削減スルモ可ナリ。要ハ分列式的ノ多技ニ淺熟センヨリハ寧ロ戰陣ニ必要ナル一術ニ精練シテ、如何ナル場合ニ於テモ虚心平氣ニ之ヲ實行シ得ルコト尙ホ伶人ノ音樂ニ於ケル如クナラシムルニアリ。斯ク運動法ノ實行確實ニ保證セラレタル後初テ戰術ヲ構成シ得ルニ足ルナリ、然ラザレハ戰術ハ唯タ紙上ノ死書ト化シテ之ヲ實地ノ活術

タラシムルコト能ハサルナリ

○吾人ハ最終ノ戰術要素トシテ、茲ニ艦隊ノ運動法ヲ講究シ了レリ。(一)戰鬪力ノ要素、(二)戰鬪單位ノ本能、(三)艦隊ノ編制、(四)艦隊ノ隊形ヨリ、順次ニ演繹シテ終ニ此コニ至リ、此等要素ノ基礎確立シテ初テ戰術ヲ言フニ足ルナリ、乃チ是ヨリ第二編ニ移リ、戰術ノ本領タル戰法ニ説及セントス

海軍基本戰術第一篇終